

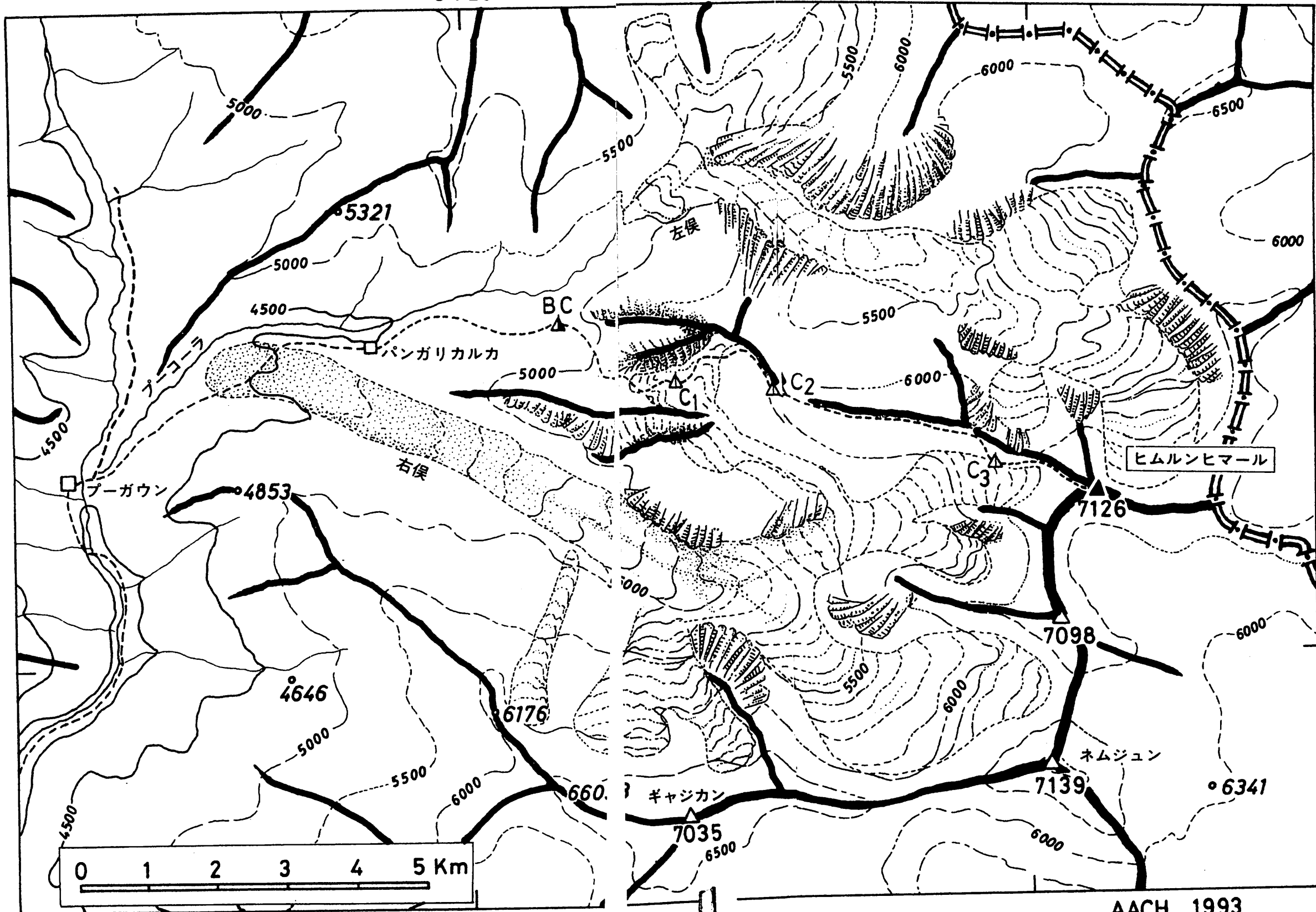
もうひとつのヒムルンヒマール

北大山の会

84°20'

84°25'

28°



AACH, 1993

もうひとつのヒムルンヒマール



北大山の会

序

北大山の会会長

山 田 真 弓

北大山の会・北海道大学山岳部のヒムルンヒマール登山隊が1992年10月3日に無事その初登頂に成功し、ここにその報告書が刊行されることになった。

北大山の会・山岳部の近年におけるヒマラヤ登山の歴史をここでくわしく述べる余裕はないが、最近では1980年12月にバルンツェ峰の、そして1982年12月にはダウラギリ I 峰の登頂に成功をおさめた。これらは北大山の会が山岳部創立50年の記念事業として計画され、その総力をあげて取り組んだもので、それまで長いあいだ培ってきた様々な経験が生かされての成功だったと思っている。

この度のヒムルンヒマール登山の計画がどのように進められたかの経緯については以下の本文中に述べられている通りであるが、ダウラギリ I 峰の成功のあと山の会会員何人かの間、山へ行きたい登りたいという鬱勃とした気持ちが集約されて、やがてこのヒムルンヒマールの計画に結集したものと思われる。ダウラギリ I 峰の時の気負いのような気持ちはそれほどなかったにちがいないが、しかし7000mをこえるヒマラヤの高峰の初登頂である、それなりの準備と研究は十分に行われたことは言うまでもない。

幸いにして今回の計画は成功に終わったが、かつてこの山城には電々九州山岳会や弘前大学山岳部などが登山を試み、弘前大学のパーティーは1983年にヒムルンヒマールの初登頂に成功したとされる。弘前大学の登頂したヒムルンヒマールはこのたびのヒムルンヒマールとは別の山であるが、これらの報告書などによってわれわれは多くの貴重な情報を得ることができ、それらは今回のわれわれの登山におおいに役に立ったのである。

またこのたびの成功にあたっては、全国の多数の後援者各位からの物心両面のご援助を頂いたほか、現地のネパールにおいても多くの方々のご協力を得た。本報告の刊行にあたって心からお礼を申し上げたい。

目次

序〔山田 真弓〕—— 1

序章

- ヒムルンヒマール その計画と実行〔丹羽由紀夫〕—— 6
ヒムルンヒマール考〔丹羽由紀夫〕—— 8
計画と行動概要—— 10
隊の構成—— 12

I 章・記録

- アプローチ—— 16
登攀—— 39
登攀活動〔花井 修〕—— 67

II 章・紀行と随想

- 輸送と登頂のこと〔清水 収〕—— 76
カン・ラ越え〔木崎甲子郎〕—— 78
もうひとりのヒムルン・ヒマール〔益田 稔〕—— 81
思い出すままのネパール〔河合 範雄〕—— 85
初めてのヒマラヤ〔斎藤 清克〕—— 88
遠征のあと〔石橋 英二〕—— 90
マルシャンディーカリガンダキ紀行〔名越 昭男〕—— 93

III章・考察

| | |
|------------------------|-----|
| ナルとプー〔小泉 章夫〕 | 104 |
| 医療報告〔山口 斌〕 | 112 |
| ヒムルンヒマール周辺の地形地質〔戸田 英明〕 | 120 |
| 1992年ネパール事情〔樋口 和生〕 | 123 |

IV章・資料

| | |
|--------------|-----|
| 食糧 | 128 |
| 装備 | 131 |
| 遠征隊日誌 | 134 |
| 協力者芳名簿 | 137 |
| 事務局報告〔高松 秀彦〕 | 140 |
| 会計報告 | 142 |
| 文献 | 143 |
| SUMMARY | 144 |

| | |
|------------|-----|
| あとがき〔西 安信〕 | 146 |
|------------|-----|

| | |
|----------------------|----|
| 地図 ヒムルンヒマールとアンナプルナ山域 | 11 |
| ヒムルンヒマール付近概念図 | 38 |
| ヒムルンヒマール西面ルート図 | 38 |



序 章

ヒムルンヒマール—その計画と実行—

丹 羽 由紀夫

1990年の秋、高松、山口(斌)、吉村会員らとネパールへ古都の散策とヒマラヤ観望ミニトレッキングに行った。その折、カトマンドゥで買い求めた二枚の地図にはマナスルのすぐ北西方にネムジュンという山が記載されている。ペリヒマール山群の最高峰らしい。しかし、文献を漁ってみてもネムジュンという山名は見つからなかった。そこでその山の近くにあるヒムルンヒマールについて調べてみた。その結果、詳細は別項で述べてあるように「もうひとつのヒムルンヒマール」の存在が浮かび上がってきた。

計画の初期段階では小規模な個人山行にしようと思っていた。個人負担で遠征経費を賄える隊にする予定であった。しかし、北大山の会の海外登山は厳冬期のダウラギリ I 峰の登頂以降長いブランクがあったことや、衰退してきている山岳部現役にたいして多少の刺激になればと考えたことや、この登山に対する山の会会員と登山隊との共感が得ればと思い、山の会の事業としての計画を提出することになった。

1991年3月、ヒムルンヒマール登山計画書を山の会会長に提出した。計画は数回にわたる理事会での検討を経て、総会で承認された。その実施方法は理事会により提案された「北大山の会の事業としての海外登山実行組織」により実行された。

一方、登山許可の申請は2回の海外遠征委員会の討議と、とりあえずの理事会の承認の上、北海道山岳連盟の推薦を受け、1991年6月に日本山岳協会に、更に外務省を経てネパール政府に提出された。アプローチルートが外国人入域禁止地区になっているため許可取得には多少の懸念もあったが、1991年12月ネパール政府よりなんらの制限もなく登山許可を取得できた。

その間、事務局が開設された。事務局の活動については別項で述べられているが、登山隊を支障無く送り出すために、会員にたいする募金活動、情報の収集、事故対策体制の確立等を主として担当した。また、登山隊の出発後は登山隊との連絡窓口として機能した。募金は会員諸兄のご理解により当初の計画を上回る金額が寄せられた。会員諸兄に、あらためて感謝する次第である。10年近い海外登山のブランクは情報面においても欠落した箇所が多いが、当時カトマンドゥ在住の山田知充会員には事務局の出先機関として登山情報の収集、エージェントおよびネパール政府との折衝に尽力していただいた。

計画には1992年の春に偵察隊を出すことも含まれていた。しかし、山田会員の協力によりヒムルンヒマール付近の航空写真を見る機会を得、「もうひとつのヒムルンヒマール」の存在の確認と山容を知ることができた。そのため偵察隊の派遣は取り止めシェルパ2名をアプ

ローチルート確認のため派遣し、支障なく入山できることを確かめた。

従来、山の会の遠征隊の隊員は技術、体力ともすぐれた者が選抜された集団であった。今回は行きたい者が集まった集団となったため高年齢者もいたが、AACHのごく平均的な技術、体力レベルの者の集まりであったと思う。しかしながら、8000m峰を含む高所登山経験者が4名参加することになり、ヒマラヤの7000m峰にたいする備えは充分なされていたと思える。また、ベースキャンプまで登山隊と行動を共にし、その後トロンパスを越えカリガンダキを降りる別動隊にも3名参加し、広角度にヒマラヤ登山を楽しむことを目論んだ。隊員の構成は別記のとおりである。

今回の登山の目的は(1)「もうひとつのヒムルンヒマール」の登頂、(2)登山隊がほとんど入域していないナルコーラ上流の踏査と7000m級の未踏峰であるラトナチュリ(7035m)、ギャジカン(7038m)の同定と偵察である。

メタからナルコーラ上流の道はよく踏まれており、多人数のポーターを引き連れてのキャラバンも支障無く行動できた。隔絶された地形上にあるプーガウンの形態にも目を見張った。プーとナルの住民の性格の違いにも驚かされた。プーガウン上部の氷河舌端の上に出ると眺望は大きく開ける。右俣氷河の左岸にはギャジカンが大きく翼を広げ、その左にはネムジュンがピラミッド型の端正な山容を見せている。ネムジュンの北稜の科尔から高度を上げた稜線は無名峰を起しゆるやかに「もうひとつのヒムルンヒマール」に連なり、穏やかな山容を見せていた。左俣はヒムルンの北西稜により右俣と分かたれ、国境の分水嶺と北西稜の間に回り込んでいる。我々は自分の目で漸くプーコーラ上流域に広がる地形を確認できた。また、ベースキャンプに登る途中、左俣の左奥にラトナチュリも視認できた。そして、我々は10月3日と6日の両日、隊員4名とシェルパ2名を頂上へ送ることができた。

上記の目的を達成できたことは数々の幸運に恵まれたためと考えられる。まず、計画当初は机上での存在でしかなかった山が実質の存在となったことである。次に、全く未知のルートであった北西稜は技術的には困難ではなかったこと。加うるに好天に恵まれた。キャラバンの前半は午前中は晴れていても、午後になると降雨があるという状況であった。しかし、9月19日より天候は好転し、晴天の日が10月4日まで続いた。その後夜間に多少の降雪はあったものの、積雪には到らなかった。そのため雪面が安定し、最も懸念していた雪崩の危険性を回避できた。

プーコーラ流域にはまだ未踏の7000m峰が3座ある。ラトナチュリ、ギャジカンそしてヒムルンヒマールとネムジュンとの中間にある無名峰(7098m)の3座である。某日、付近の山の偵察途上の某大学山岳部のOBが我々のベースキャンプを訪れたことがあった。未踏峰を目指し、この地域に新たな登山隊が入る日も近いかもしれない。

最後にヒムルンヒマール(ネムジュン・7139m)に初めて登山隊を送った電々九州山岳会、初登頂した弘前大学山岳部に敬意を表したい。

ヒムルンヒマール考

丹 羽 由 紀 夫

Annapurna Conservation Area および Round Annapurna の地図にはネムジュン(Nemjung) という山名が見られる。ペリヒマール群の最高峰である。しかし、どの文献を見てもネムジュンという山名を見付けることは出来ない。そこでネムジュンの近くにあるヒムルンヒマールについて調べてみた。

1950年ティルマンはマナスル偵察のためドゥードゥコーラよりラルキャ峠に行っている。その際の紀行にヒムルンヒマールの記載が見られる。ヒムルンヒマールを登攀の対象として初めて入山したのは1963年の電々九州山岳会である。南東面のドゥードゥコーラから中央岩稜を経て東稜から頂上を目指したが登頂には至らなかった。その後、1964年にオランダ隊、1982年には弘前大学ネパール合同隊、1983年のプレモンスーン期の仙台市役所山岳会ネパール合同隊を経て、1983年ポストモンスーン期にヒムルンヒマールは弘前大学ネパール合同隊により登頂された。

弘前大学ネパール合同隊はドゥードゥコーラを遡上しドゥードゥコーラ右俣氷河にベースキャンプを設ける。ベースキャンプからは側面より中央岩稜上部に達し上部雪田を経て、東稜から登頂を果たしている。弘前大学の登頂報告書と上記の地図を参照すると下記のことが判った。

- 1) 彼等が目指した山はドゥードゥコーラ右俣氷河右岸上方に聳える山である。
- 2) 彼等が登路とした尾根(中央岩稜)は上記地図上のネムジュン(7139m)から派生している。
- 3) ヒムルンヒマールにはドゥードゥコーラへ達する尾根はない。
- 4) 今までヒムルンヒマールとして発表されている写真は、その位置から上記の地図上ではネムジュンと思われる。

以上のことから、弘前大学ネパール合同隊はネムジュンに登頂したと考えざるを得ない。

当時の概念としてヒムルンヒマールは分水嶺の国境稜線上にあり、その西稜も国境と考えられていた。また、西面の最奥部落のプーガウンから容易には取り付き難く、南東面のドゥードゥコーラからは電々九州山岳会、弘前大学の記録による中央岩稜から達することが出来る。現行の地図ではヒムルンヒマールは国境の分水嶺より西(ネパール側)に派生した尾根上にあり、さらにヒムルンから南下した尾根が無名峰(7098m)、ネムジュンを起こして西に折れ、ギャジカン(7038m)に続いている。ヒムルンヒマールには西面からは容易に近づけるように見える。南東面からは高度差数100mのアイスフォールを越え、広大な雪田を横切り、頂上直下には数100mの壁が控えている。南東面からは技術的にも距離の長さからも容易には近

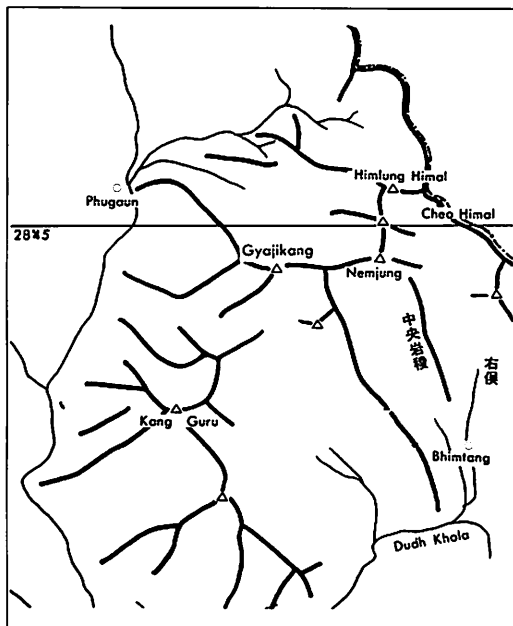
づけない。ペリヒマールの地形の認識は大きく変貌している。

それでは山の座標はどうであろうか。現在のヒムルンヒマールの座標は北緯28度46分19秒、東経84度25分19秒である。1983年ネパール政府は何故かヒムルンヒマールの座標を北緯28度44分、東経84度25分から上記に変更している。また、アメリカン・アルパイン・ジャーナルの1985年号にはClassification of The Himalayaが掲載されている。そのペリヒマールの項には最高峰はP7139 (28°44'14"N, 84°25'12"E)、ヒムルンヒマール7126m(28°46'19"N, 84°25'19"E)と記載されている。この新たな座標は現行の地図のヒムルンヒマールの位置に合致する。また、P7139の座標はネムジュンの位置に一致している。この座標の変更は下記のような状況の変化をもたらすことになると思われる。

- 1) 単にヒムルンヒマールの座標の間違いを正したのではなく、新たなヒムルンヒマールを出現させた。
- 2) ペリヒマールの最高峰はヒムルンヒマール(7126m)ではなく、ネムジュン(P7139)である。
- 3) 従来ヒムルンヒマールとして登り、弘前大学ネパール合同隊が初登頂した山には現在ネムジュンという山名が冠されている。そして、その北方に「もうひとつのヒムルンヒマール」が存在する。

以上のことから、歴史的経緯では弘前大学が登頂した山がヒムルンヒマールであるが、その座標は現在のネパール政府の認識ではネムジュン(P7139)であり、その北方に「もうひとつのヒムルンヒマール」が存在することになる。

山の存在を示す写真としては、マナスルのプラトーキャンプから撮った写真がある。その写真には弘前大学が登頂したヒムルンヒマールの北方に7000m級の山が見られる。しかし、その写真ではヒムルンヒマール付近の地形を掌握することはできず、ヒムルンヒマールを同定することは困難であった。計画を進めているさなか、我々は幸運にもヒムルンヒマール付近の航空写真を見る機会を得た。そしてその写真により「もうひとつのヒムルンヒマール」の存在と山容を確認できた。



ヒムルンヒマール概念図

計画と行動概要

計画

| | |
|------------|--|
| 登山隊 の名称 | 北海道大学山岳部・北大山の会ヒムルンヒマール遠征隊1992 Himlung Himal Expedition of A.A.C.H.'92 |
| 目 的 | 「もうひとつのヒムルンヒマール」の北西稜からの登頂 |
| 期 間 | 1992年9月から11月の60日間 |
| 行動予定 | キャラバンルート カトマンドゥより車でベンサハールに到り、マルシャンディ川を遡り、コドよりナルコーラに入りプーガウンを経て、プーコーラ右俣の氷河にBC(4800m)を設置する。期間 10日間 登攀ルート BCより北西稜の側面にとりつき前進キャンプを3つ進め、北西稜より登頂する。 期間 25日間 |
| 隊の構成 | 隊 長 1名 登攀隊長 1名 隊 員 9名(医師を含む) 計 11名 |

行動概要

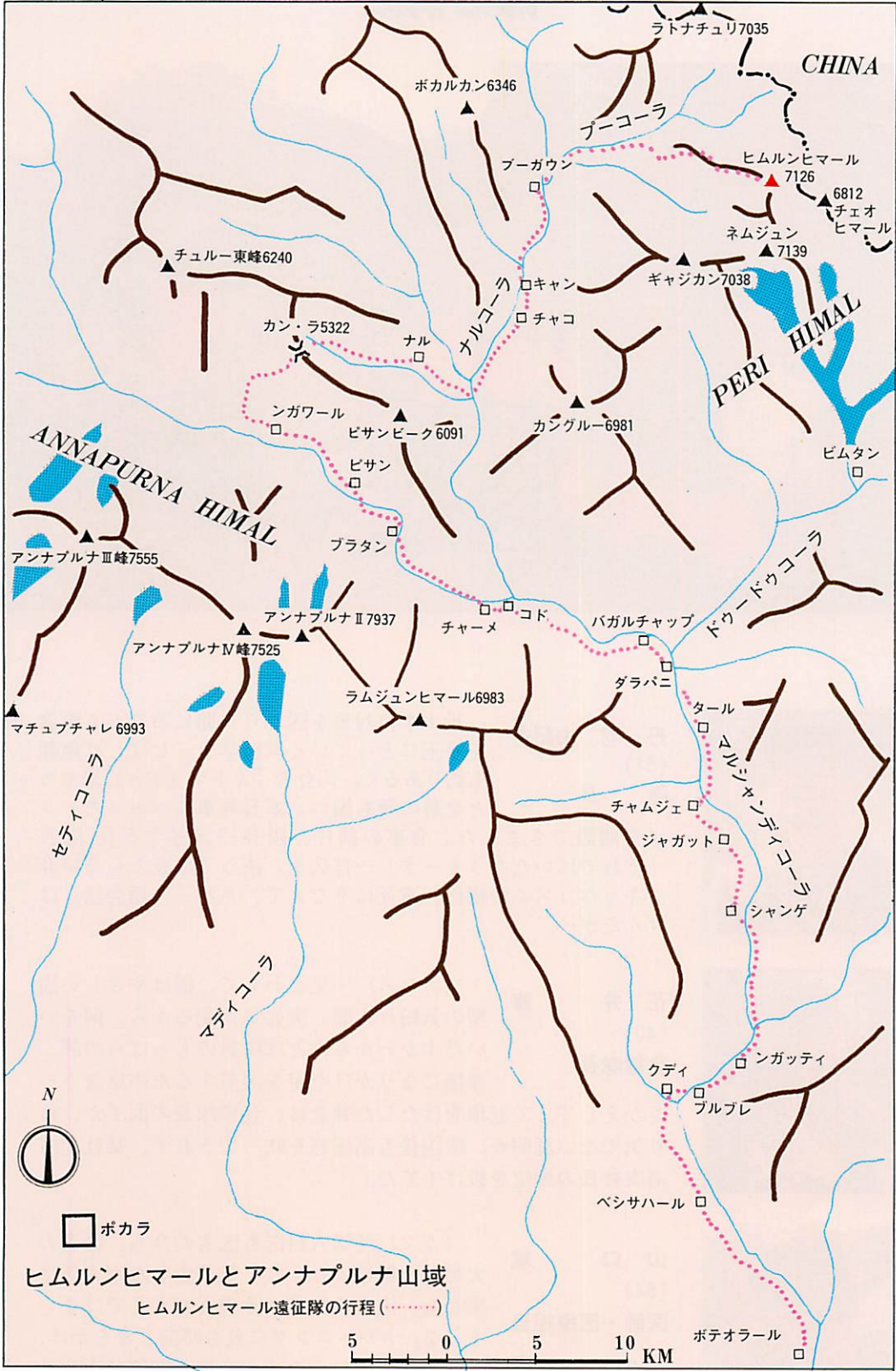
| | |
|-----------|--|
| 1992.8.15 | 先発隊2名日本出国 |
| 9.5 | 本隊日本出国 |
| 9.12 | カトマンドゥ発 ドゥムレよりマルシャンディ川沿いにンガワールに達し、カン・ラを越え、ナル、プーを経てベースキャンプへ。 |
| 9.25 | ベースキャンプ(4850m)設営 |
| 9.27 | C1(5450m)設置 |
| 10.1 | C2(6000m)設置 |
| 10.2 | C3(6250m)設置 |
| 10.3 | 一次隊登頂(小泉、花井、ニマ・シェルパ) |
| 10.6 | 二次隊登頂(清水、樋口、ダヌー・シェルパ) |
| 10.12 | ベースキャンプ撤収 |
| 10.21 | 往路と同じルートでカトマンドゥ帰着 |

84° 00'

84° 15'

28° 45'

28° 30'



□ ポカラ

ヒムルンヒマールとアンナプルナ山域

ヒムルンヒマール遠征隊の行程 (.....)



隊の構成



丹羽 由紀夫
(51)
隊長

世すぎの対象を豚から人間にのりかえ医者を手玉にとっている獣医学士。しばしば魚類も釣りあるく。司会者「カトマンドゥ以来やっと全員の顔も揃い、本日無事にベースキャンプを開設できました。食事の前に、隊長一言どうぞ」、隊長「それではいただきます」一言居士。決して隊長ぶらない非マキャベリズムの権化。遠征にそなえて、ネパール語会話にはげんだが…。



花井 修
(40)
登攀隊長

(ボンズ) 一見こわもて、根はやさしい猫型の気紛れ人間。突如気が変わるから、何をいいたすかわからぬとは隊員のもっばらの評。凍傷になりかけた足を湯煎するため単身とってかえしてまで登頂をはたした執念は、登攀隊長の面子か、移り気でない証明か。帰国後も高揚感を吹っ切きれず、某社北海道支社長の地位を投げすてた。



山口 斌
(54)
医師・医療担当

(ガマ) 産婦人科医も医者のうち。医者の大舅と小舅にはさまれて気苦労したが大任は果たした。仇名の由来はその面がまえではないそう。トレーニングに最も時間と金をかけ、6台のカメラを持ち込んだ生まじめの徒。登頂の期待は山登りの大舅小舅の諫言であえなくつuitえた。



益田 稔 (50) 天草四郎の血をひく大阪生れ。山に登れると勘違いして地質を選んだため、いまだにウダツがあがらない。現役時代の装備しかなく
BCマネージメント担当 遠征にそなえて一切合財を新調したピカピカ男。BCでは貝割れ菜を栽培する老人くさい人。一見思慮深く落着いてみえるが実はおっちょこちょい。帰途、急性肝炎になりウマれて初めてウマにのった。



河合 範雄 (39) (プロ) 精密工学科出身の耳鼻咽喉科のドクター。他称スキーのプロ。医者のかせに自分の高山病の処置のタイミングを誤った未熟者。それでも専門外のオペは2回した。あっけなく頂上が陥された時に吐いた言葉「ああ、これで100万円も終わったか」は、けだし至言。



小泉 章夫 (36) (呆夫) 真冬のダウラギリ峰登頂後、危うく落としかけた命をチャッカー回収した男。
タクティクス 学会出張先の東欧から駆けつけて合流した隊
・食糧担当 随一のエネルギーushman。形質的に正座できない骨格の足をもつが、その足で今回も登頂の牽引力となった。効率第一の合理主義者。バブル崩壊まえの将来遺産は億単位であったそう。



戸田 英明 (33) (キンドー) 隊で5人いる地質屋の中堅どころ。ハンマーをパソコンにもちかえ、隊の会計を一手にとりしきる。カトマンドウでは大金を小銭に両替するのにてこずって、あとからキャラバンを追いかけるはめになった。金と数字に強いが高度には弱いことが判明した。言語不明瞭なのが玉に傷。



清水 収 (31) (バスボン) 嫁いらすの几帳面な独り者。北大森林科学科砂防の有能な助手。輸送を担当したがシェルパを御すのは山津波を御すよりもむつかしかった。キャラバン中必要なものが必要な時にでてこず、プーイングを浴びた。遠征中の洗濯回数は隊員第一を誇る。頂上からの360°の大パノラマを他人より5°多く見た男。



樋口 和生 (29) (ヒグブー) 甘いマスクにももの柔らかな口調でしゃべる京都人。ネパール語は隊内随一の先発隊員。その語学力と落着いた物腰にものをいさせた情報収集力と交渉力は抜群で実質的な渉外担当。登頂は、誰も入りたがらなかったガモウ・バッグ(加圧袋)で高山病をなおした勇気のためか。終了後、妻子をよびよせポカラに遊ぶ野外教育専門家。



石橋 英二
(24)
食糧担当

ニンマリ笑って飯を食う、大飯喰らいの寡黙な食料係。もうひとりの先発隊員。ネパールには順応したが高度順応はもひとつ。非情な高度障害は、若手に登らせたいという皆の願いに答えるべくC3まで頑張った彼のつぶらな瞳に、桜の花びら状の眼底出血痕を残した。ヒムルンさくら散る。帰途、本隊と別れてひとりインド、パキスタンへ旅立つ。



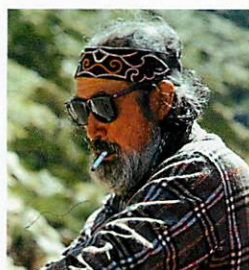
斎藤 清克
(23)
装備担当

東北人らしからぬ福島生れの福島育ち。唯一の現役地質学生。自己の欲望に忠実すぎる現代っ子。肝心かなめで実力が発揮できないのは、その若さ故か。将来大物になるとのもっぱらの評判はあくまでも将来の検証に委ねられている。BCで踊ったバンクーバー節は痛恨の表現か、シェルパの喝采をあげた。卒論は余裕しゃくしゃくとか。



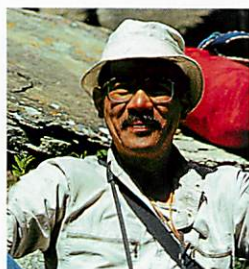
木崎 甲子郎
(67)
別動隊隊長

(ジミー) 琉球大名譽教授。昔も今も自他ともに許す山岳部員の兄貴分。学生のめんどろみがよく信頼があつい。南極・ヒマラヤをフィールドにする地質学者だが今回の参加は気ままなスケッチ旅行とか。「オウッ、そうかそうか、それはよかった」けっしてあらがわず、そばにいただけで安心感をひとに与える風格をもつ大人。



佐藤 行郎
(65)
医師・
別動隊医療担当

(イオン) 白髭ならぬやさしい目をした白い山羊ひげのお医者さん。ジミーの親友。若者の集りにもしよっちゅう顔をだして気も若い。奥さんも若い。「〇〇君ねー」と名指しで語りかけられると、何をいわれるかと一瞬ギョッとする。セブン・スターを4000本も脱税で持ち込んで、心ある隊員の真摯な禁煙の志をくじいてしまった。



名越 昭男
(48)
別動隊庶務担当

山岳部きってのきままな風来坊。“小生”いわく自称ヒマラヤ通、いわく自称ロキシー評論家「マルファのアプリコットロキシーは最高にうまかった」。つねに余人の予想外の領域で蘊蓄をかたむけては悦にいつている気のいい男。今回は御老体おふたりのガイド兼お側御用人をかってでた？



リエゾンオフィサー
ヨーダ・バドゥール・ガルティ



サーダー
ブリ・シェルパ



高所ポーター
ニマ・シェルパ



高所ポーター
ダヌー・シェルパ



コック
ドルジェ・シェルパ



I 章 記 録

アプローチ



カトマンドウでの梱包作業 Gear and food packing in Kathmandu.



ホテルでのミーティング Meeting at Ambassador Hotel, Kathmandu.

■カトマンドウから ボテオラル

8月15日先発隊の樋口と石橋は、モンスーンのカトマンドウに到着。タイ航空機墜落事故の直後とあっては、トリバン空港への着陸もいささかスリリングだ。

翌日から早速登山隊の手続に入る。別送品の通関とトランシーバーの使用許可を得ることが

主な仕事になるが、エージェントが効率よく働いてくれたため手続きはスムーズに進み、1週間後には早くも片づいてしまった。

暇を持って余した2人はボカラに行き、本隊が来るまでの静かな時間を楽しんだ。

9月5日、予定通り本隊到着。ヨーロッパか



ドウムレを出たところ Outside Dumre.



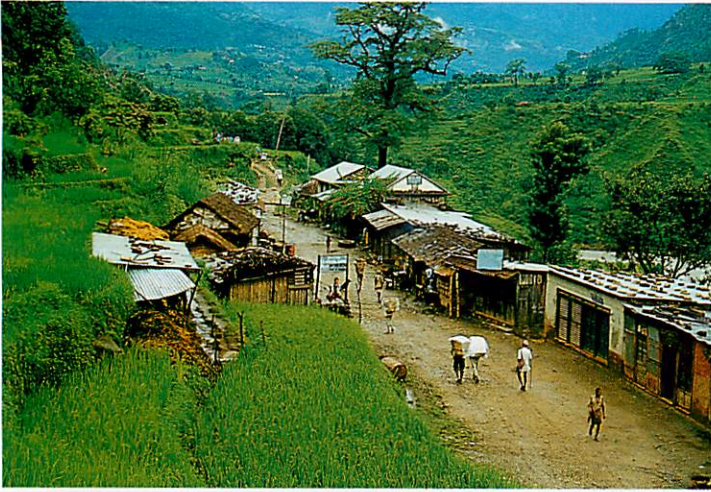
ドウムレで At Dumre.

らネパール入りする小泉を除き、久しぶりに全員が顔を揃える。

キャラバンルートに予定していた、ナル・コーラの橋が大水で流されたとの情報が入り、出発日を3日早めてキャラバンを開始することにす。買い出し、パッキングと慌ただしく準備

を進め、9月12日早朝、チャーターしたバスに乗り込み、霧に包まれたカトマンドゥを後にする。いよいよヒムルンへの旅の始まりだ。

カトマンドゥ盆地を抜けると、澄み渡った空のもとマナスルの山々が遠望できる。遙か彼方のヒムルンに思いをはせつつバスに揺られる。



ベシサハールの手前 Below Besi Sahar.



ベシサハールでのキャンプ Camp at Besi Sahar.



シャンゲの吊橋 Crossing a bridge at Syange.

■ポテオラルから バガルチャップ

ドムレで乗り換えた、廃車寸前の払い下げ
軍用4輪駆動トラックによる、体の節々の痛み
も消えぬまま、9月13日、ポテオラルよりキャ
ラバンを開始する。

予想以上に膨れ上がった隊荷は121個を数え、



ジャガット手前より Jagat from the south.



タールで Marching through Tal.

隊員と現地スタッフを加えると総勢130人の大
部隊となる。

マルシャンディの河岸段丘に広がる青々とし
た水田を抜け、ベシサハールから山道に入る。
モンスーンがまだ完全に明けきっておらず、



タル手前より Landscape of Tal.



午後には毎日雨が降る。乾期にはトレッカーで賑わうマルジャンディー街道もひっそりとしており、その静寂をかき乱しつつ、集落から集落へと大部隊が進む。



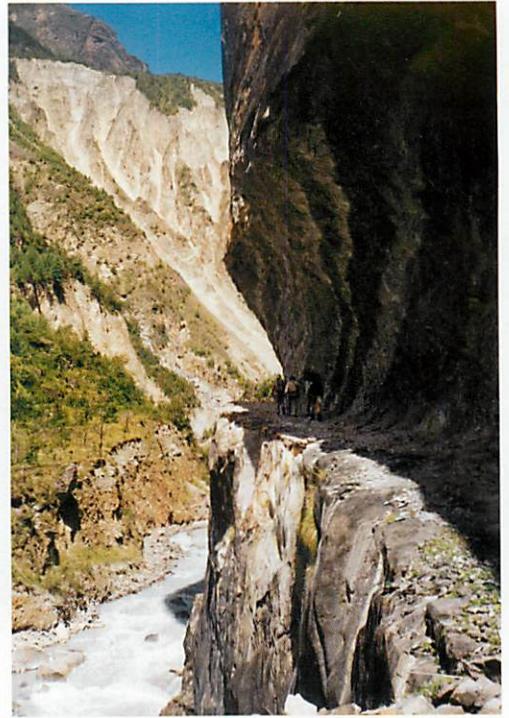
ダナギューからマナスルを望む
Looking at Manaslu from Dhanagyuu.



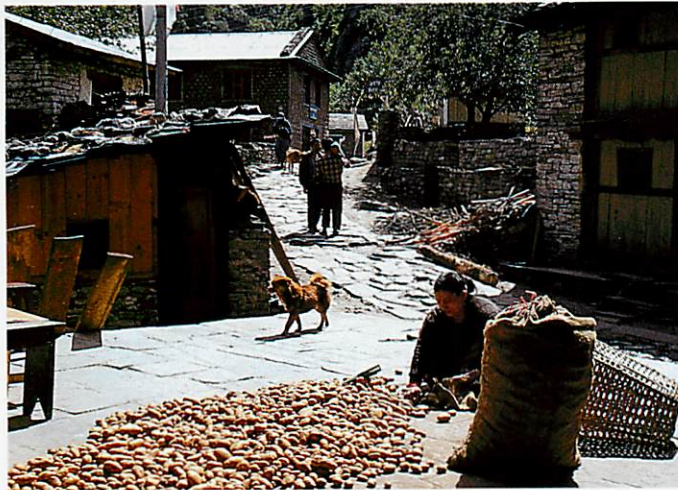
ナル・コーラの出合 Conjunction of Nar Khola to Marsyangdi at Kodo.



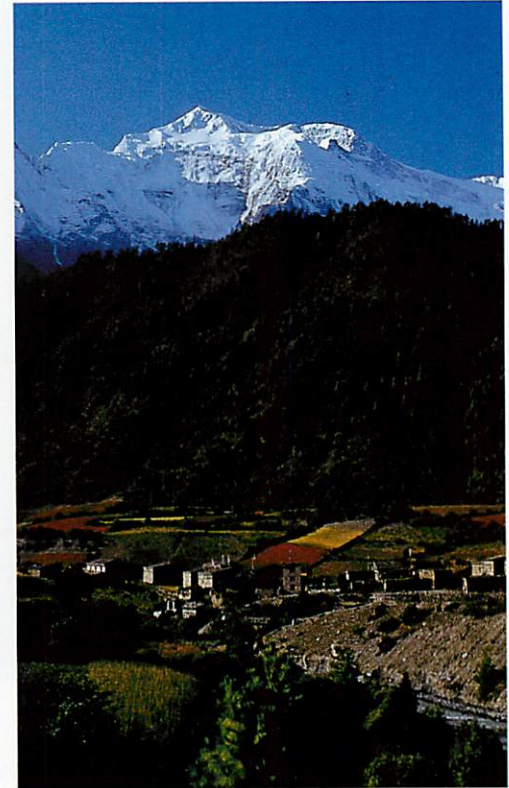
ピサンピークからの尾根末端のスラブ Tail ridge of Pisang peak.



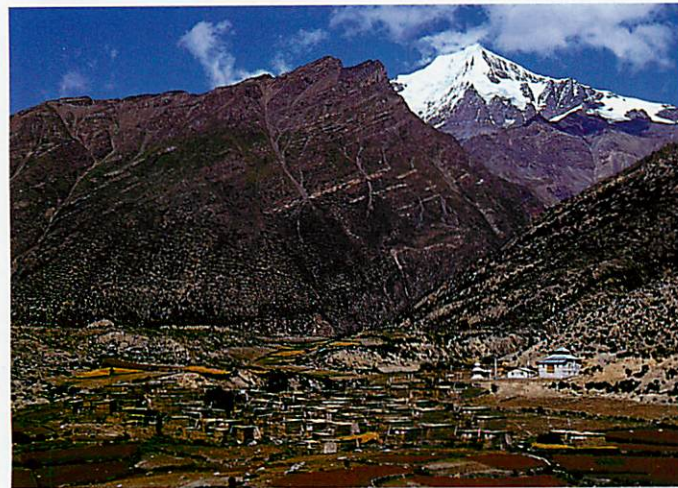
ピサン手前で Below Pisang.



チャーメで At Chame.



アンナプルナII峰 Annapurna II behind Pisang.



ンガワールを見る A view of Ngawal.

■ バガルチャップ
からンガワール

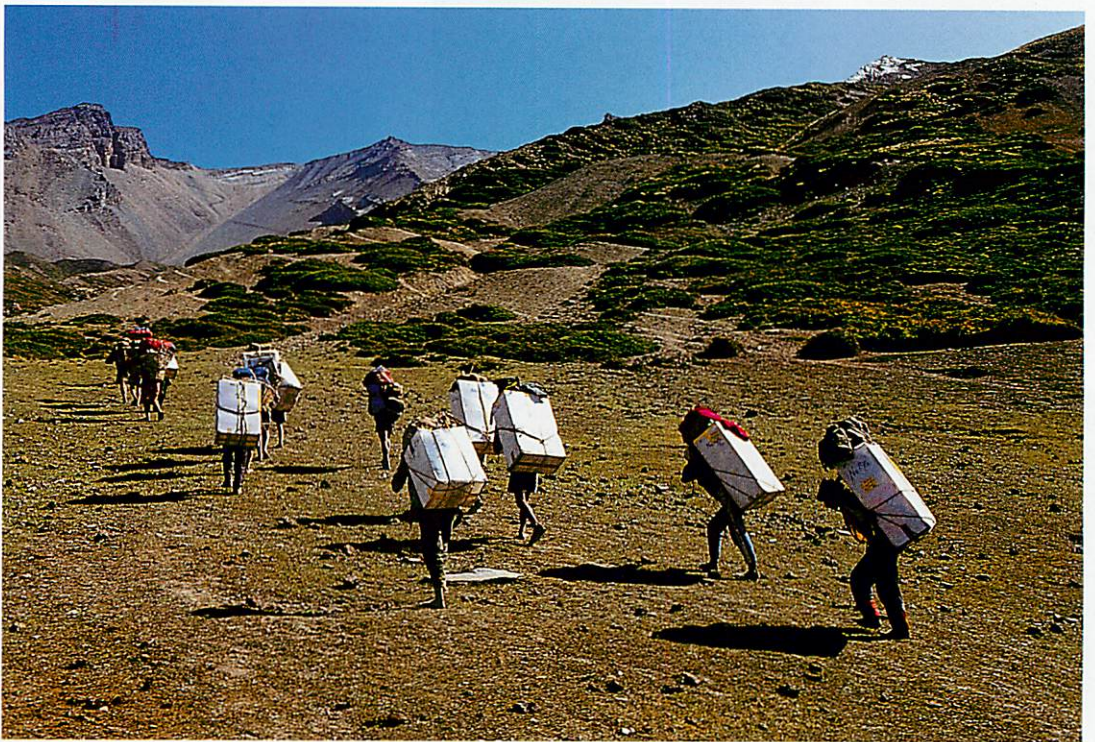
マルシャンディ街道は滝の街道だ。何万年もかかって侵食された川の側壁から大小様々な滝が流れ落ち、道行く我々の目を楽ませてくれる。高度をかせぐにつれ、次々と白い山々が迫ってくる。マルシャンディの大屈曲点には、氷河の

後退によって取り残された大衝壁が見られ、ここを過ぎるといよいよチベット文化圏に入る。ラマ教のお経を刻んだマニ石やマニ車が見られる。

アンナプルナ連峰がまぶしい。



カン・ラからのアンナブルナ連峰(左からAⅡ、AⅣ、AⅢ、ガンガブルナ、AⅠ、ティリチヨ) Grand barrier seen from Kang La.



カン・ラを目指す Ascending toward Kang La.

■ンガワールから ナルガウン

ナル・コーラの橋の流失によってキャラバンルートの迂回を強いられた我々は、ンガワールからカン・ラを越えることになった。

大部隊が5300mの峠を越え、向こう側のナルガウンまで辿り着かなければならない。

数週間前に入った旭川のカングルー隊が、一

日で峠越えをしたという話をサーダーが聞きつけて来て、我々の方針も決まった。この話は後に偽情報だとわかるのだが。

リエゾンオフィサーと一部の隊員は馬で峠越えをする事とし、他の隊員は荷物を減らしてゆくりと峠を越える。



アンナプルナⅡ峰とⅣ峰 AnnapurnaⅡ and Ⅳ.

高度をかせぐにつれ、アンナプルナの山々がその全貌を現わし、振り返る度に頂の高さに近づいているのが分かる。草木の一本も生えないザレ場の道をなかなか近づかない峠を見上げつつ辿る。何回腰をおろした事だろう。ようやく辿り着いた峠にはやはりマニ石があり、その傍

らで隊員が思い思いに山を眺めている。目を北方に転ざると、彼方に我々の山がひっそりとあった。ようやく肉眼で見える所まで来たのだ。

日の暮れる頃ナルガウンに着く。ポーター達は、夜遅くどうにか全員が到着。荷物は途中で置いてきてしまったらしい。





カン・ラからヒムルンヒマールを遠望する Himlung Himal from Kang La.



カングルーとマナスル Kang Guru and Manaslu from the north of Kang La.



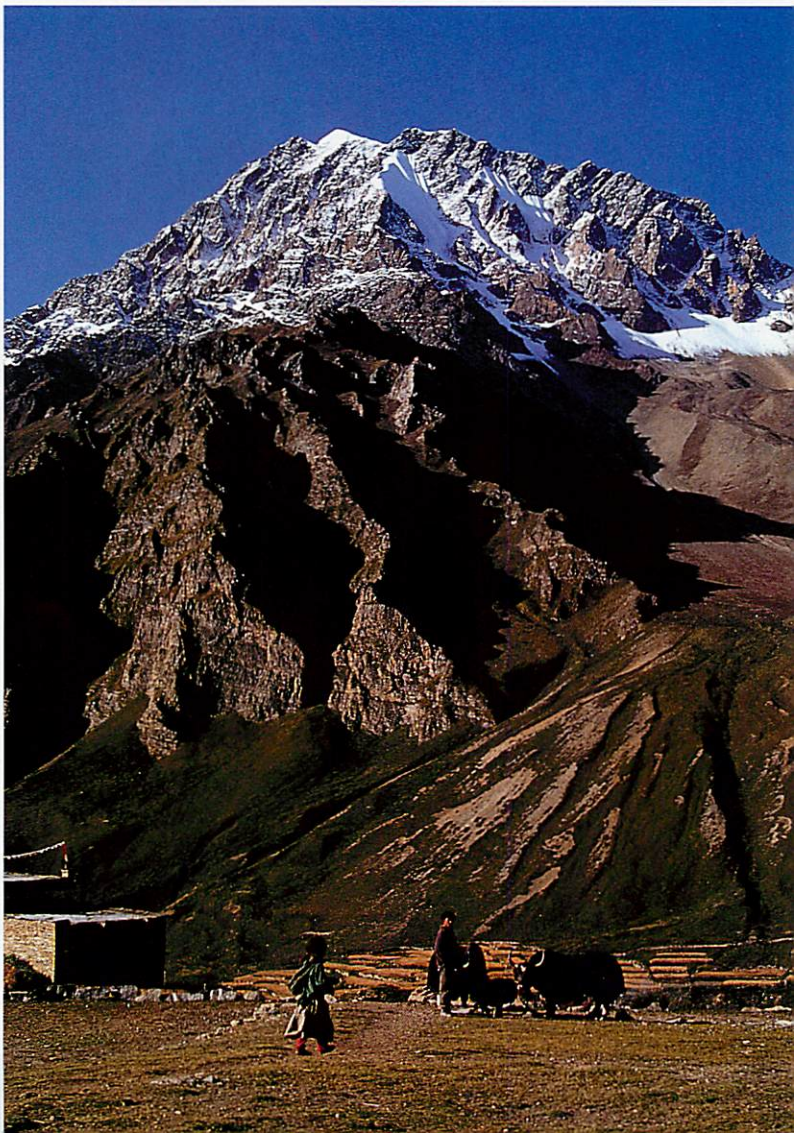
ナルからマナンに連れて行かれるヤク Yaks brought from Nar to Manang.





ナルで Inside Nar.

ナルから見たピサンピーク
Pisang peak from Nar.



ナルで Inside Nar.





チャコの下で Below Chako.



チャコ A view of Chako.

■ナルガウンから
チャコ

置いてきた荷物の回収のため、ナルガウンで一日停滞とする。日向ぼっこをしながら、カングラー隊の登頂シーンを眺める。

ナルガウンから、当初予定していたキャラバシルートに戻り、ナルコーラ沿いに進む。

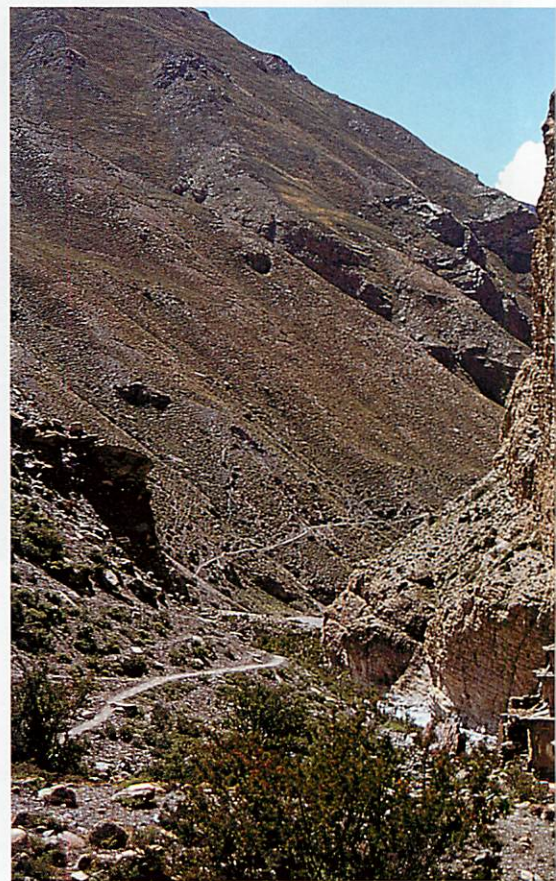
ナルガウンより上流には、人の住む集落はプー

ガウンしかなく、人通りもめっきりと減る。幅の狭くなった川を左手に見降ろしながら、辺境の山道を辿る。

針葉樹に囲まれた広場にテントを張り、我々だけの世界を楽しみ、近づいたヒムルン・ヒマーに思いをはせる。



キャン Looking at Kyang.



プーの下のゴルジュ Entrance of a gorge below Phu.

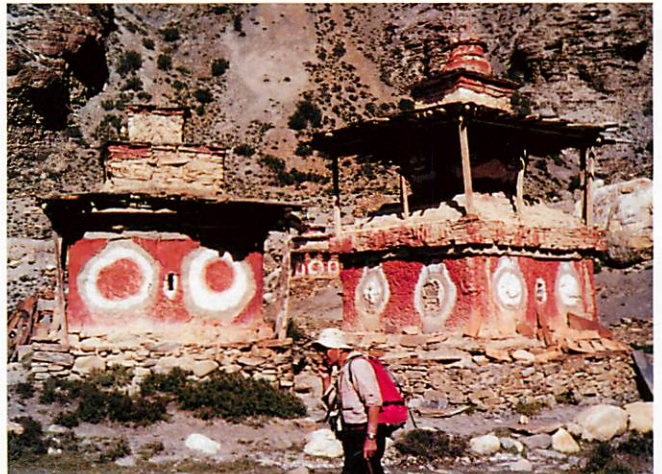


プーを望む Looking at Phu.



プーの入口の経石塚
A mani stone wall at the gate of Phu.

プーの下のチョルテン Chortens below Phu.



プーの入口から振り返る
Looking back from the gate of Phu.



プー全景 A view of Phu.

■ チャコから プーガウン

ナルガウンとプーガウンの間には、チャコとキャンのふたつの集落がある。集落といってもここは常時人が住んでいるわけではなく、プーガウンの住民が冬を越す間だけ住まう所だ。

我々が通ったときは人がなく、石を積んで作った家々は閑散としていて、ゴーストタウンに迷い込んでしまったような錯覚を覚えた。

キャンを過ぎると川幅は一段とせままり、木のはえない川沿いの細い道をゆっくりと進む。

川の両岸が切り立った場所に、タンカーの舳先のような奇岩が行く手を遮り、水はその脇から流れだしている。左岸の崖に着いている道を

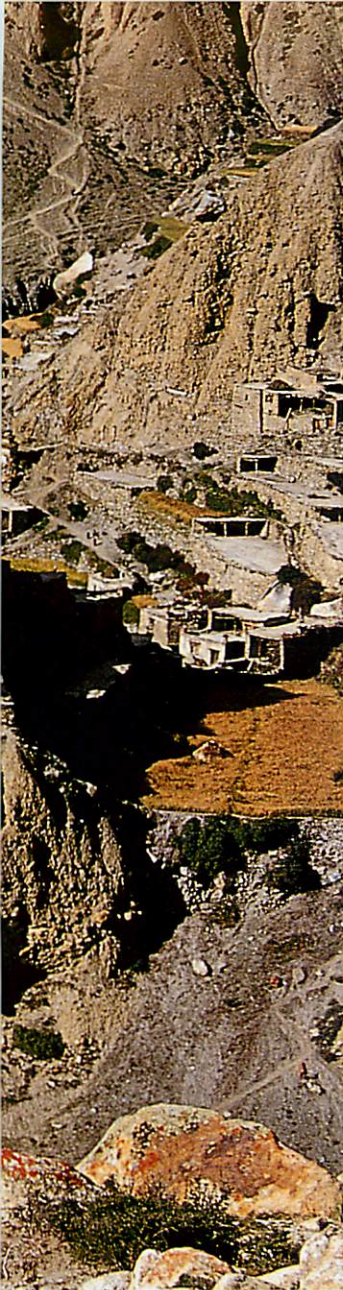
登ると、奇岩を見降ろす位置に村の入口を示す門がある。門の少し上のチョルテンからは、さらに上流を見渡すことができる。上流部には広々とした土地が開け、高台には畑が広がる。

狭いゴルジュの上流に、これほど広い空間が広がっているとは信じられない気がする。

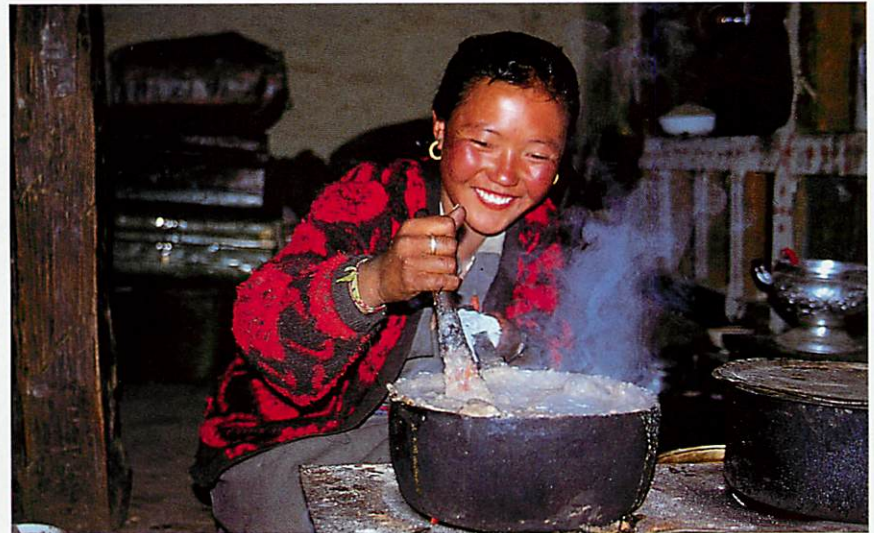
タンカーの舳先が自然の要塞となって外界からこの村を守ってきたのではないだろうか。

チベットの集落の典型で、村全体が石造りの砦のような作りになっている。

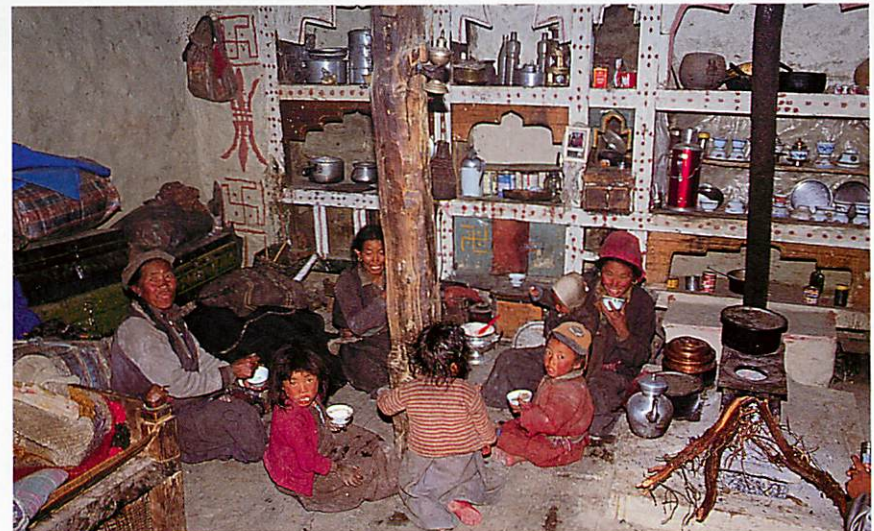
民家の屋上にテントを張らせてもらい、一夜の宿とする。



プーの住居 Residences of Phu.



住居の内部 Inside a residence.



住居の内部 Inside a residence.



プー氷河から望むヒムルンヒマールと無名峰 Himlung Himal (left) and Unnamed peak from Phu glacier.

■プーガウンから ベースキャンプ

どんなに貧しい村でも、お寺だけは立派である。斜面にへばり着くようにしてある集落から少し離れたところに立っている、白壁の大きな寺の印象は強烈だ。

ナルガウンから雇ってきていた道案内人を先頭に、ベースキャンプを目指す。

低い灌木の生える道を辿ると、まもなくモレーンが見えて来る。モレーンの末端からは、伏流してきた氷河の解け水が音を立ててわき出ている。モレーンを回り込み、小高い所にさしかかると、谷の最奥部に突然ヒムルン・ヒマールの姿を望むことができた。2週間の長いキャラバ

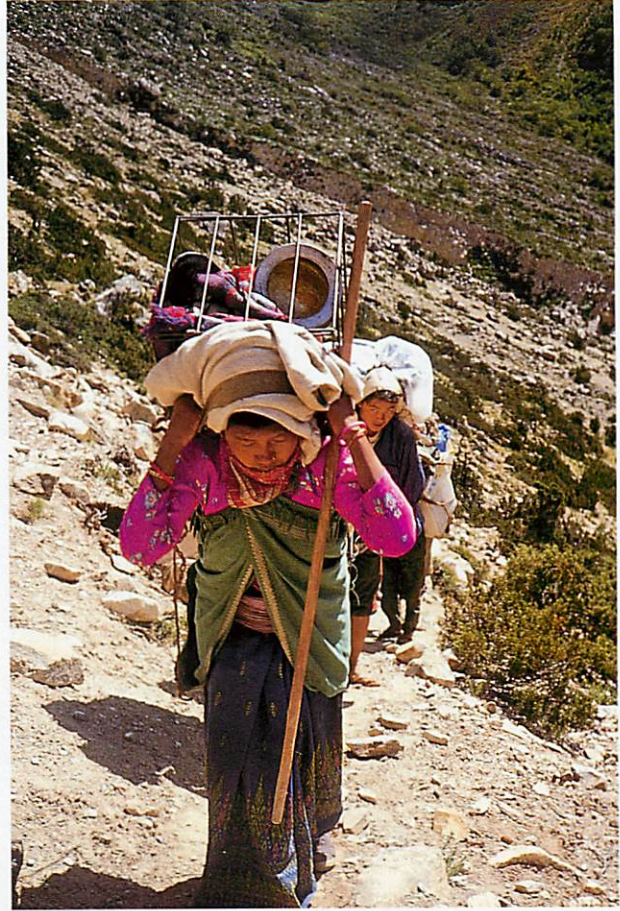
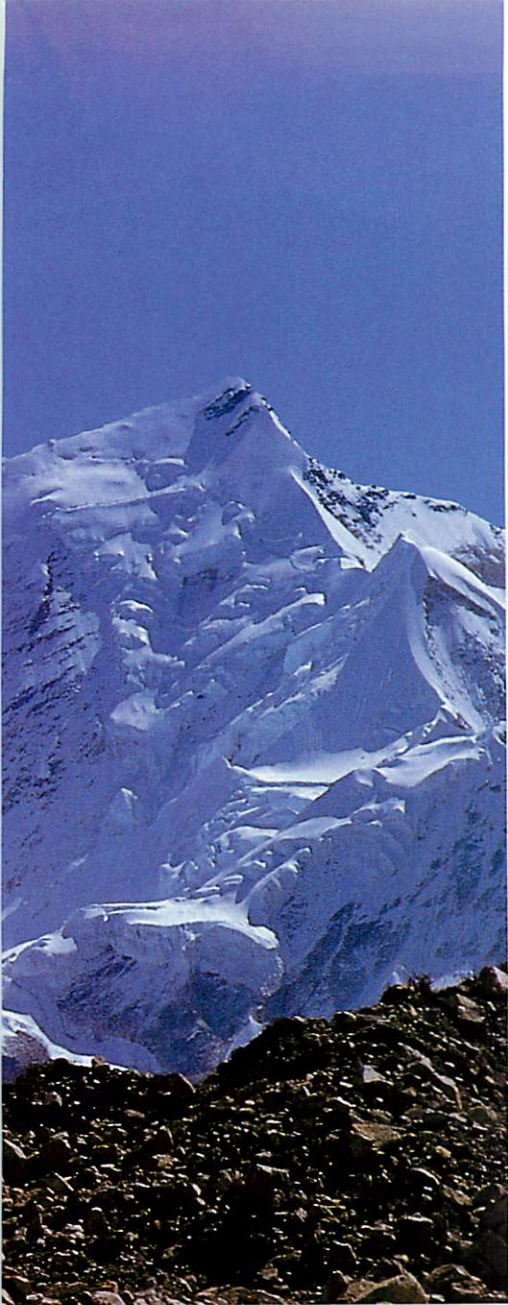
ンの終わりはもうすぐだ。

途中のカルカからモレーンを離れ、左俣に入る。ここカルカには結構沢山の山羊やヤクがおり、今後この住民がしょっちゅうベースキャンプを訪れ、我々と交流することになる。

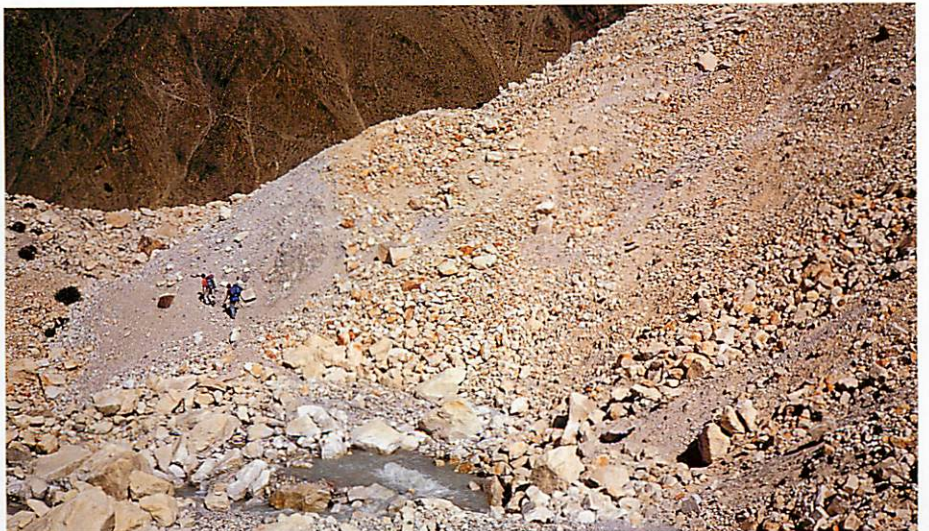
ベースキャンプは、ヒムルン・ヒマールの頂から西に伸びる尾根の末端に位置し、彼らの放牧地の上端でもある。家畜の群れが草を食み、我々のテントの回りを歩き回る。

ベースキャンプとしてはうってつけののんびりとした場所だ。

いよいよ登攀活動が始まる。



バンガリ・カルカの下で Below Pangari Kharka.



プー氷河を渡る Crossing Phu glacier.



ベースキャンプ A view of Base Camp.

タシ・ゴンパの僧によるプジャ
Puja by a lama of Tashi gompa.





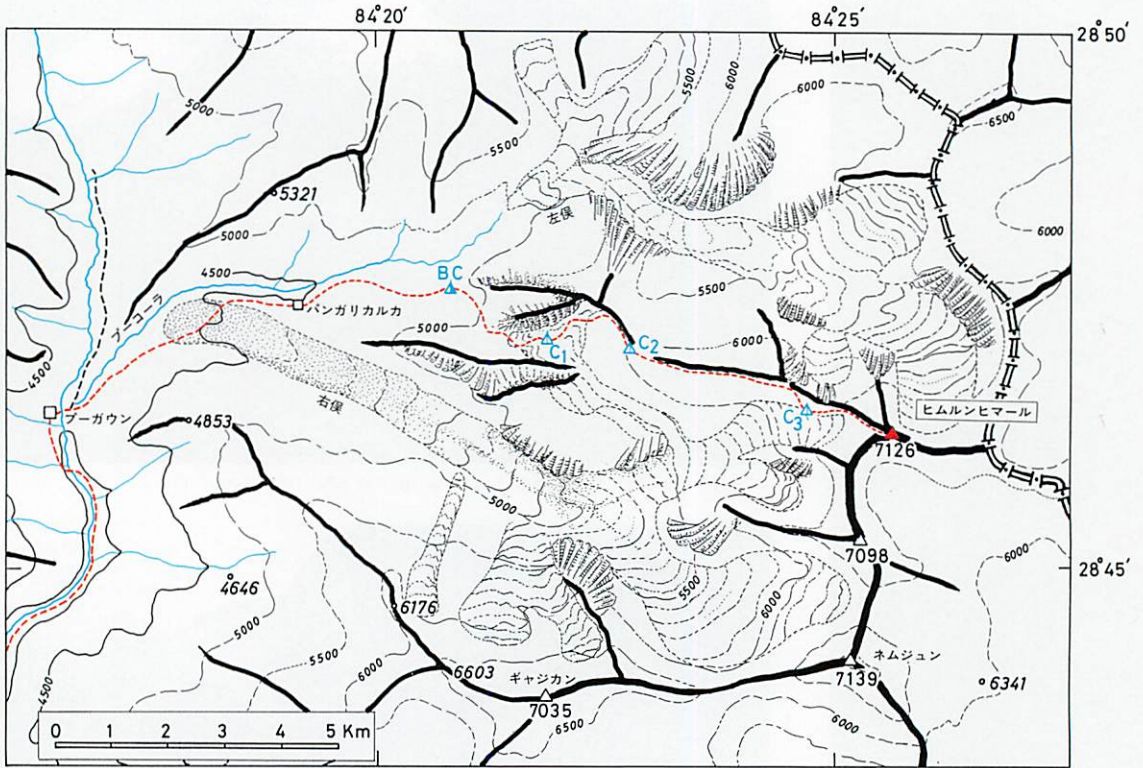
ベースキャンプ・サイトを望む Looking at the site of Base Camp.



新雪のベースキャンプ Base Camp covered with new snow.

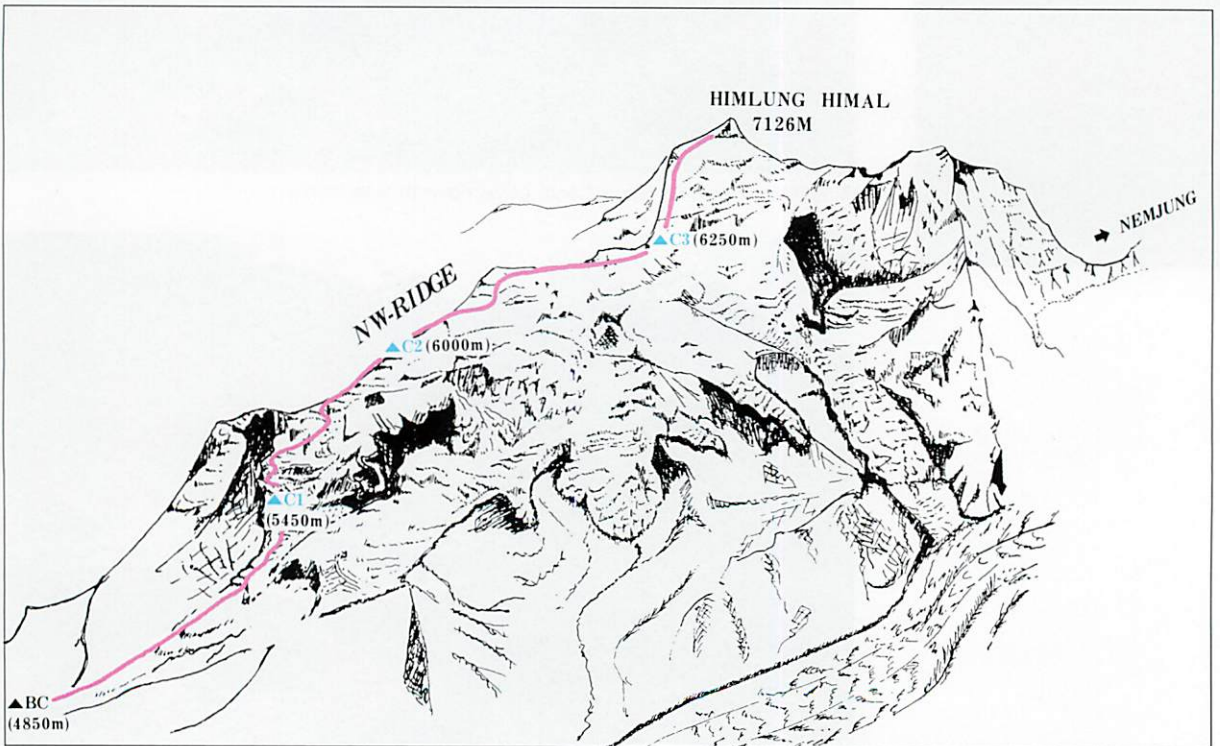


パンガリ・カルカで Herd at Pangari Kharka.

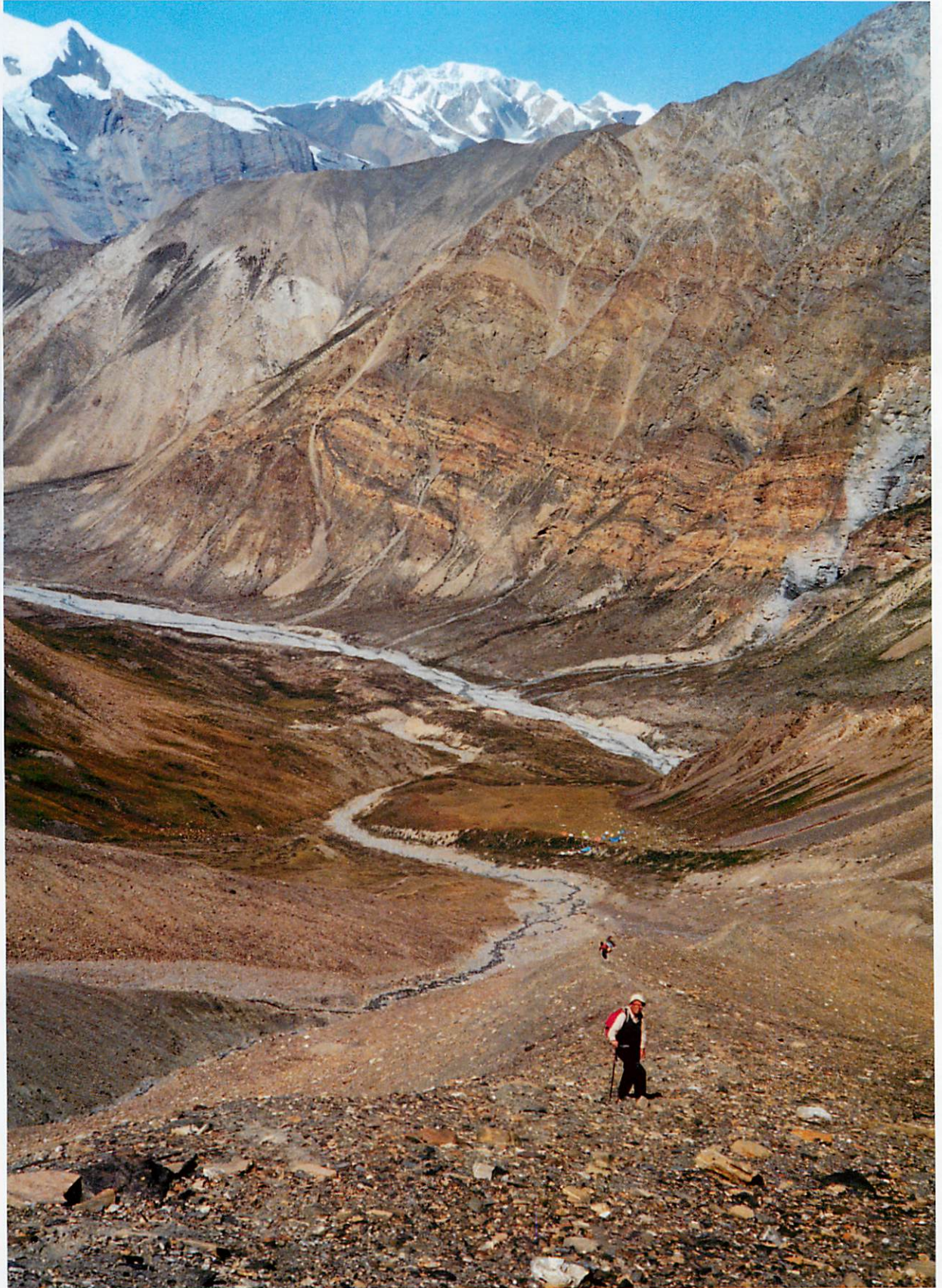


ヒムルンヒマール付近概念図

AACH, 1993



ヒムルンヒマール西面ルート図



ベースキャンプからモレーンの上を登る On the moraine above Base Camp.



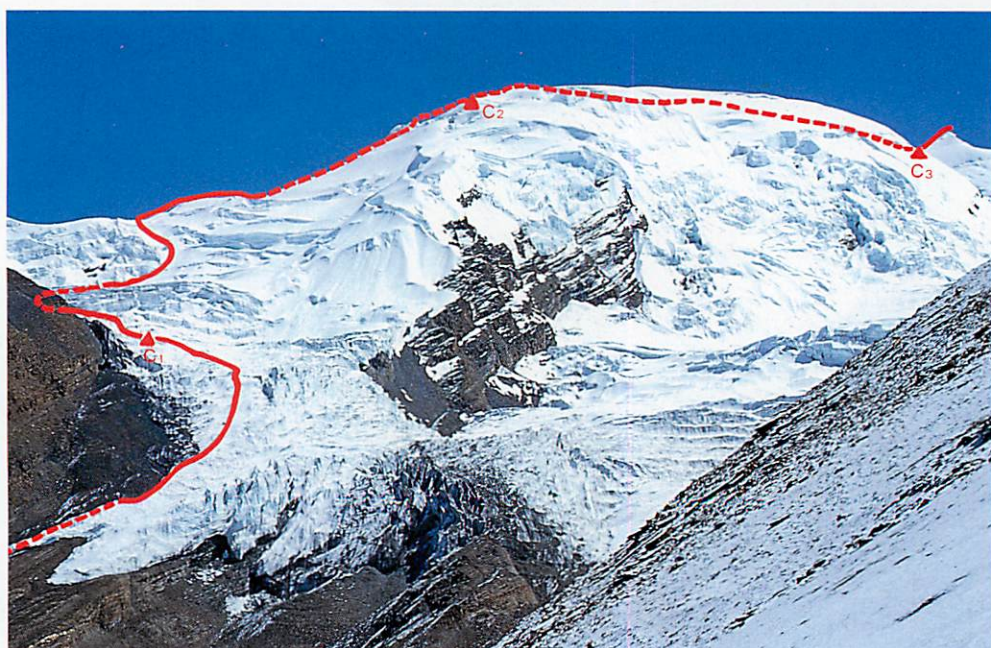
C1を望む Looking at Camp 1 on a glacier.



ギャジカン Gyaji Kang from Camp 1.

C1で At Camp 1.





登頂ルート Climbing route of Himlung Himal.



C1上のルート
A route above Camp 1.



北西稜への斜面を登る Ascending a slope to the northwest ridge.



北西稜上からのラトナチュリ Ratna Chuli from the northwest ridge.



北西稜に出る On the northwest ridge.



C2で At Camp 2.

C2からアンナプルナとダウラギリを遠望する Annapurna I (left) and Dhaulagiri I from Camp 2.





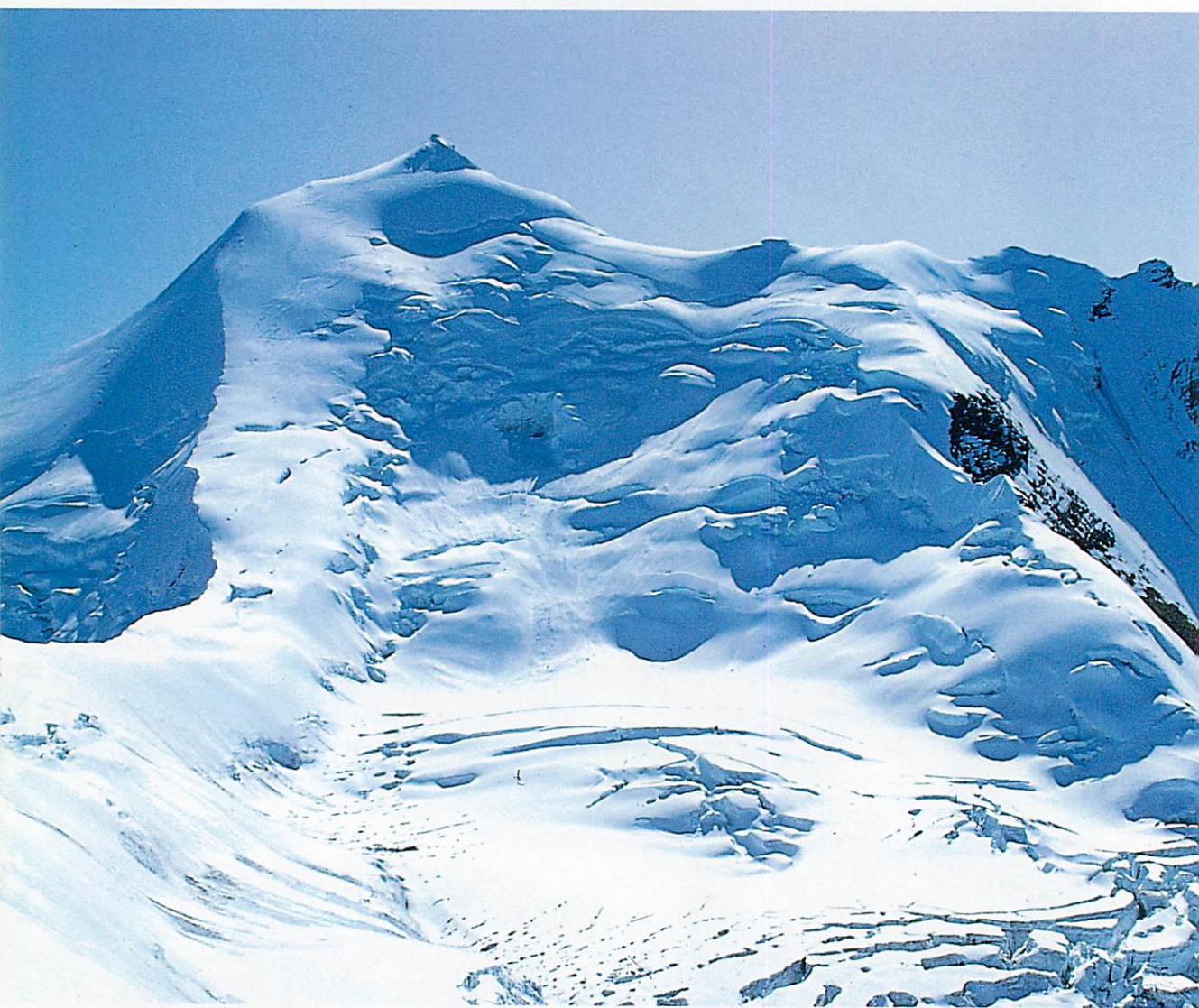
北西稜から頂上を望む The summit of Himlung Himal from the northwest ridge.



北西稜で Descending to Camp 2 on the northwest ridge.

C3を目指す Ascending toward Camp 3.



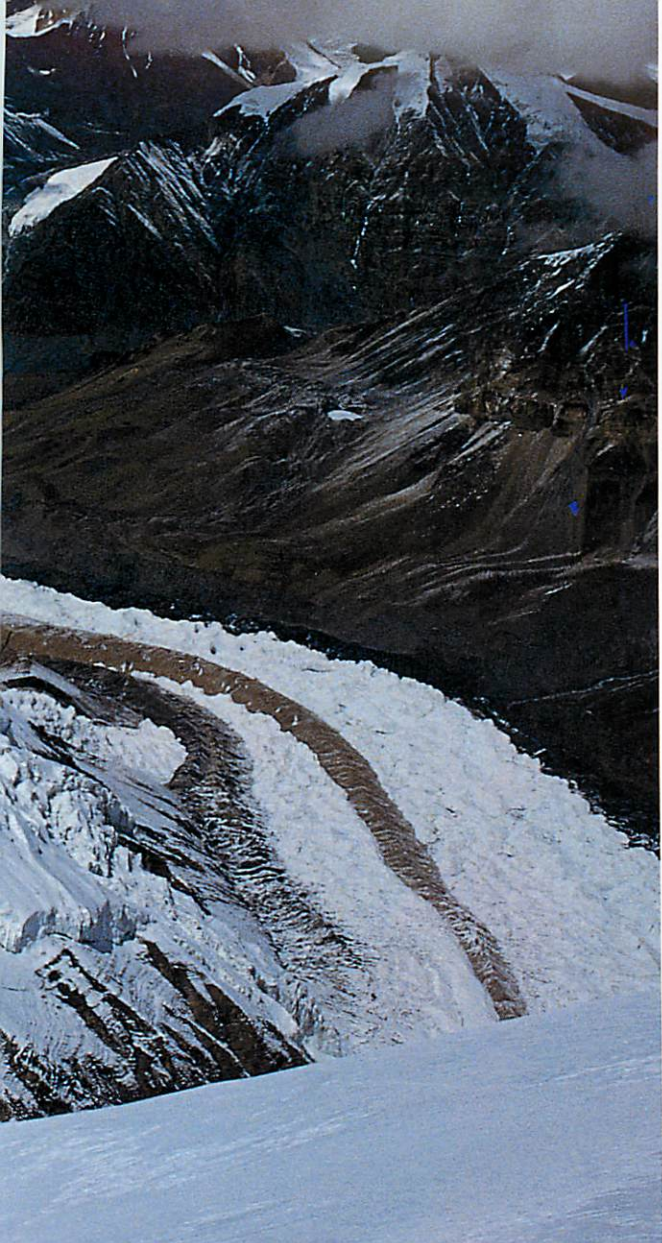


左からヒムルンヒマール, 無名峰, ネムジュンの各峰 Himlung Himal, Unnamed peak and Nemiung.





頂上への斜面から北西稜を見下ろす Looking down at the northwest ridge from the summit slope.



頂上直下で Ascending to the summit.







小泉 Koizumi.



花井 Hanai.



清水とダヌー・シェルパ Shimizu and Danu sherpa.



樋口とダヌー・シェルパ Higuchi and Danu sherpa.

頂上にたつニマ・シェルパ
Nima sherpa on the summit.



ネムジュンと無名峰 Nemiung (left) and Unnamed peak.



□頂上からの眺め Views from the summit.





アンナプルナ I 峰とギャジカン Annapurna I (behind) and Gyajikang.

チベット方面を見る Looking toward Tibet.





マナスル Manaslu.

ラトナ・チュリ Ratna Chuli.





ラトナ・チュリ Ratna Chuli from a hill south of Base Camp.



アンナプルナⅡ Annapurna Ⅱ.

□周辺の山々 Views of mountains in Manang District.



アンナプルナⅡからの出尾根上の6125m 峰 6125m peak on the ridge from AnnapurnaⅡ.

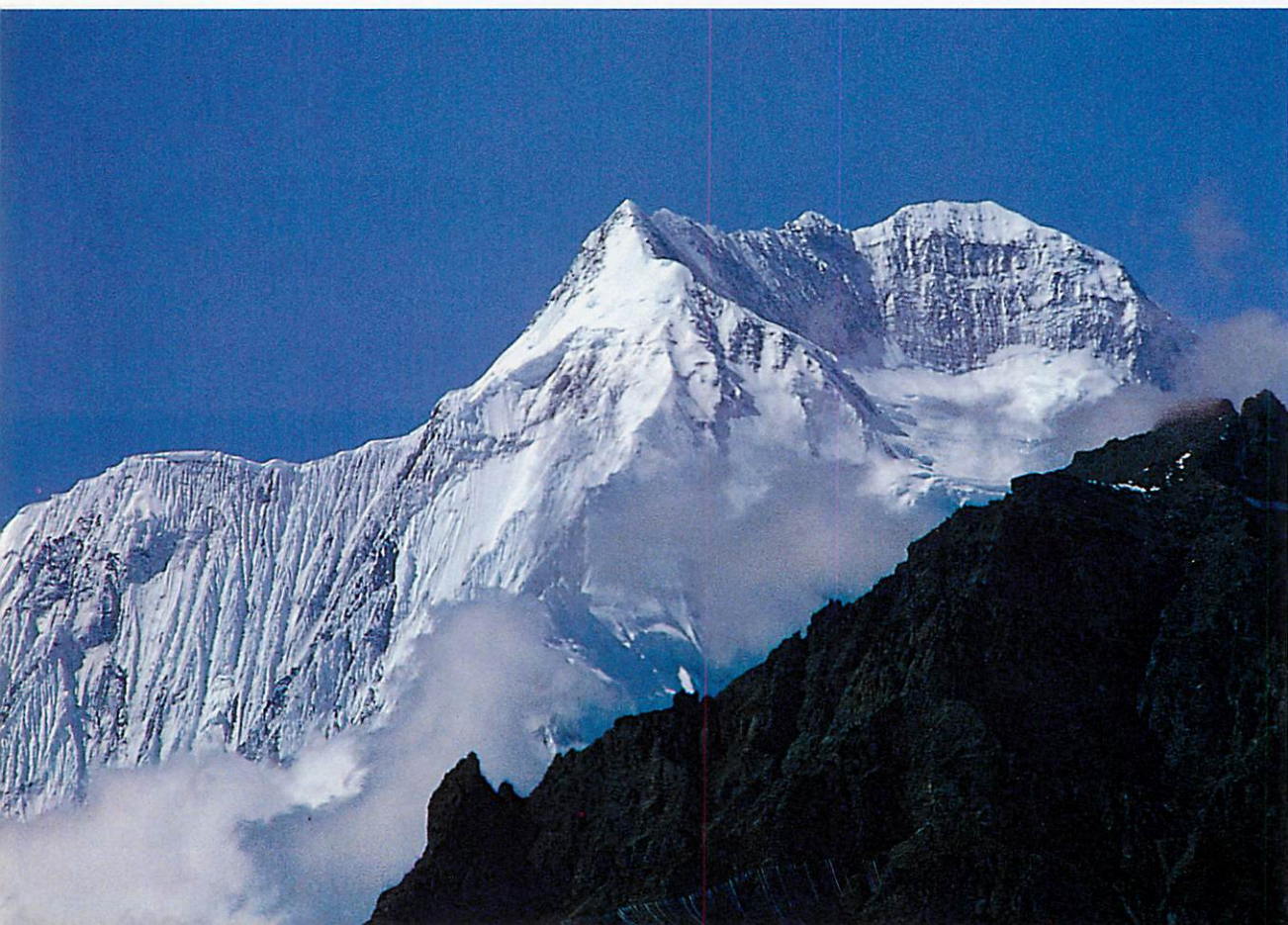
アンナプルナⅢ Annapurna Ⅲ.





ガンガブルナ(左)とアンナブルナⅠ Gangapurna (left) and Annapurna I seen from Camp 1.

アンナブルナⅡ Annapurna II from Kyang.





ギャジカン Gyaji Kang from Pangari Kharka.

マナスルとンガッティチュリ Manaslu and Ngatti Chuli from the north of Kang La.





ボカラカン Pokharkan from Base Camp.

ネムジュン Nemiung from the northwest.



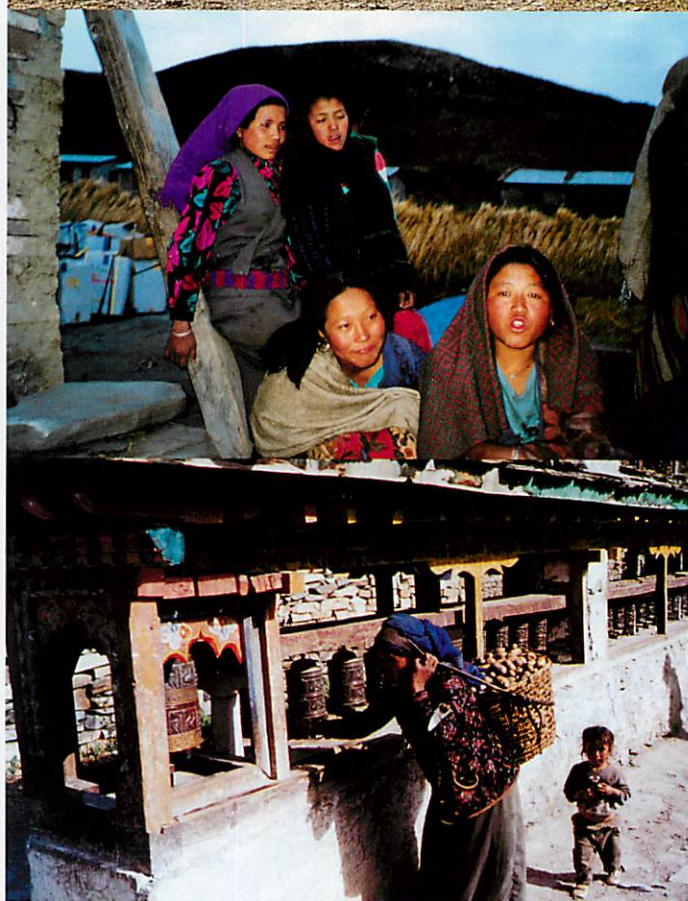
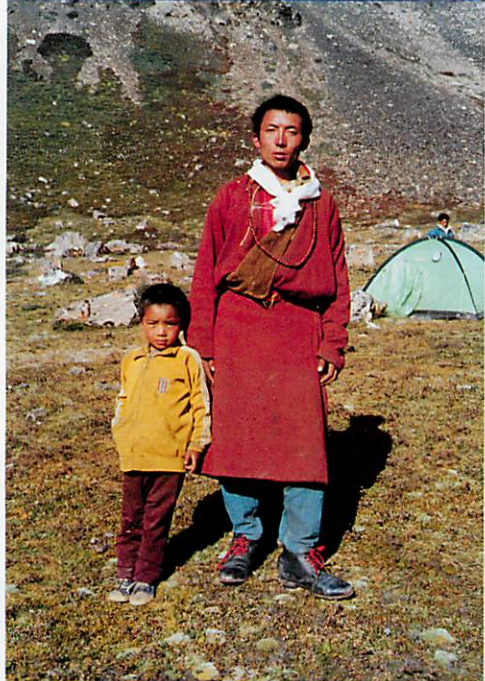


左から無名峰、ネムジュン、ギャジカン Unnamed peak (left), Nemiung and Gyaji Kang (right).

無名峰(左)とネムジュン Unnamed peak (left) and Nemiung.



人々 Local people and porters.





帰路



再び、カン・ラを越える Crossing Kang La on return journey.



ホンジェの下で Along Marshyangdi below Hongde.

登 攀 活 動

花 井 修

【ベースキャンプへ】

9月25日

今まで、本格的な登山隊の入域を経験しないこの氷河では、BCの位置は決められていない。登攀に有利なBCの位置を最終的に確定するには、隊の意志を明確にかつ強力に示して、ゆっくり歩いて日数を稼ごうとするポーターを遅滞なく先導しなければならない。そのためできるだけ多くの隊員が先行し、すみやかに氷河を遡って、キャラバンを引張ることになった。

体調の思わしくない石橋・斎藤は山口ドクターに付き添われてあと1日プーに滞在し、翌日ベースキャンプに上がることにする。丹羽隊長はタシゴンパに挨拶のため立ち寄る。

小さな橋を渡り、カルカの中の平坦な歩き易い道を暫く辿る。ルートはモレーンの中の踏み跡に変わりアップダウンを繰り返す。先行していたポーターを追い越して、花井と小泉はナルで雇ったガイドと共にキャラバンの先頭になった。

BC予定地は、右俣氷河左岸4900m付近のカルカに決めてあったのだが、モレーン上の踏み跡は起伏を繰り返しながら左岸を離れ、徐々に本流を横断しはじめる。出発して約2時間、モレーンの小さな頂上部で初めてヒムルンが遠望できる。予定の登攀ルートの下部は視認できないが、頂上直下の登攀ルートとそこから下る顕著な北西尾根上部、及び尾根末端の白いピークが手持ちの地図で確認できる。踏み跡は本流の右岸側に完全に移る。さらに1時間、高度4500m付近でヒムルン頂上から北西に落ちる氷河の下流が右岸から合流する。2つの流れに挟まれるようにして三角形の広い平坦地に出る。ここが、夏季プーの村人が放牧のため家族で定住する最奥カルカ（パンガリカルカ）である。

案内のガイドはこのカルカこそおまえたちのBCであると主張し、先着した足の早い数名のポーターはほっとして荷をおろす。ここで、花井と小泉は当初のBC予定地、登攀ルートの大幅な変更を協議する。手持ちのかなり正確な地図と、途中モレーン上から確認した北西尾根の状況から、予定を変更しても登攀ルートは充分開拓できると判断する。流水が確保でき距離的にはより北西尾根に近く、氷河本流のやっかいなモレーンの横断を避けることのできる1本北側の支谷にBCを移すことにする。そうと決まれば、先頭がこのカルカでもたもたしていると後続のポーターが停滞する恐れがあるので、小泉はシュルパのニマをつれてさらに先を急ぐ。花井はカルカからBC変更を後続の隊に交信で伝える。

ここでのこの判断が、予測した登攀活動を一変させてしまった。登攀に要する日数、使用する装備の種類と量、食料・燃料の荷揚げ計画、隊員の高度順化スケジュールはすべてキャンセルされ、最終的には、隊員個々の登頂の成否にまで影響してくることになる。

BCはパンガリカルカからさらに高度差300m。水量の少ない支流を渡り、陽当りのよい緩く傾斜のある草地に設けた。先住のヤク・ヒツジを追い払い、続々と到着する荷の整理が始まった。高度は4850mである。

この日の午後、先着した小泉と花井はさらに上部の偵察に出る。緩い草地を辿りガレ場の尾根に取り付き200mほど登ると、小高い丘の頂上に達する。ここから目的の氷河への取り付き点を確認して戻る。BCではコックの指揮のもと手際よくキッチンの石室の構築がすすみ、遅れていた隊員も三々五々到着した。青いメステントを中心にして隊員の個人テントが立ち並ぶ頃にはポーターへの支払いも終わり、カトマンドゥを出発して2週間、キャラバンは完了した。

【登攀活動】

計画では、隊員は4名ずつ2パーティに分けて行動する。高度順化を優先しながら前線でのルート工作と後続しての荷揚げを交互に担当し、5日行動に2日の休養を与える。BC上部には3つの高所キャンプを配し、使用する固定ロープは最長で2000m。3週間の登攀活動期間中に可能なかぎりの隊員をピークに送る。クライミングシェルパには前半は荷揚げに専念してもらい、可能であれば登頂隊に加わえるというものであった。

結果は、開始して8日目の10月3日に第1次登頂、11日目の6日に第2次登頂、翌7日にはすべての隊員とシェルパがBCに戻り、12日間で登攀活動は終了した。4名の隊員、2名のシェルパがピークにたち、使用した固定ロープは250m、準備した装備、食料、燃料等の大半は使用されることなく帰路キャラバンの隊荷を増やす結果となった。

9月26日

小泉と花井はルート偵察のため上部へ、残りの隊員は休養をかねてBCの整理にあたる。偵察隊は、昨日の到達点から一旦ガレ場を下り、沢状のモレーンを辿る。氷河の側部とスラブ状の露岩がコンタクトし、流水の出現する地点を前進デポ地とする。高度5250mである。さっそくポーターによる荷揚げを開始し、この日のうちに約80kgの隊荷がこのデポ地に集結した。偵察隊の2人はここから氷河に取り付き、C1予定地(5450m)を通過し、北西尾根への取り付き点である広大な雪原(通称“野球場”、高度5650m)に達し、登攀装備をデポしてBCに帰着した。

この偵察により、以下のことがわかった。5250mから始まる氷河は後退していて極めて貧弱である。アイスフォールも規模が小さく、登行を妨げるクレバスはオープンもヒドンもない。ときおり現れるセラック状の段差も容易に左右に迂回ができ、積雪は深い所でもくるぶし程度である。

北西尾根の取り付き部までのルートに問題のないことが報告された結果、翌日にはC1を建設し、花井・小泉はさらに上部の偵察、他の隊員は順化の為C1を往復することが決められた。また、ポーターによるデポ地までの荷揚げ隊荷も使用優先順に選別された。この日、

整備の終わったBCには、プーから遅れていた石橋・斎藤・山口ドクターも到着した。

2週間のキャラバンによる疲労の蓄積、BC高度への順化の遅れから生ずる隊員間の体調のバラツキはかなり顕著ではあるが、特に不調を訴える者もなく、BC開設の宴が催された。単調なシェルパソングを聴きながら、少量のアルコールによる酔いで早々と自分のテントに引き上げる隊員が多かった。

9月27日

食料担当の石橋はBCにて高所キャンプ用食料の整理、選別を行った。別動隊の3名も含めて他の隊員は、個人装備を担いで、それぞれの体調、登行スピードに応じてデポ地、またはC1を往復し高度順化に努めた。シェルパのニマ、ダヌーは29日下山していく別動隊のポーターを使って、効率よく荷揚げを監督し約200kgの隊荷をデポ地に集積させた。

花井と小泉は北西尾根稜線までのルートを開拓するため早朝BCを出発し、C1予定地まで露営装備を荷揚げした。昨日の到達点“野球場”からはアンザイレンで稜線へ延びる200mの雪面に取り付いた。傾斜は 30° ~ 40° でときおり膝までのラッセルになるが、雪は古く、雪崩を誘発する弱層もない。稜線直下では60m程、傾斜が 50° を超える雪壁になるが硬い氷は出てこない。到達した稜線は尾根形のはっきりしない広大な雪面で、クレバスは横走するが技術的に困難はない。稜線の上部6000m付近には巨大な懸垂状の氷塔が乱立するが、ルートはその間隙を特に障害もなく容易に抜けられそうだ。2人はここで下降し、この日後続の隊員によって新たに建設されたC1に入った。天候は依然として安定しており、隊の進行は順調であった。

9月28日

前日C1に滞在した花井と小泉は北西尾根上にさらにルートを延ばし、C2予定地の手前5950mまで達し、テントを含む露営具をデポした。シェルパのニマはこの2人に後続し、稜線上まで初めて登攀装備を担ぎあげた。稜線上ではクレバスを避けるため、迷走気味のラッセルを強いられた。雪は膝上まで没し、先頭は空身で後続が2人分の荷を担ぐという状態で意外にルートが延びなかった。稜線直下の急斜面に60mのロープをフィックスし偵察の2人はBCに帰着した。

C2の建設と、その上部ルートの開拓はこの日C1に入った清水・樋口の隊に引き継がれ、丹羽隊長も視察のためC1に入った。石橋、斎藤、山口ドクターはそれぞれBCから“野球場”を往復したが、順化の遅れている戸田は静養のためプー送りとなってBCから下った。

当面必要な装備、食料等はC1及びデポ地に集積を完了した。この夜、BCでは斎藤によって雪崩ビーコンの取扱説明講習が行われた。はじめてビーコンを手にする隊員も多く、習熟は期待できなかった。

9月29日

この日の朝、これまで本隊と行動を共にしてきた木崎、佐藤、名越の別動隊はカリガンダキを目指してBCを出発した。登攀を続ける隊員には激励と、秘かに隠し持っていた貴重な嗜好品を放出していった。BCではメステントの賑わいが半減した。

C1からは清水と丹羽隊長が上部を目指したが、隊長は稜線に出た地点で、清水は6000m付近で視界不良のためC1に帰着した。この日ルートはほとんど延びなかった。樋口は体調が優れず早々にBCに戻り、ガモウバックの被験者となって、BC滞在の隊員に格好の余興を提供した。前日デポキャンプに滞在したニマ、ダヌーの両名は先行する清水を追って6000mまで荷揚げを行い、BCに帰着。河合ドクターはC1を往復し、石橋、斎藤の両名はルート工作に加わるべくC1に入った。

9月30日

ルート工作のため清水、斎藤がC1から出発して行った。石橋は前日の樋口と同様、調子がでずBCに戻った。6000mから上部は傾斜がさらにおちた雪面が続く。相変わらず膝上までの深い雪に悩まされ、加えて斎藤が高度障害のため大きく遅れ、この日の到達目標であるドーム状ピークまでは届かず、6150mで時間切れとなった。ヒムルンヒマールの頂上はまだ望めず、C3までのルートも確認できず、BCには陽が落ちてから帰着した。

この夜はブーで休養していた戸田も復帰し、全隊員がBCに集結して作戦会議が開かれた。隊全体の進行状況はほぼ予定通り。C2建設と登頂ルートの確認が遅れているが、ここまで確保したルートはがっかりするほど容易で、用意した大量の固定ロープ等の登攀装備は不要になり、予定の荷揚げ量は激減した。すでに必要最小限の露営具、燃料はC1に集積した。

問題は2点である。いままでのところ安定している天候のゆくえと隊員の高度順化である。一度大量の降雪に見舞われると、雪崩の巣となるような斜面がルートに連続するため、登攀日程が大幅に遅延するおそれがあること。さらに予想以上のペースでルートが延びてしまい、BC到着前後から顕著であった順化の遅れた隊員と進んだ隊員間のギャップはますます拡大してしまった。この格差は活動量、特に登行スピードに現れ、登頂予定の隊員の足が揃わなくなったことである。

会議の結果、現在の好天周期を逃さず、すばやくピークをおとすことが優先された。このため「高度順化を優先して可能なかぎり多くの隊員、できれば8名はピークに立つ」という当初の方針は放棄されないまでも、あっさり2次的目標になってしまった。順化の遅れた隊員には「もたもたしてはピークに立てないまま遠征が終了してしまう」という思いが心理的プレッシャーとして残された。

BCで2日間休養した花井、小泉、ニマの3人が翌日から前線に復帰し、C2、C3を建設した後、可能であれば登頂を図る。清水、樋口、斎藤、ダヌーが後続し、1次隊登頂後直ちに2次アタックを決行する。河合、戸田、石橋、ブリは6000mの順化を獲得しながら上部キャンプに登り3次アタックに備える。丹羽隊長はこのままBCに残留し、益田、山口ドク

ターはそれぞれの到達高度の更新を狙うことが決められた。

10月1日

BCを出発した花井、小泉、ニマは個人装備、食料を担いで高度6000mにC2を建設した。高度差1200m、登高時間は6.5時間であった。樋口、山口ドクターは北西尾根稜線に達し、下降の安全のため、稜線への取り付け雪面に新たに160mのロープを固定してC1に入った。河合ドクターはC1を、戸田は“野球場”を各々往復した。他の隊員はBCで休養した。

10月2日

第1次隊の3名は好天の中、C2を出発して清水隊の残した深いトレースを辿った。傾斜が緩く距離の割には高度の稼げない雪面が続く。ドーム状ピークへの最後の登りにかかるあたりで清水隊のトレースは消え、ようやくアイゼンのきくクラスト斜面となる。ラッセルから解放されてペースがあがる。ドームの南側をトラバース気味に巻き、高度6200mあたりで初めてヒムルンヒマールの頂上を視野に捉える。ヒムルンヒマールからネムジュンへは厳しく瘦せた吊り尾根の稜で連なり、発達したヒマラヤ巒には容易な登攀ラインは見いだせない。辿る北西尾根は北側に雪庇を張り出し、北西の氷河に切れ落ちている。6200mのピークからは瘦せた尾根が最終コルに下降して、約1000mの急峻な雪面となってピークに突き上げる。コルを通過して高度6250mにアタックキャンプとなるC3を建設したのは12時30分であった。C2との距離2.5km、途中コルを経るため高度差はわずか250mである。

第2次隊の清水、樋口、斎藤、ダヌーの4名はC1に集結し、翌日C2に上がることにする。山口ドクターはC1からC2付近まで登りBCに戻った。他の隊員はBCで待機した。遠征はいよいよクライマックスを迎えた。

10月3日

1次アタック隊の3名は5時50分、C3を出発してまだ暗く陽の当たらない急峻な雪面に取り付いた。雪は堅く、ところどころ氷結した箇所が6600m付近まで続く。風があり、陽の当たらない斜面が続くためか、体感気温は極端に低い。出発直後からの両足指の冷感がしだいに無感覚になってしまった花井は凍傷の恐れを感じ、高度6600m付近で一旦C3に応急処置のため一人で戻った。7時15分である。花井から交信用の無線機をひきついだ小泉はニマと快調に登行を続けた。ようやく斜面に陽の射しはじめるころには、再び膝までもぐる雪面に変わり著しくペースがダウンした。C3から頂上まではほぼ一定の傾斜(約40°)が続くが、氷結部や雪が深いところではジグザグで登る。最後の300mはラッセルもすねまでとなつて一気に直登し、10時45分小泉とニマが最初に頂上に達した。

頂上は狭い雪のドームである。登ってきた北西尾根側以外はすべて鋭く切れ落ちている。ネムジュンへ連なる南側の稜線は、身をのり出さなければ目で追うこともできないような傾斜で高度を落し、中間の無名の鋭峰に続いている。この無名峰から先の稜線は遮られて見通

することができないが、この稜線の縦走は神経をすり減らすものとなるだろう。遠くマナスル、アンナプルナ、ダウラギリの巨峰は湧き始めた雲海の上に屹立している。北方のチベット側には山なみがとぎれることなく視界を満たすが、標高が低く、乾燥のためか雪氷が後退して迫力は欠ける。頂上から登頂成功の報を下にいる各パーティに交信した2人は、下山を開始し、C3、C2、C1の各キャンプをパスして夕方17時00分にはBCに帰着した。

一方、途中でC3に戻った花井は、急いで沸かしたお湯で足指に感覚を取り戻した。真新しいソックスにはきかえて、8時30分登行を再開し、5時間でピークに達した。昼過ぎから発生したガスのため、頂上からの眺望はまったく得ることができなかった。15時00分にはC3に戻り、それ以上の下山には時間切れのため、そのまま一人でC3に滞在した。

C1を発った第2次隊の4名は13時00分、風の強まってきたC2に到着し、その直後、登頂を終えた小泉、ニマを迎えた。河合、戸田、石橋、プリの第3次隊のメンバーも予定通り昼過ぎにはC1に入り、設置された全てのキャンプに隊員が配置された。この日各キャンプ間では遅くまで無線連絡が交わされた。

10月4日

C3に泊まった花井は下山を開始し、途中C2からC3に入る第2次隊と6200m付近で交差した。2次隊は13時30分にC3に入り、下山を続けた花井はC1に戻り、そのまま2次隊、3次隊への支援と交信中継のため登攀活動が終了するまで留まった。

3次隊の戸田、石橋、プリはC1からC2を往復し、BCから再び上がってきた益田と共にC1に滞在した。3次予定の河合は体調が優れず、これ以上の登行を断念してBCに下った。

10月5日

C3からは思わしくない天候の中、清水、樋口、ダヌーの3名が2次アタックを開始したが、回復しない天候のため6500m付近でこの日のアタックを中断してC3に戻った。

一方、斎藤は夜のうちに体調を崩し、2次アタックを諦めてこの朝、悪い視界について一人でBCまで帰着することになった。この帰還中、交信のための無線機をもたない斎藤の消息をめぐってBCでは若干の緊張が走った。

C2に到着した3次隊の石橋とプリの2名は、丁度C3から帰着し疲労の為かテントの中で墮眠をむさぼる斎藤を発見して、下山を促した。相変わらず順化の遅れを取り戻せず調子でない戸田は、C2を目指したが北西尾根にでたところで3次アタックを諦め、泣く泣くBCに下った。高度の影響と疲労はそのムーンフェイスに現れ、隠しようがなかった。前日C1に入った益田は視界の回復しない中、戸田と共に6000mまで達して年寄り組の意地を示した。

10月6日

心配した前日の悪天も回復し、6時30分にC3を出発した清水、樋口、ダヌーの3名は1次隊のトレースにところどころ新たに積もった雪のため再ラッセルを強いられながらも順調に高度を稼ぎ、11時15分には頂上に達し、2次アタックは成功した。晴れ渡る視界の中、頂上からのパノラマは持参したビデオで撮影された。2次登頂成功を伝える交信のなかで思わず口走った「365°の眺望云々」の清水の声は録音記録され、ピークに立った興奮を差し引いても大学助手の権威は著しく失墜した。2次アタック隊は登頂後下山を開始し、3次隊の万一のサポートのためその夜C2に滞在した。3次隊の石橋、プリの両名は途中、2次隊と交差してC3に無事到着した。

C1では2次隊登頂を祝って、益田隊員が念願のカラオケを強行し、場違いな演歌の旋律にのって息もきれぎれの歌声が録音された。

BCでは、休養の終わった小泉が対岸の支尾根のピークまで登り、2次アタック隊の行動を逐一モニターしながら、400mmの望遠レンズに登頂直前の姿を捉えることに成功した。

10月7日

早朝、3次隊の石橋からの交信連絡が各キャンプを混乱させた。天候は悪くないが、石橋の疲労が激しく、本日のアタックは中止して、このままC3に停滞し、体力を回復した後、翌日3次アタックを決行したいという要請である。BCの丹羽隊長、C1の花井、C2の樋口を中心に協議され、結局石橋の要請は拒否された。直ちに3次アタックの中止、全ての登攀活動の打ち切り撤収が決定され、丹羽隊長から各キャンプに伝達された。

C1の花井の指揮で撤収が始められた。C3では落胆の石橋がプリとテントをたたみ、C2の清水、樋口、ダヌーと合流後C1に下ってきた。BCからは荷下げのためニマが応援にかけつけすみやかに各キャンプは撤収された。全隊員は陽の落ちた頃、それぞれの感慨を胸にBCに帰着した。くやしさを残る石橋隊員が将来のカラコルム遠征計画を表明して、ヒムルンヒマール登攀活動の全てが終了した。

【総括】

① ベースキャンプの位置変更とそれに伴う下部ルート的大幅な変更は、登攀活動全体の事前シミュレーションを反古にしてしまった。恵まれた好天にも助けられ、予想以上に障害もなく延びるルートは、当初想定した順化スケジュール、隊員の役割分担、荷揚げ計画の全てを狂わしてしまった。

ダウラギリ以来10年のブランクにもかかわらず、他の隊員に比して体調の優れた花井、小泉両隊員の動きが、隊の行動基準となってしまった。その結果、順化の遅れた隊員の半数は回復する時間的余裕も与えられないまま、トップの行動に引張られて自滅した。

参加隊員個々の体力、高度順化については、年寄り組は予想どおり順化する前に手持ちの体力を消耗した。若者グループの多くは予想以上に新しい高度に敏感で、旺盛な体力を発揮

する前に遠征が終わってしまった。総じて貧弱、弱体であり、登攀隊長としては正直とまどいを覚えた。

② 1次アタック後、直ちに2次、3次と連続してアタックを行うという今回のタクティクスは強引で余裕がなく、9月末の多くの隊員の状況を考えてと無理があった。

1次登頂後、一旦隊を引きもう少し時間をかけて2次、3次隊を編成してピークに送ることにすれば、少なくとも石橋、斎藤兩名には登頂の可能性が高かったと思う。

10月7日という日程、食料に余裕を残したまま登攀活動を打ち切らなければならなかったのは、登っていない隊員の当時の体力、体調を考えれば妥当な判断である。しかし登攀前半の段階で、ルートを延ばすことだけに性急で、隊全体の動き、特に各隊員の順化状況のチェックを怠ったのは、リーダースタッフである私の余裕のなさが原因である。

順化の遅れた隊員は、思い切って前半の登攀活動から切り離し、4000mから6000mの高度の間を10日間くらい自由に行動させて、高度順化だけに専念させる、順化を確実なものにしてから登攀活動に復帰させるという方法を採れば、結果は変わっていたかもしれない。事実、今回は隊員の全てが前半の登攀活動に“公平に、また平等に”参加する必要はなかった。

③ ヒマラヤ登山は高度の問題を除けば技術的には極めて単純で、総合的には容易で、国内の山行に比して時には楽でさえある。

高度順化とは各個人が到達する高度の影響に正しく反応し、各個人がその時の体力、体調に応じて適応し、正しく衰退していく過程である。すぐれて個人的なこの過程には、たまたま蓄積された他人の高所登山・ヒマラヤ遠征の経験は普遍継承されない。順化の指標は食物の摂取力、睡眠力、さらに5000mを越えてからは発揮できる登高スピードだけで判断するべきで、不確かな自覚、他覚症状に捕らわれると判断を誤ると思う。

④ 今回雇った3名のシェルパの登攀力、荷揚げ能力、高所登山経験は、ほとんどの隊員を凌駕し、隊全体の登攀活動の支援という意味では申し分なく優秀であった。容易なルート、引き続く好天の中で、彼らの旺盛な活動力はサーブたちを圧迫、追い立てる程であった。

⑤ ヒムルンヒマール・ネムジュン山塊の課題は今回の北西尾根ルートには残っていない。条件をいかに変更しても、今回のルートを再度試みる価値はまったくといっていいほどない。

西面からのネムジュン登攀（1986年NTT九州隊試登）は、我々の今回の登攀に比べてはるかに困難に見え、魅力がある。ヒムルンヒマールとネムジュン間の縦走は、趣味の問題である。ヒムルンヒマールから南西のギャジカン、北西のラトナチュリは数少ない手つかずの山塊で、それなりの魅力はあるが、残念ながら山が小さい。



II章 紀行と随想

輸送と登頂のこと

清水 収

<輸送のこと>

1992年1月の例会で隊員の役割分担が決められ、私は輸送担当となった。隊荷の梱包、空輸、通関、キャラバン輸送…これは大変な仕事だ。何しろ初めての海外登山である。何をどうしたらよいか、戸惑いを覚えた。

梱包に使うプラスチック製段ボール箱の寄贈依頼、航空貨物会社での情報収集を終えると、当面することはなかった。7月に入って装備と食糧がぼつぼつ集まりだし、月末には膨大な量の隊荷が集積場所となった道教大の木工室の片隅を埋めた。夏真っ盛りの8月1・2日、パッキングである。集めた荷物はなるべく持って行きたくするのが人情で、終わってみれば37個、総重量1トンもの箱の山を前にして啞然としてしまった。それから2日間、慣れない英文で膨大なパッキングリストを作成する。関税があるから値段は安めに申告しよう、羽毛服は上下で30\$、手袋は3\$…といった調子（後でカトマンドゥ市内の登山用具店を見て、そんな値段では中古品すら買えないことがわかった）。8月5日トラック2台で箱の山を日通航空に持ち込み、100万円余りの請求書を受け取って発送作業は終了した。

先発隊は首尾よく通関を終えており、9月6日カトマンドゥのエージェントの事務所で懐かしい隊荷に再会する。キャラバン輸送に備え、隊荷の再梱包をエージェント事務所の前庭で行ったのだが、強烈な日射を伴った暑さと夕方のスコールには悩まされた。帽子なし上半身裸で半日も作業すると、肌は真っ赤に焼け、頭痛・発熱に見舞われる。午後3時を過ぎると暑さで頭がボーッとしてきて能率が悪くなるが、そのころには決まって雲行きが怪しくなり、そそくさと荷物をまとめシートをかぶせて一日の仕事が終了する。普段日本ではジュースなど飲まない隊員達が、冷えたコーラを求めて向かいの小さな雑貨屋に足繁く通い、店主のおやじをかなり儲けさせたはずだ。

カトマンドゥ調達の食糧・装備がリクシャー4台に満載されてやって来た。あまりの多さに呆然とした隊員達の前で、エージェントのスタッフ達が手際よく30kgずつドッコと呼ばれる竹籠にまとめてゆく。あれよあれよという間に、その数は70個あまりとなった。日本からの輸送分とあわせてポーター120名分という、大遠征隊クラスの量となってしまった。多すぎるのかどうなのか、キャラバンを始めてみないことには判らない。

キャラバン初日のポテオラルの朝は、まるでセリ市のような喧噪で始まった。朝のお茶もそこそこに、午前6時半からポーターへの荷分けである。野次馬も含めれば150人以上の群集と隊荷の山に囲まれ、サーダーのブリがひとりで仕切っており、けたたましい声とともにポーター一人一人に荷物をわたし、札に荷物番号を書き込み持たせてゆく。我々の付けた番号は完全に無視され、手近な荷物から新しい通し番号が付けられてゆく。口をはさむ雰囲気

気ではなく、途中から我々の番号と新しい番号との対応をメモするだけとなってしまった。何しろ数は120である。ここに、輸送係の隊荷管理ノートはおおかたその効力を失うこととなった。荷分けは延々2時間以上続き、やっと朝食にありついた時にはすでに9時をまわっていた。

その後毎日、皆の非難の言葉を浴びることになった。時まさに下痢症状の隊員が多かったところで「トイレトペーパーはどこにある?」「ゲータレードは何番の箱だ?」…。即答できない輸送係に対して、切迫感を感じ焦っている隊員達の浴びせる声は容赦ない。

大キャラバンは当然ながら先頭と最後尾の差が大きく開いてしまう。宿泊地の村に到着するのはいつも昼頃から夕方までと、3～4時間の差が出る。最後尾のフォローを担当すると休む回数がおびただしくなり、その都度沿道の小さな茶店に引っ掛かってお茶とタバコになる。辛うじて抱いていた禁煙の志はこんな訳で吹き飛んでしまった。やっとラストが立ち上がったので一緒に歩き出すと、100mも行かず次の角を曲がった所で別のグループが休んでいるといった具合である。もっとも彼らにしてみれば1日かけて到着すれば良いのだから、早く着いてゆっくり休もうとする者もいるし、ゆっくり歩いて夕方までに着こうとする者もいる訳だ。日数を重ねてくるとポーターとも顔なじみになり、風貌や仕草から隊員達にあだ名を付けられるポーターも出てくる。

カン・ラ越えではナルまで荷を降ろしきれず翌日回収しに行った者もいたが、半数以上は裸足で残りはゴム草履といった格好の彼らが、灼熱のカトマンドゥやドゥムレからトラックで連れられ、日中でも肌寒いベースキャンプまで2週間歩き続けてくれたのだから、たいしたものだ。それも、ストライキなど大きなトラブルも無しに。

こうして我々は無事BC入りし、前半の輸送任務もなんとか終了したのである。

<登山活動のこと>

6000mを過ぎると広い平坦なプラトーが拡がり、その横断は膝まで没する長いラッセルとなった。時々ガスに包まれ立ち止まる。先程まで見えていた地形を思い起こし、付けてきたトレースに磁石を合わせて進むべき方向を見定める。朝C1と一緒に出発した斎藤はかなり遅れているようで、全く姿が見えない。今日、9月30日の我々の目標はアタックキャンプとなるC3へのルートの見極めと、それに基づくC2地点の確定である。幸い体調は良好で、斎藤を待たずにひとりで深雪との格闘を再開する。

1時間半ほどでプラトーを横断し終り、目指すドーム状ピークの基部に達した。やっと雪面が堅くなる。ドームの上に立てば、C3予定地へ続く北西稜の状態と、キャラバン途中以降、まだ誰も目にしていない頂上の姿が望めるはずだ。ガスは切れて飛び去り、視界も回復してきた。ドームのクラストした斜面をアイゼンを効かせて登る。が、あと少しのところまで引き返し予定の午後1時半となってしまった。高度計は6150mを指している。振り返ると、威圧的な斜面を連ねたギャジカンの長い頂上稜線が正面に拡がる。視線を下に移すが、横断してきたプラトーに人影は見えない。残念だが引き返すことにしよう。

プラトーの前半部まで30分ほどで下ったところで、斎藤と合流した。高度障害による著しい消耗ぶりが見て取れる。初めて6000mを往復した昨日の自分のように歩けるだろう、と考えていたのが失敗だった。それからの下山は遅々とした足取りの長くつらいものとなった。10歩進んで立ち止まり、15分歩いて腰をおろす。楽にさせてやる術の無いもどかしさを感じながら単調な行動を繰り返し、とっぷり日の暮れた午後6時半、BCに帰着した。

10月5日、C3の寒いテントのなかで樋口、ダヌーと3人でザックに腰をおろしていた。今朝、高度順化のかなわなかった斎藤がC3から単独で下山し、3人で頂上アタックに出たが、雪と風で視界も悪く引き返してきたところだ。ちょっといやなムードである。気を紛らわすラジオもタバコもない。テントの外は相変わらずガスと風の世界。斎藤の下山を案じつつ、一日中とりとめのないことを考えていた。

翌6日は待望の快晴で朝を迎えた。ギャジカンの肩越しに、アンナプルナ連峰とダウラギリが朝日に淡く染まっている。お茶と食事を済ませ、3人の体調と天気のことをトランシーバーで下部キャンプに伝えれば、あとは出発するだけだ。頂上への斜面は意外にも氷結し切っておらず、体重をかけるとステップが出来る堅さだ。スリップの危険性は少ないかわりに、トップは脚力を消耗する。単調で長い斜面をひたすらに登る。上部へ行くに従って風がやや強くなってきた。後方を振り返ると、アンナプルナやダウラギリが湧き上がる雲に包まれ、眼下には白と茶の縞模様の右俣・左俣両氷河と、それらを分かつ白い北西稜が見渡せる。

傾斜がやや緩くなり、その先にまた30m程の急斜面が見える。先に行くダヌーが何か身振りをして、その斜面のスカイラインに消えていった。ああ、頂上なんだ。振り返ると樋口がビデオカメラの用意をしているところだった。

今まで下から見上げていて丸い頂上を想像していたが、上に立つとそこは意外に狭く、頂上らしくて嬉しい誤算だった。5m程先でザックに腰掛けたダヌーが何か喋っているが、風の音でよく聞き取れない。傍らには、1次隊のものらしい小さな赤旗が控えめに残されていた。顔が自然にほころんでゆくを感じる。そばまで行って抱擁し合う。樋口もすぐに上がってきた。目頭を熱くさせているように見えたのは、気のせいだろうか。やはり、この瞬間の感激を味わうために、今までやってきたのだ、と今更ながらそう思った。

360°の眺望をカメラとビデオ、そして心に収め、満ち足りた気持ちで頂上を後にした。

カン・ラ越え

木 崎 甲子郎

ナルコーラの橋がモンスーンの雨で落ちてしまった、という話はカトマンドゥを出発するときから聞いていたし、現地に来てからも当分は通行不可能なことを確かめていたから、カン・ラ越えはしかたがないなぐらいに思っていた。

ピサンあたりの、昔は氷河の塞ぎ止め湖であつたらしいひろびろとした畑や、ゴルフ場のよりに美しい疎林のなかを歩きながら、まじめに考えてみると、ソガワールから比高1800mの登りは、これはこの歳になつては無理かな、やめてまっすぐトロン峠に向つたほうがいかもしれない、などと意気地のないことを考えたりしていた。

なにしろ、これまで何回もヒマラヤを歩いたことがある、といつてもせいぜい4000mどまりの麓をぐるぐる回っていただけだから、5300mの峠を一日で越えるなどという芸当は分を越える離れ業だ。

イオンも似たようなことを考えていたらしい。登りの途中で高山病になつて引き返し、また1800mを登りかえすなどはとてもできない相談だ。途中でビバークしたい。だが途中には水がないからどうするか。

名越は、荷を途中まで上げて引き返し、翌日それを担いで越すのが常識だ、とわめいている。年寄りにそんなことが出来るか、体力的にまいってしまう、とイオン。

何日か前、カングルーをめざした旭川隊は一日で峠を越えてナルの部落まで行つた、という話を誰かが聞いてきた。事實は、前日に途中まで登つてデポしたのだったが、それはあとでわかつた話。連中が出来たのならこちらも、本隊は一挙に越えようと決まつた。

もやもやしているところに、リエゾンオフィサーの若い男が旭川隊のリエゾンは馬で越えたそうだと、という話を聞いてきた。それだ、というわけでサーダーにいつて4頭借りる話をつけさせた。リエゾン、ロートル二人、風邪で寝込んでいた石橋の4人分だ。

快晴で、正面にはアンナプルナIV峰が夕焼けに輝いていた。

夜中、パッティの2階の奥まった部屋でうとうとしていると、名越がやつてきて「大変、大変、サーダーの話だと放し飼いの馬が谷の奥のほうに行つてしまつて見つからないから、明朝の出発は駄目だそうですよ。明日探してみるが保証はできないといつている。どうします？」

どうしますといつても他にしようがない。待つまでだ。

次の朝早く本隊はポーターをひきつれて、チベット風の陰気な部落を抜け、裏山のチョルテンの陰に消えていつた。名越は本隊と一緒にいつてしまつた。残つたのは馬用の4人と熱のある石橋をみている山口ドクター、それにトレッキング隊のサーダーとポーター8人だ。

このサーダー、ダン・バハドゥールは16年も前、ニューデリーでヒマラヤの地質セミナーがあつたとき一緒だつた白石と丸尾の3人で、エベレストを眺めにタンポチェまでいつたときのポーターだつた男だ。そのときはまだ十代のかわいい青年だつたのが、いまは立派なサーダーに育つている。だが、よく気が利き、こまごまと面倒見がいいところはまったく変わつていつない。

かれはシェルパではなく、ライの出身なのだが、ナムチェバザールの下のほうに畑と家を持って家族を住まわせていつているという。最近はかれのように、シェルパ以外の部族の人間がサーダーになる者が多くなつたせいだ、サーダーとはいわずガイドと呼ぶよつになつたよつだ。

コックもキッチンボーイもライのせい、われわれのことをサーブとは呼ばない。「キザキサン」などとぬかす。これまでもいつもサーブとかバラサーブと呼ばれてきたのが、いきなり「サトーサン」などといっているのを聞くと、「えっ」と思ってしまう。これも時代の流れというものだろう。パッティがロッジに変わり、ドドチャがインスタントコーヒーに、ダルバートがピザパイになっていく時代である。

ダンがやってきて、馬は山奥にちらばってしまったのでとても探せない、という話を持ってきた。いよいよ歩きか、どこまでもつかかわからないが、いざとなったらさっさと引き返すまでだ、と覚悟を決める。

本隊は昼から昼すぎにかけて峠に着いたという無線連絡がはいった。ポーターの半分は荷物を置いて空身で峠を越え、明日また取りにくるという。

午後になって馬主がやってきたらしい。主人の部屋にはいってなにやらごそごそ話していたダンが来て、馬の準備ができた。前金に400ルピー欲しいといっているという。見ると、馬主というのは二十歳そこそこのチベットの若者だが、きつい顔をしている。

そんなこんなしているうちに、追いかけてきた後発の小泉と斎藤が着いて、ぐっとにぎやかになる。

翌朝、5時にお茶で起こされたが、馬が来ないことにはどうにもならない。足で登る山口、小泉と斎藤ははやばやと出かけていった。1時間ばかり遅れて騎兵隊出発。乗ると足が地に着きそうな小さな馬だが、馬力はあるらしい。村の裏手の急斜面をトコトコ登っていく。

イオンは乗馬の心得もあるらしく、「チョイ」とか「ハッ」とか叫びながら急斜面をまっさきに登っていく。マルシャンディの谷が眼の下になっていくうち、さすがに頑丈なチベット馬もくたびれるらしい。だんだん歩く間合いが短くなり、休みがふえてきた。動かなくなった馬に、木の枝で尻をひっぱたいて気合いを入れながら追い上げるのだ。草つき尾根状の急な登りを終わって、最後のガレ場の下に着いたら昼になっていた。

ぼくの乗った馬は馬主の若者のものらしく、「いい馬だ、いい馬だ」と片言の英語でいっていたが、馬がへばってくると、ぼくの顔をみて「ハンドレッド キログラム。ハンドレッド キログラム」という。ばかいえ、そんなに重くはないぞ。「セブンティ キログラム。セブンティ キログラム」と叫んでやったが、通じないようだった。

イオンの馬は鞍ではなく毛布を2、3枚かけただけのいい加減なものだったので、毛布がずれてはだか馬に乗ったような格好になる。かれはこのあと何日か「ケツが痛い」とこぼしていたから、かなりダメージを受けていたようだ。

とにかく、このガレ場の急斜面の登りになるとへばるのは馬も人もおなじだ。だが、馬は人とちがって呼吸法を知らない。だから、バカバカと10mも歩くとハタと止まって、ハアハアと息をついている。なかなか動かないから、「チョイ、チョイ」と怒鳴って木の枝でひっぱたくと、10mばかりバタバタと引っ掻くように歩いて、またハアハアハア、である。人はゆっくりゆっくり歩いているが、けっきょく馬を追い越して先にいってしまう。まるで

兎と亀を絵に描いたような風景だ。

イオンはと見れば、毛布がずれ、あぶみもおかしくなったらしく、馬から下りて尻尾につかまりながら息を切らして登っている。

最後の急坂を這うようにしてカン・ラに着いたら、午後も2時半を過ぎていた。苦闘の5300mというわけである。帰りにはこの峠を歩いて登ってきたが、二人ともべつになんということもなかったのだから、年寄りの騒ぎすぎということであった。

馬主の若者にレンタル代500ルピーを払ってやった。するとまた、「ハンドレッド キログラム。ハンドレッド キログラム」という。よしよし、おれは70キログラムしかないが、ボーナスをやるよ、と100ルピー札一枚を足してやったら、びっくりしたような顔をしていたから、ちょっと多すぎたかな、と思ったが、馬の苦勞を考えたら安いものだ。すると天の声が聞こえてきた「おまえのような甘ちゃんがいるから、相場が上がってくるんだ。しょうがねえ奴だ」。

というようなしだいで、はじめての5000mを越えたのだが、ベースキャンプで本隊と別れてまたこの峠を越え、マルシャンディを遡って、トロン峠の5400mもなんなく越えて、カリガンダキを下ってきたのだから「やってみれば出来るもんだ」。むかしだれからか聞いたような、そんな話である。

もうひとりのヒムルン・ヒマール —5500mの蒼い空、OK—

益 田 稔

…ヒムルンに登りたしと思へど、ヒムルンは余りにも高し。

せめて、真新しき装備など携えて、C1程度で我慢せんか…

<プロローグ>

100万負担してヒマラヤに行くからには山に登りに行くに決っている。あわよくば登頂したい。誰しもそう思っているにきまっている。とはいえ、誰しも事情と言うものがあり、零細企業で安月給かつ3Kという苛酷な環境で疲れ果てていた僕の事情とは、負担金もいささかシンドイし、技術はおろか体力すら自信がないというお粗末なものであった。後者に対しては特に衆目の一致するところだったのがいささか勘にさわっていた。せめて、もう5年早ければ体力のひとつやふたつはあったものを。

衆目の見るところも一致し、登頂も期待できないとすれば、いったい僕は何を目標とすればよいのだろうか。いこか、やめよか……、と試みてきたところで芭蕉ではないが“そぞろ神”はとっくにとり憑いている。ビールを流し込みながら考えた。

…たとえば、世界最高処でのSEXというのはどうか？。痴にはたらけば、角がたつ。や

れやれ、こんな達成目標では余りにも破廉恥、余りにも生臭く知性もなければ能もない。だいいち、AACHに脈脈とながれる“寒冷の系譜”とやらから総スカンをくうにちがいない。情に棹さしたところで、そろそろ棹もたちにくくなっている。とかくヒムルンは行きにくい。

Limiting Case（極端条件）の思考実験はさておき、何か妙案はないか？荒唐無稽でもこじつけでもいい、無意義にして意義ある妙案はないやろか？

そこはよくしたもので、理性が酔いに痺れ情緒に溺れはじめたとき、極くごく自然に迷案がエコーつきで訪れた。これだ！これでゆこう。前後の情勢判断もあらばこそ、ヒムルンゆきをしゃにむに決心した。これを無味乾燥の羅列にすぎない日常性や、ゆき詰りかけた仕事からのなかば逃避、半ば転機を賭けた決断といいかえたところで結果はおなじことである。今にしておもえば、これがつまずきの端緒であったといえはいえる。かくして僕のもうひとりのヒムルンが始った。

<生きとし生けるあかし>

ネパールにくると、まずやることはきまっている。下痢だ。切迫感につつまれた用足しのサイトさがし。捜しつつゆけばそこかしこに点在する先人の残した小高いもりあがり。日本では希薄になったこうした環境に身をおくと、あゝ俺もみんなも生きているのだな、という次元の低い実存感をいやでも味わずにはいられない。

キャラバン初日のポテオラルの朝、目覚めて急に便意を催し、あわてて外へでたときはすでに時機を逸していた。空はすっかり明けはなたれ、人々はいちにちの活動を活発にはじめていた。腹ぐあいから察してどうやら下痢らしいが、カトマンドゥですませた筈の洗礼は無効だったのか。前日、それとなく目星をつけておいた場所へ急行するとすでに2人の先客がいた。近すぎず遠すぎず、絶妙の間合いをとって、しかも互いに見えないような地の利を選んでいるからたいしたものだ。あたりには、早いうちにさっさと済ませた要領のよい先客たちの置土産も残されている。いまいましさ半ば、感心なかばで僕はしかたなく、扇状地をひとの丈だけぐりぐりとしたその涸谷から上の田んぼの面にあがった。実入りのわるそうな稲穂がいちめんになびいているあぜ道を行く男たち。こうなれば山裾のほうへ行くよりない。山の中腹には数戸の人家があった。悪い予感をおぼえながらも腹のぐあいにせきたてられるように山際をめざした。目的の地にちかづいた頃、案のじょう数人の女がこちらを見降ろす位置からがやがやいいながらおりてきた。初日からなんという間のわるさだ。けっきょく転進につぐ転進のすえ、居心地のわるい日課をすませてもどったときは朝の食事が始りかけていた。

ほんとうは、歩き始めてから理想的な場所を捜せばよいのである。隊員のおおくはこれを実行していた。痔もちとはとくに水洗に水辺がかかせなかったからである。ところが、長年培った食ってからでるといふ朝のリズムは、ネパールにきてからというもの位相がずれて、食う前にでるようになってしまったからだ。こうして、目覚めてから出発までの僕の毎日はずりわけ気ぜわしいものとなった。

<異界への関門>

カン・ラ(峠)を越えるまではまだヒンズー世界の延長だった。もっとも、マナスル方面へ

ゆくドゥードゥ・コーラ(河)の出会いをすぎて、マルシャンディ河がアンナプルナ山群の裏側にまわりこんだころからは、青くさい毒素をまきちらしていた段々畑や広葉樹も消え、フィトンチッドの香りのするタンネの類に変っていたし、南のほうからしつこく我々に追いつがっては夕方になると土砂降りの雨をふらせていたモンスーンの雲もいつのまにか消えていた。偏平な石を積んだ家々の平屋根にはタルチョーが翻り、村の入口にはマニ車もならんではいた。しかし、異界に入るには何かけじめが必要だ。ずるずるべったりでは具合がわるい。

思い思いにソガワールのテントを出て、だらだら登りのうんざりする徑をあえぎながらゆく。振り返るたびにアンナプルナが高くなってゆく。今日は富士山の高さから出発したのだ。やっと峠が見えるところに辿りつき腹ごしらえをした。トップを歩く二人はすでに先発していた。ここからは岩層のガラガラした大斜面のなかを一筋の踏み跡がジグザグに登っている。あとの隊員はまだまだこない。小半ときほどして先の二人を目でおってみたら、いない。もう登りきってしまったのか。ここを発つまえは、「あと1時間ほどで峠に着きます。」と元氣よくトランシーバーにしゃべっている声が聞えていた。よくよく目をこらしてみると、思いもかけぬ下のほうにノロノロと歩く二人の姿が豆つぶのように見えた。

根氣よく登るにつれてスカイラインにチョルテン(ラマ教の仏塔)が見えだした。まさしく、異界への入口にふさわしい。もうひと息で峠というところで、こらえきれずにまた仰向けになってひとやすみした。いつしか眠りに落ちていた。5分間ほどだっただろうか、夢もない空白のひとときだった。こんなことははじめてだ。

先着のふたりに迎えられ、教えられてはじめて視認できたヒムルンは、手前にでしゃばったカングルー峰やギャジカンのかたわらにいじけたようにたっていた。「益田さん、すぐ下りないでしばらく高度に身体を慣らしたほうがいいよ」なぜか眠い。たぶん酸素の欠乏だろう。峠のむこうがわから登ってきたがさつなヤクの群に、荷物を蹴散らかされそうになって騒いでいる隊員の声をとおくに聞きながら、こんどは30分の長い眠りにおちていた。

<生と死の世界の往還>

山が好きで登り始めた。昔は近郊の山が僕にとって異界だった。その後あちこちの山へはいった。それは、だんだん人間世界から遠ざかり、自然の懐ふかくはいつてゆくことだった。異界とは何か。人間世界が生の世界ならば異界とは死の世界である。だんだんそう思うようになった。昔は死んだら魂は山へゆくと考えられていた。人生いたる処青山ありだ。偉大な宗教者は、洋の東西をとわず人里から遠くはなれた山奥にはいり、滝に打たれては靈力を養い、直感力をとぎすまし、信ずる絶対者と交感した。そこは、清浄無垢の世界であり、まして人間の痕跡などあってはならない世界でなければならなかった。人間には何やら死の世界を垣間みたいという衝動があるのかも知れない。

汗とカレーとタルカリのないまぜになったようなにおい、毒々しい緑と原色の花そして今日もたれながされる夥しい雲古のやま、これらは生の世界の象徴だ。死と静寂の世界は、万年雪と氷河によって象徴される。ヒマラヤでは両者はくっきり雪線で分かれつつ、ふたつながら高い蒼空のもとに共存している。そして登山隊のキャラバンは生の世界から死の世界

への往還だ。

峠を越えた徑はいったん3500mまで下り、ナル・コーラに沿って今度はまっしぐらに北を目指してのびている。初めて目にするその回廊沿いのすさまじい景観に酔いしれながらまだ見ぬ異界に近づいていった。

<函館の女>

天に飛鳥なく、地に走獣なし。ヒマラヤ7000mの巨峰に囲まれ、北大ヒムルン遠征隊第2次アタック登頂を記念して、時は1900と92年10月6日、午後2時25分、世界で初めて5500mという最高所から、浪速の艶歌師益田稔が歌います…「函館の女」。立会人、花井君自演の朗朗たる口上をさきほどから廻したテープがすいとってゆく。ころあいをみて、もうひとつのテープをONする。聞き慣れたイントロが小気味よいテンポで流れ出す。

空はあくまでも高く蒼い。何とも嬉しくなってくる。氷河を覆う一面のゆきは天然の無反響ルーム。従ってエコーはないからごまかしはきかない。のぞむところだ。まさに100万ドル、いや100万円のカラオケに相違ない。豪勢なものだ。

これをせめて6000mでやろうと昨日はC2を目指したが、あいにくの悪天にくわえて頼みの若手のラッセルも高山病で力がでず、もう一息というところで引返してきた。いささか残念ではあるが、四捨五入して6000mにも達したことだし、ヒマラヤの女神に500mばかり値切られたとおもってこのへんで手を打とう。ひとりでこっそりやったりハーサルの時とちがって、そばに聞き手がひとりいるだけで今日はまずまず声ものびる。対面のギャジカン峰からのこだまを期待したがあるわけはなかった。2番からは、替え歌だ。

| | |
|---------------|----------------|
| はるばるきたぜBCへ | ヒムルン山の頂で |
| 難所の峠をのりこえて | 希望の雲が湧いている |
| あとはどうなとなるだろうと | そんな気がして来てみたが |
| 後髪ひく妻子をおいて | ベースキャンプのテントの中で |
| 思い出すさえせつなくて | 登高意欲もきえはてて |
| とても顔向けできなかつたよ | 山の冷気がこころに沁みる |

下痢の歌もつくったが、これはやめておこう。思い残すことはない、あとは下るばかりだ。みんなに食べてもらおうと、種をまいて育てていた貝割れ菜もそろそろ食べごろになっているだろうか。

<エピローグ>

登頂はあっけなく終り、そそくさと撤収してBCをあとにした。いちどは覗いてみたかった雪と氷の支配する死の世界にももう未練はなかった。さあ、これからは一歩いっぽが生の世界への御帰還だ、と思うまもなく僕の体調は崩れていった。風邪の症状からはじまり微熱が続いたが、例の峠を越したところから食欲が皆無になり嘔吐がはじまった。あとでわかったことだが、急性肝炎をおこしていたのである。キャラバンの最後の3日間は、隊のはからいで馬上の人となる。これはラクチンと思いきや、初日は鞍にしがみついているだけで精一杯だった。街道引回しのようにめだちすぎることも照れ臭い。生への帰還も楽じゃない、オ

ム・マニ・ベメ・フム。

日本からみれば、カン・ラの南のヒンズー圏も異界であろう。51歳にして再々訪したネパールは何故か何もかもがちぐはぐに見え、27年前に青春の3ヵ月を過ぎた時のみずみずしい感情は一体どこへ行ってしまったのか、と我ながらはぐらかされたような思いの連続だった。昔の夢を追い求めにいったわけではない。確かにネパールは変っていた。4年前に一瞥した時からも変っている。みかけの変化はあって当然だ。しかし、みかけが大きく変っただけにかえてアラが目についたように思われたのは旅行者の皮相な印象だろうか。えくぼとみえたのは結局あばただったのか。本物の異界の南であばたしか見えなかった僕は大変やるせなかった。やはり異界は山にかぎる。

帰りついたカトマンドゥでネパール人の知人の生活の話をききながら、変りようのないネパールヒンズー社会のやりきれなさをおもっていた。確かにネパールもかわった。しかし、もっと大きく変わってしまっていたのは私の方だったと思い知らされた旅であった(典型的な結末)。そして、そぞろ神にけしかけられた悪あがきという動機の故に、2ヵ月の私の休暇が実質的に4ヵ月になるというやや悲劇的な結末をもたらした旅でもあった(もうひとりのヒムルン)。

思い出すままのネパール

河合 範 雄

〈出発前〉

1984年のインド、スダルシャン・バルバート峰から8年、また遠征に行ってしまった。1978年のパキスタン、ドレフェ・カル、1984年のインド、スダルシャン・バルバートと、6000m峰の遠征で味をしめた小生は、「そのうち7000m峰を」と夢を抱いていた。スダルシャン以来、山の会でも特に大きな遠征の話も無かったが、8年ぶりの遠征と小生の仕事の変節点が一致したのは幸いであった。これも日頃の精進の良さなのであろうか。

道立江差病院で勤務していたある日の昼下がり、突然プーさんから「おまえ、また医者で遠征に行かないか」という電話があった。二つ返事で「行けたら行きたい(実にいい加減な返答だな)」と返事をしたが、あとは札幌で何が行なわれているのかわからず、ときどき連絡をもらい、なんとなく進行しているのだなといった塩梅である。1991年の10月に札幌に戻り、いよいよ自分としての活動を開始した。まず、いかに休暇をとるかといった最大の難問であるが、これはあっけなく片がついた。というのは、プーさんからの教授への根回しがかなり早くから行なわれていたようで、円満に(と思っているのだが)教授の了解をいただくことができた。小生の講座の形浦教授は、知人こそ少ないが学生時代一人で大雪を歩き回っていたそうである。それで、前回のスダルシャンの時もそうなのだが、非常に登山に理解を

示して下さるので、そういう意味でもいい医局に入ったな～といまさらながらに思うのである。更に現職場（苫小牧耳鼻咽喉科クリニック なかなか流行っておりますよ）の院長から「開業の仕事を手つだわないか」という話が持ち上がり、「これはいい機会だ」とばかりに遠征参加を本格的に決心したのであった。

小生の日本での仕事は、くすり集めである。本来の貧乏根性のためか、集めた薬は全部持って行きたくなる。前回のことを考え、「こんなにいるかな」と思った分も「めんどくさい、余ったら現地においてくればいいのだ」と考えて（というより、考えるのをやめて、かな）詰め込んだ総重量が約60kgであった。何年か医者をやっていると、あれが起きた場合、これが起きた場合と色々悪く想像を巡らし気管切開まで想定してしまい、なんとなく装備が増えてしまうものである。結果的に「完売」した薬も出たし、あればあったで、なんとなく心強いものである。まあ沢山持って行くのも「お守り」みたいなものなのでしょうね。また今回も、スタルシャンのときと同様、札幌大耳鼻科の看護婦さんに、滅菌などで大変お世話になりました。（レントゲンの大袋を持ってうろつく私に、協力してくれた皆様に心よりお礼申し上げます。）

〈カトマンドゥ回想〉

6年ぶりのカトマンドゥ行は、出発前の墜落事故があったので、2度続けて落ちることはあるまい大丈夫だろうとは思いつつ、やはり不安であった。実際ベースキャンプに居るときにPIAがまた落ちたので、1度あることは2度あると考えた方が理にかなっているようだ。空港は、国際空港らしく立派になっていた。なんといってもびっくりしたのは、車の数と排気ガスである。しかし便利を追い求めるのは当然のことなのだし、かつての先進国といわれた国のあとを辿るのは当然のことなのであろう。また、登山用具店の多いこと、これならこちらで殆どが揃う。カトマンドゥはかつてのカトマンドゥにあらず。

〈キャラバンと登山活動のこと〉

時期がポストモンスーンにかかっていたので、午後の雨には泣かされた。往路で思い出すのは、歩き出すとすぐ体中から汗が吹き出すような暑さ。これもタール辺りから幾分涼しくなった。また、カン・ラ越えが今回の僕の行く末を決めたようだ。峠に近づくとつれ増大する脱力感は、まさに高山病のそれであった。峠でのパルスオキシメーターの値が68%となれば頭痛がしないだけ幸いであった。ここで、初めて肉眼でヒムルンを見た。ここからナルへの道は下り一方なのだがなんと長いこと、足を機械的に前に出し惰性で歩くのみ。翌日は停滞となったが、さらに頭痛と関節痛が加わり最悪となった。改善する訳がないので、夕方1時間ほど下にあるカルカに下山すると症状は嘘のように軽減した。ここでは朝のうちに下るべきだったのかも知れない。その後はBCまで、悪くはないが完全に本格的に復調する事のないキャラバンだった。プーガウンからエンドモレーンに登って行くときに、再びヒムルンを望むことができた。帰路ここでは雨で、また峠では雲のために見ることができず、僕にとってヒムルンを直接に見る最後の機会であったことになる。BCは、期待に反して長く滞在するにはあまり良いところではなかった。水は砂を含んだ氷河の雪解け水で、澄むのは早朝の

みであり天場も傾斜地であった。ただ、毎日入れ替わりのように放牧中のヤク、山羊、羊、馬がやってきた。おまけに、牧羊犬までやって来て、夜中に吠え走り回り、ただでさえ眠りの浅い僕の神経を逆なでするのであった。しかし大きな犬だったので何もできず、夜中にトイレに立つときも、犬の様子を伺いながらの有様であった。だが、夕焼けの中で草を食む動物たちのことは一つの絵のように思い浮かべることができる。

BCからC1に何回か往復し1度宿泊したが、どうしても今回のテンポに付いて行くことができず、10月4日C1下降後更なる高みへの登行を諦めざるをえなかった。2週間のキャラバンと5300mの峠は、不摂生の僕にいやおうなく現実を見せつけてくれたのだった。また愚痴になるが、今回は国内ではトレーニングも十分にできず山にも行けなかったの、とにかくBCまで行ければという甘えがあったような気がする。これで登れたら不思議である。かえって登れなくて幸いだったのかもしれない。僕は登れなかったがメンバーが登った、これで結果は充分である。

〈キャラバン帰路〉

登りであれだけ倦怠感を感じながら来たところも、2日を1日で下ってしまう早さであった。カン・ラ越えもなんと言ふことなく、往路のことが嘘のようであった。あれだけ汗を流した路も、秋の気配を漂わせ始めていた。また、欧州人のトレッカーの多いこと、ポーターにテーブル、イスまで背負わせているのには恐れ入った。さすがに、何百年もアジアを植民地としてきた民族は違う。日本人にはちょっと真似できないだろうな。

往路と復路は同じでも、ちょっと違う。道に流れていたモンスーンの雨は無くなり、「あれ」と思うところにトレッカー目当ての露店が出来ていたりする。さすがにトレッキングのメインコースである。また、りんごやスタラの収穫期で、道ばたで子供が売っている。ついつい買ってしまい、ザックのポケットがいっぱいになる。しかし、帰りのトラックでの尻の痛さはなんら変わらなかった。

〈再びカトマンドゥ回想〉

帰ってきたカトマンドゥは、あきれほど白人で溢れ、それが滞在していた10日ほどで、また一段と増えていった。さすがにこの時期に日本人はあまりいない。僕も時間が有り余っていたので（何という贅沢！）バドガオンやパタン（5回も行った）の観光やカトマンドゥのパザールを飽きるほどぶらついた。あまり外を歩き回ったせいか、排気ガスで喉をやられ咳のし通し。これは帰国してもなかなか治らなかった。帰国が近づくにつれて、気になるのが土産。もらった餞別にはやはりお返しをせにゃならない。足りないよりは、多い方が安心とばかりに、毎日パザールに買物に出かけた。

〈帰りの飛行機で〉

「これが最後かな」といった出発前の感傷とは逆に、「また来よう」と再び性懲りもなく誓った私でありました。

初めてのヒマラヤ

齋藤清克

〈ヒマラヤへ〉

大学に入るとすぐに山岳部に入部した。その山登りの目標として常にヒマラヤを見据えていたわけではない。初めはまだ知らぬ北海道の亜寒帯の地を縦横無尽に駆け巡って見たかった。当時、ヒマラヤを熱く語り、遠征を企てる上級の先輩達もいたが、それはそっちのけで自分の山登りに熱中した。それには日高山脈が絶好のフィールドになった。氷河の爪跡を残す長大ながら単調な山々の連なりと、原始的な山行形態で行なう長期間にわたる山旅は冬でも夏でも一番の魅力であった。以来5年間の活動の結果として、自分のトレースはその主稜線はもとより主な直登沢にしるされることとなった。そしてさらに地球上の大きな山脈であるヒマラヤへと、自然に憧れは大きくなっていった。本遠征の機会はそのような時に得たのである。

ヒマラヤ！それはいわずと知れた地球上の最大突起であり、数億の歳月をへたインド亜大陸とアジア大陸の巨大衝突の現場である。太古の氷雪をいただいた高峰で溢れ、人間の能力の限界を要求する苛酷な自然がある。初めて足を踏み入れたヒマラヤではその桁外れのスケールの大きさに、ただ圧倒された感がある。又、長いキャラヴァンの先々における異民族、異文化との接触は大きな刺激を自分にもたらした。中でも個人的体験として強烈なものは、初めて経験する高度という山登りのファクターとそれによる障害であった。僕の今回の登攀活動は高度障害に悩まされ続けた印象が強く残っている。

〈キャラバン〉

モンスーンの明けのカトマンドゥは、暑さと共に人々の生活臭と車の排ガスの混った臭いが漂い、居心地が悪かった。そんな中、都合で遅れてくる小泉を一人で待って、本隊と4日遅れのキャラバンを開始した。随行するシェルパの1人はマイルランナー役のガルサムという名前で、僕と同年の地元トリブバン大学生でどうやら夏休みのバイト気分で参加しているらしいが、なにかと話が合った。彼は身なりが清潔できれいな格好をしており、近眼で道をよく間違えるなど、およそシェルパらしくない振る舞いをした。一方、10年前の擦り切れたナイロンヤッケとジャージに身をまとい、半分崩壊した靴から足指を出し、顔も洗わない僕は、彼と並ぶとどちらが日本人か怪しまれたのであった。彼はふざけて、僕がこの地に住むグルン族の出で、ここにはるる留学先の日本から嫁さがしに来ている、などと言うので、僕はダルバートルという、地元の人に授けてもらった名前を名乗ってずっと歩いた。

キャラバン後半、富士山の高さを越えたンガワールの部落で高度の影響が出始めた。この時は全身にだるさ、軽い頭痛と眠気を感じ、夜になると38度の発熱を伴った。が、一晚寝る

と翌日はすっかり回復し、足取り軽くキャラバンの難所、カン・ラ(峠) (5300m)を越えた。ここから一般のトレッキングルートを外れて、自分達の隊以外は外国人トレッカーも見られなくなる。行き交うのは籠を背にした地元の行商にたずさわる婦女と馬に乗ったなにやらいかがわしいラマ僧ぐらいである。カン・ラから、初めて目的のヒムルン峰を望見する。背後の巨大な質量をもつアンナプルナの山塊、眼下の氷河湖とモレーンの広がる谷を前に、自分がヒマラヤに来ていることをようやく現実のものとして感じる事が出来た。自分は一向に平気だったが、かたわらでガルサムは痛い痛いと言いつつ頭を抱え込んでいた。峠を越えた村、ナルで本隊と合流した。しかしその翌翌日、プーガウンを目前にして頭痛と全身の倦怠感を感じ、食欲がなくなり、夜になると40度もの高熱を發した。たんなる風邪か、高所熱というものか？ナルコーラの流れる谷の砂地に松の生えた気持ちのいい場所で、しばし静養することとなった。対岸には砂泥質変成岩中に様々な規模で進入する花崗岩質岩の超大規模な露頭が広がっている。上から下までサンプリングでもしたら面白かろうと熱でボーとした頭の中で考えていた。高所の影響やその疲れは慣れない若い者ほど敏感にでるらしいが、その通りか、僕と石橋と付き添いの山口ドクターはBC入りが遅れた。

〈第2次アタック、高山病〉

ルート工作にまじった僕は、C2予定地を越えたプラトーの上で普段と違った、これまでにない息苦しさ、疲労感を感じ始め戸惑った。C2建設の為の荷物を雪の上を下ろすと途端にグッタリときて次の行動を起こすまでかなりの時間を要した。一步一步の足取りが実に重く感じる。高度は6000mを越えている。今から考えればすぐに引き返せば良かったものの、こりゃ高山病だ、などと思いつつそのまま先行する清水のトレースを無心に追っていた。案の定、引き返しの時点では、気分が悪く、ややおぼつかない僕の足元に不安を感じた清水はザックをかついでくれ、登りに難無く通過した箇所も空身で確保してもらっての下降となった。薄暗闇の中、休み休み氷河の末端を辿り、BCに到着した頃には星空が出ていた。シェルパのニマとプリが心配気に迎えに来てくれた。もし一人ならどのような事態になっていたのだろうか。これには自分が情けなくなった。高所では一瞬の判断の迷いがとりかえしのつかぬ結果を招くことを痛感せずにはいられなかった。

10月4日、僕は清水、樋口とダヌーシェルパと共に第2次アタック隊としてC3に向かった。それまでに一度6000m台での障害を経験した僕は、BCで休養の後、体調も充分回復し、今度は大丈夫だろうと威勢よく出発したのだった。C3まで順調にすすんだ。途中で初登頂に成功した小泉、ニマシェルパ、花井と順に祝いの言葉を交わす。前回引き返したC2すぐ上のプラトーを越えれば石狩岳の頂稜のようなリッジが続いており、そこからせりあがるヒムルン峰の雪の頂上は手にとるように間近に見えた。乾いた冷たい風がチベット高原を吹き抜け、まともに当たる。しかし、氷河上の登高での熱くジリジリと顔を焼く日射と比べれば実に心地よく感じるのだった。体を傾けつつC3に到着し、ここに翌日の登頂は確実に思えた。しかし悪夢か、その晩に強烈な吐気と下痢がつづき一睡もできず消耗して夜が明けてしまった。翌日は朝から天気は悪かったがこれ以上登ることは断念し、この場にいることにも

不安を感じた僕は、一刻も早く下に降りることが最良と思われた。視界は悪かったがテントを飛び出し、単独で下山を開始した。ゴオオと耳鳴りが襲い、雪つぶてが顔面にぶち当たり立ちすくむ。高速のガスの切れ間にちらつくチベット側の尖峰やリッジ越しに見るはるか下方の氷河、まるで別世界にいるような恐怖におそわれる。デポ旗を時々見うしないながらもなんとかプラトローを横断したが、そのラッセルは力の入らない体にきつくこたえた。そしてようやくC2に転がり込むとすぐに眠りこんでしまった。その頃BCでは斎藤行方不明！に大騒ぎであった。僕以外の隊員はC3でそのまま停滞、BCと交信をとり翌日無事登頂したのだった。

〈その後〉

10月7日、第3次アタック敗退後、全ての登攀活動は終わり、その後は毎晩のようにシェルパや現地民との歌と踊りと酒に明け暮れた。帰途はナルで間抜けな強盗達と一騒動あったが、その後僕は本隊と別行動で、アンナプルナの麓を一周してカリガンダキに出て、ポカラに帰着した。途中、ハンマーもふるって多くの岩石を採集した。そして11月、初めてのヒマラヤ遠征は終わり、帰国の途につく。僕にとっては様々な教訓が残された。まだこれからである。新たな目的でもう一度再びヒマラヤに足を踏み入れるだろう。

遠征のあと

石橋 英二

〈ポカラで〉

ここはポカラ、ヒマラヤを間近に望む小さな町。今僕は40度近い熱にうなされている一人ではないのが心強い。樋口夫妻の友人、佐々さんが看病してくれているからだ。

日本を離れて3ヵ月あまり。遠征を終え、これからインド、パキスタンへと一人旅に向かう矢先のこと、現地産の強力なウイルスが侵入したのだろうか。インド製の強力な解熱剤で強引に熱を下げ、どうやら症状も落ち着いた頃、佐々さんは帰国のためカトマンズに戻っていった。有難う、そして一人になった。

風邪はまだ治り切っていない、まだ微熱が続いている。朝、目を覚まし窓の外に目をやると、いつものようにアンナプルナ、マチャプチャレが輝いている。ひと月程前にはあの山を裏側から見ていたんだなあ、カン・ラ越えは今と同じように苦勞していたんだなあ、今頃峠は雪で越えられないのかなあ……、ポーッとした頭でとりとめもなく遠征のことを思い出したりする毎日。時間の流れがだんだんとゆっくりになっていくようだ。早くインドにいきたい気持ちと行きたがらない身体と。「別にあせることはないな、時間はたっぷりあるんだから。風邪もそのうち治るだろう」独り言が多くなってくる。

〈国境でのトラブル〉

ゆっくりと流れていた時間も過ぎてみれば早いもの。12月になった。「そろそろ行こうかな」そうやって重い腰をあげ、インド、ネパール国境の町スノウリへ向かうバスに乗ったのは12月6日。前日予約しておいたツーリストバスは手違いで宿の前を素通りして行ってしまった。結局ローカルバスで行くことになった。「最初からこんなことでは先が思いやられるな」こっちの不安な気持ちとはおかまいなしにバスは出発した。村があればバスは止まり、人が手をあげればバスは止まる。バス停などというものはない。乗る人がいればそこがバス停になる。野菜をつめこんだ麻袋を重そうにかついでくる老人、本を抱えた学生、子供をかかえサリーをまとった女の、スーツケースを持った身なりのよい男、色々な人が乗ったり下りたり、いったいいつになったらスノウリに着くのか。

翌朝レストランでお茶を飲みながら国境が開くのを待つ。2時間待っても、3時間待っても国境が開かない。そのうちインドでなにか事件が起きたらしいという情報が伝わってきた。今日はもう国境は開かない、バスはすべて止まっている、歩いていたら暴徒に襲われる、等々あつという間にさまざまな情報が広まった。まわりにいるインド人ともネパール人ともわからない奴らの話は信用できないのでイミグレーションの役人に確かめにいくと、「国境は通れるが交通機関はストップしている。ここから10km離れたノウタンワという町まで行けば汽車がある。しかしそこまで歩いていくのは危険だ、リクシャーも走っていない」と言う。「どうしたらいいんだ」こっちは初めて陸路で国境を越えるというのに……。あれこれと悩んだあげく、「なんとかなるだろう」と、同じ宿に泊まっていた日本人3人と一緒に国境を越え、ノウタンワまで歩いていくことにした。

いざインドに入ってみるとイミグレーションの役人は何も言わないし、リクシャワラーもノウタンワまで20ルピーなどと声をかけてくる。インド人は何が起こったんだという顔をしているし、道沿いには水田がひろがり水牛が水あびしている。まったく平和そのものだ。そうしてそのまま無事にノウタンワで汽車に乗ることができた。

〈事件は本当だった〉

まだ夜もあけない早朝5時にヴァラナシに着いた。固い木のシートに寝ていたので身体のあちこちが痛い。明るくなるまで駅で待つことにしたが、いるいる、そこらじゅうに人が寝ている。汽車を待つ人なのか、駅をネグラにしている人なのか。寝ている人をよけつつ跨ぎつつ、荷物を降ろしてほつとすると今度は角をはやした大きな牛がのっそりと入ってきて驚く。インドに来たなど改めて実感する。明るくなってきてから国境から一緒の日本人とオートリクシャーでダサシュワメート・ガートに行こうとするが、どの運転手もあっちの方は外出禁止令が出ていて行けないし危険だと言う。ここはインド有数の観光地で平常時でも何だかんだと言って旅行者をだます奴が多いらしい。ここはまず正確な情報を入手しなければと、駅前のホテルに落ち着いて新聞を広げた。やはり事件は本当だった。アヨドーヤと言う町でヒンドゥー教徒がイスラム教徒のモスクを破壊し、200人あまりが死亡、この事件が引き金となってヒンドゥー・ムスリム間の暴動がウッター・プラデシュ州、さらには北インド各地

で起きているという。アヨドーヤはヴァラナシの北西にあり比較的近く、おまけにヴァラナシのガート周辺にはムスリムの居住区があるという。よくよく今回の旅はついていないのか？

リクシャーがダメなら歩いていこうと、夕方ホテルを出たが、5分と歩かないうちに人通りがなくなり、商店も全て閉まっている。街角には警棒を持った警官が数人警戒にあたっていて、ぼく達は呼び止められた。結局また駅前に戻るはめになったが、皆、なんとしてもガートに行きたい。駅前に泊まってもおもしろくないからだ。再びリクシャーの運ちゃんと交渉していると、危険な地区を迂回し別のガートに出、そこから船で行けば安全だという。それは妙案。しかし夜のガンガーはちょっと恐ろしいような気がするが、でも一人じゃないし……。走り始めたリクシャーから見る町の様子はいつもと変わらないようだ。店は開いていて、人通りも多い。同じ町なのにこうも違うと本当になにかあったのかと疑いたくなる。彼らの顔にはいささかも不安な表情が見られないのだから。

〈夜の船旅〉

大回りして着いたガートはアッシー・ガートという所。リクシャーの運ちゃんはすぐそばのホテルに泊まれとすすめるが、絶対ダサシュワメート・ガートまで行くと僕達が主張すると船の手配をしてくれた。ガンガーとの初対面は闇夜の舟の上。いい雰囲気だ。岸に沿って舟は進む。岸辺まで石造りの建物が迫り、ぼく達の進む遙か彼方まで隙間なくびっしり連なっているようだ。闇夜にヒンドゥー寺院の特徴あるシルエットが浮かび上がる。とても静かだ。川風が気持ちいい。途中いくつもあるガートのひとつで白い煙の下でちろちろと火が燃えているのが見えた。聞くと火葬の火だという。神妙な気持ちになる。ガンガーは聖なる大河、ヴァラナシはヒンドゥー教の一大聖地。インド各地から多くの巡礼者が集まってくるという。今見えている建物の多くはそうした巡礼者のための宿坊で、ただ死を待つだけの年老いた人々が生活しているという。彼らにとってガンガーの岸辺で死をむかえ、自らの遺灰がガンガーに流されることが最大の喜びだそうだ。思わず、「宗教っていったい何なんだ」と考えてしまう。10分ほどの短い船旅だったが得がたい体験だった。

〈ヴァラナシの町は静かだった〉

翌朝の目覚めはあまりいい気分ではなかった。僕の泊まった宿は暴動のため身動きのとれなくなった旅行者でいっぱいベッドがなく、固い床のうえに寝たからだ。またここは日本人旅行者の溜り場で、宿泊者のほとんどが日本人だ。おかげで外に出ても何もすることがない退屈を読書で紛らわせることができたが…。この宿には4泊することになったが、この間、すぐ近くで爆弾が見つかった、今日はあの町で人が殺されたとか、そういう物騒な話ばかり伝わってくる。カルカッタから来た旅行者は泊まっていたホテルの前で爆弾が爆発したというし、カルカッタの空港は国際線までも閉鎖されたという。日中外に出てみても街角には銃を持った警官が立ち、軍隊まで出動してジープの上で機関銃を構えて走り回っている。厳重な警戒体制が敷かれている。人通りは全くなく、商店、食堂すべて終日戸を閉ざしている。それでも2階の窓からときたま声の子供たちがかけたりしたが。しんと静まりかえったインドの町は不気味だ。

〈旅は続く〉

物騒なヴァラナシの町を出た僕はカジュラホに向かった。この町は暴動などいったいどこであったのかというほど平和で静かだった。ヒンドゥー寺院のアプサラ像の美しさに心がなごんだ。ここから僕はアグラ、デリー、アムリトサルを経てパキスタンへと国境を越えた。

カラコルムを見るために訪れたフンザの村は雪に包まれ、山々は低く垂れこめた雲のためにその姿を見せてくれなかった。旅の1つの目的を果たした僕はその後気の向くままパキスタンを南北に縦断し、再びインドに戻った。そのまま一路インド最南端のカニャークマリ目指して南下し、さて戻るかとカトマンズまで。インドをぐるっと一周してしまった。その間にも多くの町を訪れ、様々な人々に出会った。全てをここに書くのは無理な話。きっと日本で誰かれかまわずこの旅のことを話してしまうのだろう。

日本を出て7ヵ月、旅の終わりの町カドマンドゥでは無性にこのまま旅を続けていたいという気持ちがこみあげてきて仕方なかった。自分にこんな一人旅が合っていたというのも新しい発見だった。日本に帰ったら、さて次はどここの山、どこの国とついつい考えてしまいそんな気がする。実はもう既に頭のなかに次の旅が出来上がっているのかもしれない。

マルシャンディーカリガンダキ紀行

名 越 昭 男

今回のヒムルンヒマール登山では、別動隊と称するトレッキングを目的とした隊が、本隊にくっついて出ることになった。別動隊のメンバーは、ジミー（木崎）、イオン（佐藤）の両御老体と小生（名越）の3名、正真の中老年パーティーである。御老体にとってはヒマラヤン センチメンタル ジャーニーで、小生にとってもダウラギリ以来10年ぶりのネパールの山旅とあって、思い入れ気分も高まるのであった。とくに、アプルーチルートにあたるナル、プー地域への興味は存分にかきたてられるものがあつた。外国人登山隊・旅行者のこの方面への入域は、おそらく1950年のH.W.ティルマン（英・探検的登山家・1898～1977?・ヨットEn Avant号に乗り南米リオ～フォークランド間で消息不明）以来ではなかろうか。

別動隊はヒムルンヒマールBCまで本隊と同行し、以降本隊と別れてマルシャンディーを廻り、カリガンダキを降るというアンナプルナー一周のトレッキングを行った。バラサーブ（丹羽）から小生、御老体の“おとも側役”をおおせつかっていたのだが、5000mを超える峠を三たび難なく越え、“役”が杞憂におわつたことをよろこび、ポカラで下山の祝杯をあげたのである。

以下に、BC以降の別動隊のトレック紀行を、小生のメモ帳をもとにまとめてみた。末尾にルート概念図とトレッキング期間の気象表・図を参考までに付しておく。

9月26～28日 BC滞在

9月12日カトマンドゥを出て25日BCに入る。2週間。高度順化、文化順応にちょうどいい時間かもしれない。御老体、BC到着にまずは満足の様子。26日、登山の安全祈願をプーのラマ僧とり行う。文献によると、ナル、プーの坊主は格式が高いらしい。午後、スノーアソカーの細引きのとりつけなど手伝う。27日、ジミー、イオン デポサイトまで、小生C1まで断熱マット3枚“荷揚げ”に行く。C1から、遠くにアンナプルナI峰の北面を見る。人類初の8000m登頂峰だ。単純に感動を覚える。28日、トレッキングの準備などする。ボンズ（花井）、呆夫（小泉）の偵察によると、C2から先頂上までの稜線は、ひたすらラッセルを強いられそうとのこと。技術的にはノープロブレムのような。

9月29日 BC～キャンカルカ。

登頂の成功を祈り、カリガンダキ方面へのトレッキングに出る。我々3名にスタッフ3、ポーター6名の大世帯の旅になる。テント行ゆえ、いきおい荷が増える。スタッフは、リーダー ダン・バハドゥール(36)、コック カーマル(32)、キッチンボーイ マン・バハドゥール(28)で皆同郷のライ族だ。東ネパールのソロ・クンブ地方のジュビン村から来ている。ライは勇敢でグルカ兵にもずいぶん参加している、とダンは自慢げに語る。ポーターは、ポカラ近郊の人たちだ。

BCを出て2時間ほど降ると、ヒムルンヒマール、ネムジュン、ギャジカンからくる氷河の末端モレーンに達する。この中腹に氷河の融け水の湧き出し池がある。粘土含みの濁った水が、フットウ水のようにポコポコ湧き立っている。めずらしい光景だ。

やがてプー村にいたる。大麦の刈り取りをオバサンたちがのんびりやっている。おおくの男は出稼ぎに出ているのかもしれない。今日はキャン泊まり。ここは、家畜越冬用のカルカ（牧場）だ。空き家でたき火にあたりながら夕餉をとる。キャンと南どりのチャコカルカは、かつて対中国チベット人ゲリラ部隊の中心勢力といわれたカムパ族に不法占拠（1964～1975）され、大麦・小麦の耕作と牧畜がなされていたという。彼らはムスタンから来た一派で、農業技術にたけ、プーやナルの村人ではとても及びもつかない量の収穫をあげた（Nereswor J. Gurung 1977, AN ETHNOGRAPHIC NOTE ON NAR-PHU VALLEY, KAILASH Vol.3）。

9月30日 キャンカルカ～ナル。

朝食は紅茶とビスケット数枚ですまし、ランチですこし手のこんだものを食う。ジミーの提案で、今日からこのスタイルでいく。早立ちができスタッフの仕事が大巾に軽減できる。

キャンから1時間あまりでチャコカルカに入る。ここはナルの冬期の家畜置場である。わりと広い耕地がプーコーラの段丘上と東側に発達する山麓斜面上に開かれている。現在は耕作されていない。カムパ占領時は、全耕地が使われていたという。落穂から生育した大麦だろうか、けなげにも小さな穂をつけている。

対岸をみると、高さ300~400mの岩壁が延々と続いている。灰褐色の岩壁はチベット層群とよばれる数億年から数千万年前にかけてできた地層で、そこにカコウ岩の白いすじが毛細血管や太い動脈のように、地層の目に沿って水平にあるいはタテ割れ目に沿ってしみ込んでいる。そのダイナミックな文様は、人に豊かな想像力をあたえるものだ。まさに天然の大壁画である。以前、東ネパールのメラ山に行った時、ガイドのパスン（故クサンノルブ・タワ氏=1963 AACH ナラカンカール遠征隊のシェルパ=の弟）が、褶曲した白いすじを指し、竜が天に昇ったあとだ、と言ったのを思い出す。

ナルの畑では大麦の刈りとりが終り、アルー（じゃがいも）の収穫に忙しい。貴重な労働力となる子供の声が、あちこちから聞こえてくる。往きに泊まった平屋根のくすんだホテル（民宿という風情）に投宿。宿のおばさん50才だという。60代にみえる。ここの人に年をたずねると、だいたい5才きざみで答えてくれる。少しは精度をあげて言ってやろう、というのかもしれない。年など10才きざみでことたりる世界なのだ。

10月1日 ナル〜ンガワール。

再度のカン・ラ越え。峠でヒムルン連峰、マナスル山塊を見おさめる。ンガワールまで1600mの下降。ひざを痛めぬようビスタリ ビスタリ（ゆっくりゆっくり）歩く。ンガワールでは、さ来年に登はんを予定している山の偵察にきたという信州大OBに会う。OB氏、来年はカラコラムの山に行くのだという。山こそわが人生、をやっている人だ。それが何なんだ、なんてヤボなことは聞かまい。成功を祈るのみ。

10月2日 ンガワール〜マナン。

ンガワールより1時間、一部色づいたマツの疎林を行く。幹にククリ（ナタ、庖丁兼用の刃物）のそぎ跡をつけられた樹があちこちに見られる。ダンに聞くと、そいだチップは、タネ火用のたきつけや松明にするのだという。痛々しい。このままいけば全滅の恐れもある。かつて剣沢や酒沢のハイマツがそうであった。

マナンは広くゆったりひらけた段丘上にできた村。数人1チームで、大麦の脱穀作業をやっている。ムシロの上に刈りとった穂を積んで、これを回転する棒っこ（からざお）を背負い投げの要領でふりおろしてたたくのだ。労力や能率を考えると、せめて櫛形の脱穀機（せんば）でも使えば、と思うのだが…。

アンナブルナIII峰の氷河から流れ落ちる支流のマルシャンディとの出会い寸前に、氷河湖がある。できた年代は、地形の新鮮さからみて、かなり新しい（数百年前？）ようだ。濁った青灰色を呈す湖面は、太陽の動きに従ってその色を微妙に変えていく。すばらしい眺めだが、たいへん危険なシロモノである。水をせき止め、湖をつくりだすモレーンのダムは、ちょうどブルドーザーで土砂を押しあげただけのようなものであるからだ。脆いことこの上ない。増水や地震で崩れる恐れが十分考えられる。

10月3日 休養停滞。

午前10時から、吹き上げ風が強まってくる。テントがバタバタ音をたてる。典型的な山谷風の風系だ。

イオンとトレッカー相手のホテルや店を数軒見てまわる。イオンは品定めがお好きのようで、とくに宝石や骨董品に目をやっている。品目はトルコ石、赤サンゴ、しんちゅう製の仏像、仏具、銀製の装身具、ククリなどである。ヒトの大腿骨で作った笛もある。一番下のホテルでパンを焼いている。注文に応じてケーキも作るらしい。ヨーロッパ人のトレッカー数組が、トーストと紅茶の簡単な昼食をとっている。

晩、テント場の管理人のホテルで、当地のユキヒョウのビデオ（日本のあるテレビ局が制作したもの）を見せてもらう。電気がきているのだ。近所の子供たちが“ウジャウジャ”集まってくる。「ワシャ昔、グルカ兵で日本に言ったことあるよ」というおじさんも見にくる。なぜか大人の女はいなかったようだ。その昔、近所のテレビのあるお宅へ力道山を見せてもらいに行ったのを思い出す。プロレスもだが、四角い箱の画面に活動写真が映るのがおもしろかった。番組終了後の“砂あらし”さえ見ていたかった。子供たちの目が輝いている。

10月4日 マナン〜トロンペディ。

マナン上側の街区をぬけ、登り道をひたすらたどる。思い出したようにポツンとでてくるパッティ（茶屋）のかたわらで、チベタンらしい男が自作とみられる木製のトランクを開けて骨董品など並べて売っている。

ヤクカルカでチュルー西峰を登りに行くという日本人若者2人とネパール人ガイド1人のパーティーに追いつかれる。槍ヶ岳へでも行くような調子だ。彼ら、パッティのおやじから、以前日本人がユキヒョウに襲われたことがあったとおどかさされていたが、ひるむ気配なし。けっこう。けっこう。

ヤクカルカで昼食。ここへ来て一段と乾燥度ます。吹き上げ風がほこりを舞い上げる。マルシャンディ河もキャラバン開始のころの濁流の大河にくらべ、うんと小さくなった。徒渉できるほどだ。トロンペディの一軒あるホテルは、先着のトレッカーで満員。フランスの女子高生らしい10人くらいのグループが、スキーのストックを振りながら鼻唄まじりで上から降りてくる。高度順化に行ってきたのだろう。30m上のテント場で、建てかけの宿舎のなかに幕営。小雪ちらつき寒い。EPIガスのバーナーで暖をとる。明朝早いので食後の雑談も早々にきりあげ寝袋にもぐりこむ。

10月5日 トロンペディ〜ムクチナート

標高5400mのトロン峠越え。ダンによると、峠近くでは昼間猛烈な風が吹くとのことで、そのまえに峠越えをすべく、夜中にライトをつけて出立する。2時30分発、峠6時〜6時30分着。峠の気温-10℃、積雪1〜2cm。イオンは居眠りしながら登ってきたという。記念撮影する。御老体の感激ひとしお。ドルポ、ムスタン方面の重疊する山なみがピンクにそまっ

ている。

ムクチナートまで一気にくだる。ダーシャン記念公園の堂宇に祭られている聖火を見に寄る。神像を安置するだいざの下で青い炎がチロチロたっている。ガス臭が漂う。火のモトは、チベット層群の地層から湧き出る天然ガスだという（ジミー）。ムクチナートはヒンドゥー教の聖地で、折しもダサインの祭とあって人出多く、大いににぎわっている寺院の石畳で小さな火を作りご飯を炊いているグループ、熱心に礼拝する仙人然としたお年寄り、仙人の姿、顔を撮ろうとウロウロする白人女性、はたまたセンベイ布団にゴロンと横になり虚空を見上げる人、さまざまだ。この人口は700人。おそらくこの何倍もの人々が詣でに来るのだろう。

久し振りにニワトリを食う。道端や畑で残飯や虫をつついてはいるやつのうち、うまそうなのを選び、持ち主に売ってくれるようもちかける。いろいろケチをつけ、尻リクツをひねり出し、値切り交渉をするのがおもしろい。こんな時にコトバをおぼえる。

10月6日 ムクチナート～マルファ

カグベニ経由でカリガンダキ河に降りる。詣で帰りの人たちと追いつ抜かれつ歩く。たいへんな乾燥地帯で、地面には砂と石ころと丈の低い草しかない。カリガンダキの向こうにまっ白なダウラギリが見える。カグベニはムスタンへの入口で、街道を扼する要衝であった。砦らしい建物がのこっている。かつてカムパ兵が駐屯したという。ムスタンは純粹チベット人の小王国で、ゲリラ活動の基地になった所だ。村に隣接する谷中の平地で乾燥に強い樹木を試験植栽している。なんとか木を作ろうというのである。

カリガンダキの河原に出ると巡礼の人々がグループをなして下からやってくる。昼食後ジョムソンに入る。空港もある大きな街だ。イオン換金のため銀行に寄るが、昼休み時間でしばし待たされる。12時から2時まで行員はしっかり休む。チェックポストに寄る。陽気なポリスがいて、我々にパン2切れずつふるまい、坂本九の「幸せなら手をたたこう」を歌いだす。こちらもつられて口ずさむ。出ぎわに、紅で着色した米のティカ（ヒタイにつけるしるし）をつけてくれる。ダサインの祭の最中だ。にわかにはヒンドゥー教徒となる。マルファはこぎれいな街、石畳の街道が掃き清められている。シャウ（りんご）園が多く、いいのがたくさん実っている。

10月7日 マルファ～レテコーラ。

昨夜、マルファの美祿シャウ、アプリコットロキシーに酔う。ヤヤ過ぎる。寮歌を放吟したらしい。何も覚えていない。朝、御老体からやんわりたしなめられる。浅酌低唱路線にきりかえないといけない。

カリガンダキ街道の両側にニルギリ峰やツクチェピークを見上げながら行く。ツクチャの街は、ローマ字の看板がやたら目立つようになった（10年前は看板自体少なかった）。吹き上げ風が昼頃より吹く。10～15m/s。広いカリガンダキの河原に砂ぼこりが舞い上がる。長

大な河原は、本流のセキ止め湖が埋まってできたものだ。セキ止めは、カロパニ付近左岸の山地で発生した土石流によりひき起こされたという（ジミー）。すごい規模の山地崩壊が想像される。

レテコーラで水牛現れる。乳用に飼っているのだろう。

10月8日 レテコーラ～ダナ。

旅は道づれ、ムクチナート詣での帰りの人たちとパッティヤチャウタラ（石積みの台状の休み場）で、こもごも雑談などする。ある老夫婦は、インド国境近いプトワールから2週間かけて歩いてきたという。宗教の力は偉大だ。

コオプチェパニでポインセチアを見る。今日はダナ泊まり。ダナにはスタラ（みかん）果樹園があり、芳香があたりに漂う。12年前と8年前、ここでジミーは、ヒマラヤ山脈の動きを実証するべく測量調査で滞在したという。感慨深げに山を見上げている。当時からスタラの香りが漂っていたことだろう。

10月9日 ダナ～シーカ。

ダナより下るにつれ、暖地性の植物がづきづき現れる。真紅と黄のカンナ、ムクゲ、ブーゲンビリア、バナナ、オレンジ色の花をつけたツル性の低木等々。数日前の-10℃がウソみたいだ。

昼前タトパニに着く。温泉を意味するこの地名は、ネパール国内あちこちにあるが、タトパニの前になにがしかの固有名詞や形容詞がついていないのがふつうである。ブッキラボウな感じもする。このタトパニでは、カリガンダキの河原に直径5～6mの2つの浴槽が、石とコンクリートでしつらえてある。あつい。クセのない湯だ。巡礼のネパール人、インド人、白人トレッカーらと一緒に入る。入浴料3ルピー（9円）。たしか昔はタダだった。管理人に聞くと、掃除などメンテナンス料にするのだという。タトパニを出るとすぐカリガンダキを渡り、シーカ村への登りとなる。シーカは米、ヒエなどの棚田、畑が尾根の上まで開かれ、ネパールの典型的な山村風景をつくっている。ガンジャ（大麻）売りの少年が寄ってくる。トレッカーとみると声をかけるのだろう。ささやかなアルバイトなのだ。ガンジャは道端や空き地に他の草と一緒に自生している。村人にとってそれは、一日の労働の疲れを癒してくれる魔法の草なのだろう。

10月10日 シーカ～ティルケドゥンガ

シーカ付近は、大小の地すべりが多発している。一帯は、一定方向に滑りやすい性質をもった地質（泥質な片岩）からなり、抜本的な対策は打ちがたい。耕作地は少しずつ流亡していく。子供が窮状を訴えてドナーを求めに来る。些少をカンパする。

ゴラパニ峠が近付いてくる。ゴラパニは直訳すれば馬の水だ。峠で馬にたっぷり水を飲ませるのだろう。ここからのダウラギリの眺めはすばらしい。ただ、ラリグランス（赤しゃく

なげ・ネパール国花)の林が切られ、ホテルや店がやたら増えたのはいただけない。そのうち、カラオケボックスでも出てきそうな勢いだ。

ティルケドゥンガに着きパッティでチャマル(米)のチャンにありつく。旨い。いいのごしだ。正にドブコクの味。ムスタンから来たというマウンテンゴートのスクティ(干し肉)がまたいい。かむほどにウマ味がしみ出てくる。

10月11日 ティルケドゥンガ～ポカラ。

本日トレッキング最終日。ポカラからの車道がモディコーラ河畔のビレタンティまで来ている。道路建設が“遅々として進んで”いる。日本語ではふつう“……進まない”という。これは、いみじくも日本人のセッカチ性をよく表した物言いではあるまいか。ビレタンティからポカラまでオンボロトラックに乗る。距離30kmでなんと5時間かかる。ディーゼルエンジンの燃料パイプにエアが入るのか、時々路側に止まってエア抜きポンプを動かしている。止まるごと、どこからともなく果物売りの少年がやってくる。荷台の乗客がけっこう買っている。我々もスタラなどを買ってのどをうるおす。

ポカラに着きポーターに賃金を支払い、カトマンドゥまでの航空券を買う。タラガオンホテルに到着する。一月分のアカをシャワーで流し、トレッキングの無事終了を祝い、ビールで乾杯する。御老体、御満悦の様子。

10月12日 ポカラ～カトマンドゥ。

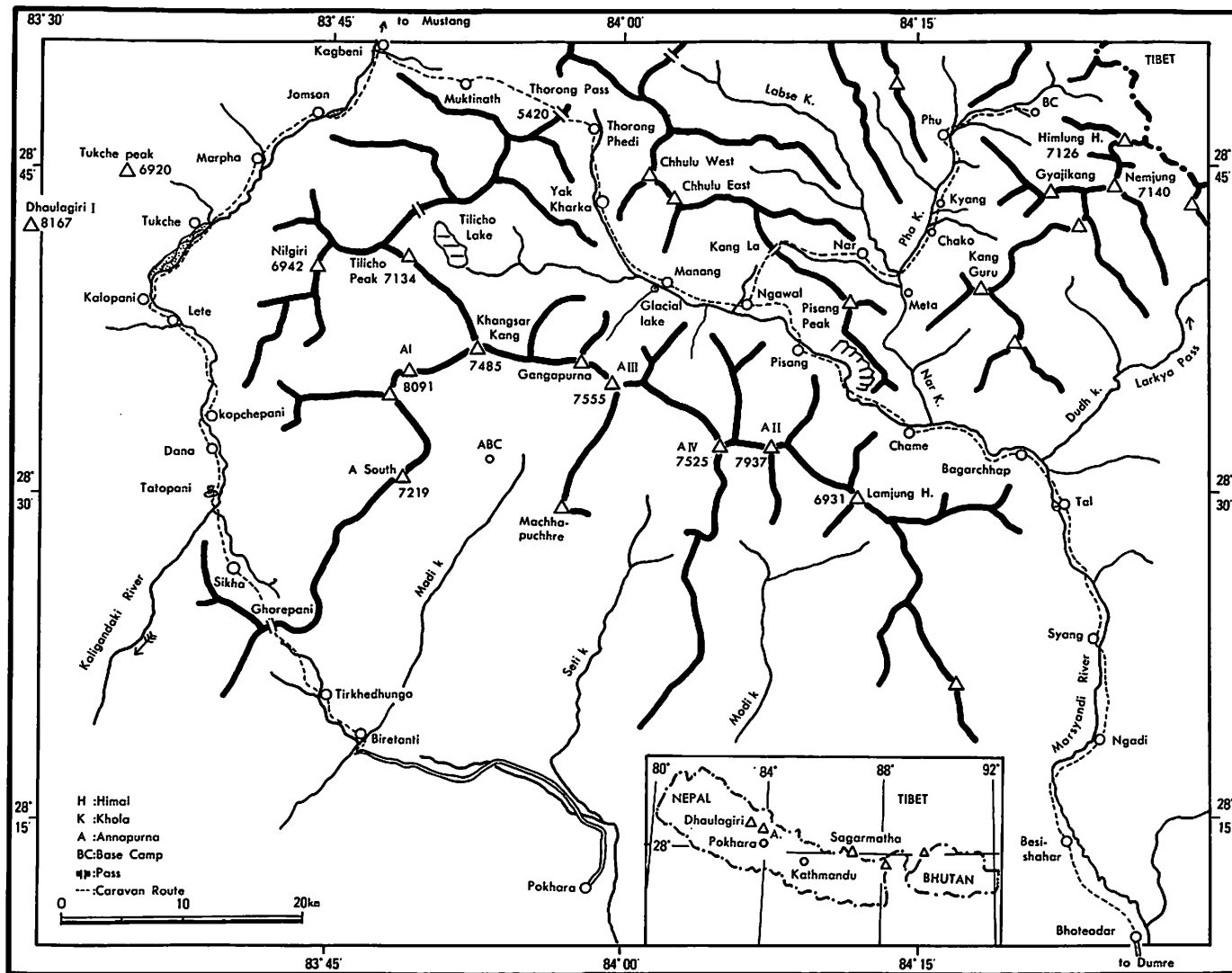
雨のなか、エイプロ機でカトマンドゥへ。晴れていれば見えるはずのアンナプルナ、マナスル、ガネッシュど全く見えず残念。荷物はスタッフ3人にまかせてバスで運んでもらう。

10月13日

J. P. ラマの事務所にグッドニュース入る。10月3、6日にヒムルンヒマール登頂成功! 夜、我々3人ニューロードのインド料理屋で祝杯をあげる。

10月15日

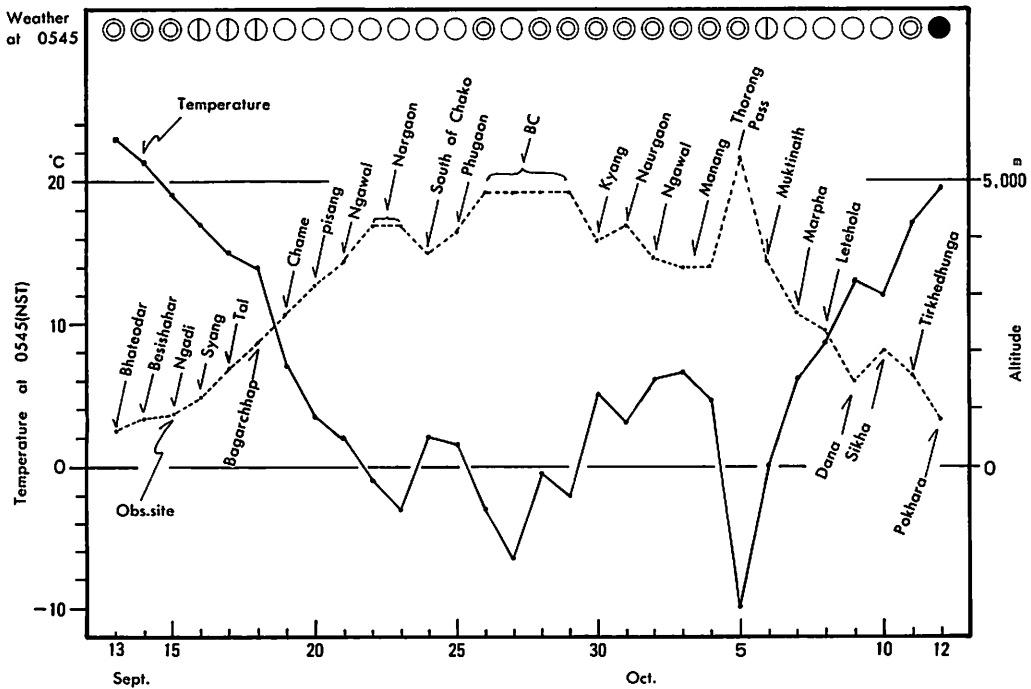
新聞(RISING NEPAL)に登頂成功の記事出る。夜、安チン(安藤・1963 AACHナラカソカール遠征隊長、仕事でネパールに滞在中)夫妻のお招きにより、我々一同改めてネパール料理屋で祝杯をあげる。「初」の字がつく登頂だから気分も一段といい。ネワールの極上のロキシーが旨い。人生はいい酒を飲むためにやるのだ。



表一 マルシャンディ〜ナルコーラ〜カリガンダキトレッキング中の気象観測結果
(ネパール標準時 05:45観測)

| 月日 | 場所 | 標高 m | 気温 °C | 天気 | 雲量/10 | 雲形* | 記事 |
|-----------------|-----------------|------|-------|-----|--------|----------------------|-------------------|
| Sept. | 13 BHOTEODAR | 670 | 23.0 | くもり | 10 | St | 谷沿い下降風あり 夜中降雨あり |
| | 14 BESISHAHAR | 820 | 21.5 | " | 10 | Ac, St | 夜中降雨あり |
| | 15 NGADI | 1070 | 19.0 | " | 9 | Ac, St | 雨天にSt多い |
| | 16 SYANG | 1140 | 17.0 | 晴 | 1 | Ac, Cu | |
| | 17 TAL | 1700 | 15.0 | " | 4 | Ac, As | 0400時 降雨あり、上中层雲停滞 |
| | 18 BAGARCHHAP | 2160 | 14.0 | " | 4 | Cu | 夜中降雨あり |
| | 19 CHAME | 2710 | 7.0 | 快晴 | 0 | — | |
| | 20 PISANG | 3200 | 3.5 | " | 0 | — | |
| | 21 NGAWAL | 3650 | 2.0 | " | 0 | — | テント地 フライシート内側 結霜 |
| | 22 NARGAON | 4240 | -1.0 | " | 0 | — | 干し草等に結霜 |
| | 23 " | " | -3.0 | " | 0 | — | テント内に結霜 |
| | 24 CHAKO南1 km | 3700 | 2.0 | " | 0 | — | フライシートに結霜 |
| 25 PHUGAON | 4100 | 1.5 | " | 0 | — | " | |
| 26 BC | 4800 | -3.0 | くもり | 9 | Ci, Cu | 結霜なし | |
| 27 " | " | -6.5 | 快晴 | 0 | — | テント地結露あり | |
| 28 " | " | -0.5 | くもり | 9 | Cu, St | 結霜なし 結露あり | |
| 29 " | " | -2.0 | " | 9 | Cu, St | フライシート氷結 4900m以上降雪あり | |
| 30 KYANG KHARKA | 3870 | 5.0 | " | 10 | St | | |
| Oct | 1 NARGAON | 4240 | 3.0 | " | 9 | Cu, St | |
| | 2 NGAWAL | 3650 | 6.0 | " | 10 | St | |
| | 3 MANANG | 3510 | 6.5 | " | 10 | Ns | 0430~0530 降雨あり |
| | 4 " | " | 4.5 | " | 10 | Ns | |
| | 5 THORONG PASS | 5420 | -10.0 | " | 9 | Cc, Cu | 積雪1~2cmあり |
| | 6 MUKTINATH | 3600 | 0.0 | 晴 | 2 | Ac | テント内・フライシート氷結 |
| | 7 MARPHA | 2650 | 6.0 | 快晴 | 0 | — | |
| | 8 LETE KHOLA | 2320 | 8.5 | " | 0 | — | |
| | 9 DANA | 1400 | 13.0 | " | 0 | — | フライシート結露 |
| | 10 SIKHA | 2010 | 12.0 | " | 0 | — | |
| | 11 TIRKHEDHUNGA | 1600 | 17.0 | くもり | 10 | Cu | 湿気多い |
| | 12 POKHARA | 820 | 19.5 | 雨 | 10 | Ns, Cu | 弱い降雨 |

※ 雲形記号 Ci: 絹雲, Cc: 絹積雲, Ac: 高積雲, As: 高層雲, Ns: 乱層雲, St: 層雲, Cu: 積雲



図一 マルシャンディ〜ナルコーラ〜カリガンダキトレッキング中の準日最低気温 (気象表を図化)



III章 考察

ナルとプー

小 泉 章 夫

はじめに

今度の山旅を魅力的なものにした要因の一つに、そのアプローチを挙げることができよう。マルシャンディ川の支流のナル・コーラの流域である。マルシャンディの本流沿いは、アンナプルナー一周のトレッキング・コースとして人気が高く、キャラバン中も多くの外国人旅行者に会わない日はなかった。かつて、よそ者に対する愛想のなさでは定評のあったニエシャン（マナン郡のピサンからカンサルまでの地域）の村々でも、トイレ・シャワーと英語のメニューを完備したロッジが続々と建てられており、ハリウッド映画のポスターが遠来の客を迎えるのだった。

ナル・コーラはチベットとの国境を源として南に流れ下り、コドでマルシャンディに合流する川で、一般旅行者の立ち入りは禁じられてきた。その流域には、ナルとプーの2つの集落がある。今回、ナル・コーラの下流の橋が流されて通れなかったことは、ある意味で幸運だった。コドから直接プーに入れなかったため、当初の予定になかったナルにも立ち寄ることができたからだ。やむを得ない事情がなければ、わざわざ遠回りをして息切れのする峠を越えようなどとは思わなかったろう。

これらの村に初めて入った西洋人は、おそらく、1950年のティルマンの一行だろう。彼はアンナプルナーIV峰を試みたのち、7月にカン・ラを越えてナルに入り、カングルーを試登した。さらに、プーからチベット国境のコングル・ラを往復したのち、今度は尾根を越えてラプサ・コーラにトラバースし、ムスタン・ラを越えてムスタンに抜けている（Tilman, 1952）。それ以後も、いくつかの調査が行われている。1956年8月には、英国の仏教学者のスネルグローブが両村の寺院の調査を行っている（Snellgrove, 1961）。彼は往路はカン・ラを越えてナルに入り、帰りはそれより東寄りの稜線を越えて、ギャルに下っている。1974年から翌年にかけて、トリバン大学のグルンが、マナン郡の社会学的調査を行い、ナルとプーについても報告している（Gurung, 1976, 1977）。さらに、1981年の4月から5月にかけて、ハイメンドルフとハルドマンがナルに滞在して、民俗学的な調査を行った（Heimendorf, 1983）。彼らはコドからナル・コーラ沿いに入域したようである。彼らはプーも訪ねている。

以下に、これらの村についての知見を簡単にまとめたが、住民の生活や習慣についての記述は、ハイメンドルフの報告から引用したことをお断りしておく。また、写真は口絵の関連部分を参照していただきたい。

ナルの村

ンガワールから北に1500mの高度差を登りきると、立派なチョルテンのあるカン・ラの峠(5300m)に着く。ここから北側に広がるセムタンの谷は、一本の樹木も見当たらない、荒涼とした景観であった。久しぶりに薄い空気を呼吸しながら、マナスルとカングルーを正面に見てザレ場を走り降り、セムタンの河原に立った。すでに午後遅い時刻で、小さな氷河を源とする流れはすっかり濁っていた。喉の渇きに促されながら、小さなゴルジュを捲いてなおも降りていくと、やがて谷は広がって、草丈の低い放牧地となり、標高4200mのナルの集落が見えてきた。

その第一印象はマナンなどとあまり変わらない、石積み、陸屋根の家並みである。ただし、斜面に密集しているため、各戸は複雑な階層構造をなしている。住居には丸太を刻んだ梯子を登って屋上から入る形式である。この谷には樹木はないので、住居に使われる木材は、すべてナル・コーラ沿いのメタの下の森で伐採され、運び上げられている。木材の使用を節約するためか、扉などの木製建具は小さ目で、くぐり抜けるのに苦勞するものもあった。村の戸数は1975年には55戸、1981年には61戸と報告されている。

プーへ

ナルからプーまでは、冬季居住地のチャコ、キャンを経由して、約1日半の行程である。ナルからナル・コーラに降りたところにユンカル・ラチョという無人の寺がある。ここから、本流のゴルジュに高く架けられた片持ち梁橋を渡り、左岸の捲道を辿る。チャコまではネズミサシ属の樹木のほか、五葉松の一種(*Pinus excelsa*)、モミの類も生えていた。チャコ・キャンの間で2つの枝沢を渡るが、沢の南斜面にはネズミサシ類が、北斜面にはカンバの類が生えていた。森林限界はキャンの少し先だった。この先は河原にメギの類などの低木が茂る程度だが、そのうちのハマナスに似た灌木は赤い小さな実をつけており、地元の娘達が摘んで食べていた(シェルパはアクティンバと呼んでいた)。プーの手前のゴルジュは左岸を高く捲いていくと、やがて村の入口に達する。ここにある経石塚の経文石は、白い石に彫った文字を赤く彩色した鮮やかなものだった。

プーは、ナル・コーラの右岸のテラスの崖の上に、家々が積み重なるように密集して建っており、特異で印象的な景観だった。外敵の侵攻からは堅固に守られた立地だが、単に耕作できないところを居住地としただけなのかもしれない。往路に立ち寄ったときには、周囲の大麥の畑はまだ収穫前で、テントを張る場所もなく、一軒の家の屋上に幕営させてもらった。この家には珍しく猫がいた。村の戸数は1975年には48戸、1981年には51戸と報告されている。

ナル・コーラの流域は乾燥した地域であり、モンスーンの影響も少ないようである。冬季には積雪がある。帰りのキャラバンを開始した10月12日にプーでは曇りが降っていたし、3日後に通過したカン・ラでは数cmの残雪があった。風は日中ナル・コーラ沿いの吹き上げがあるが、ニエシャンほど強くはない。

民族

ナル・プーの住民の出自についてはよくわかっていない。何回かにわたって、別々の時代に、チベットカムスタンから移住してきたものと考えられている。彼らは、父系の家族を構成単位とする、いくつかの血縁グループを形成しており、グループ間で婚姻関係をもつ。

ナルには以下の3つのグループがある。

| | | |
|------|----------|-------|
| ナルパ | [ノーパ] | (24戸) |
| エワ | [バンディラム] | (14戸) |
| ロンデン | [トンデ] | (23戸) |

ここで、[]内はGurung (1977) が報告した名称、()内は1981年当時の戸数である。また、ナルパはユル・ツァンモ、ロンデンはメンデンというサブグループを含んでいる。

グループ間で階級的な上下関係はないが、ナルパはムスタンから移住したナルの創始者の家系とされている。グループ内の婚姻は禁じられている。しかし、ユル・ツァンモの幾人かがナルパの他の構成員と結婚した事実があり、制裁も受けていない。ユル・ツァンモの3戸はナルパとは別に、比較的最近にムスタンから移住してきたものらしい。

プーには以下の3グループがある。

| | | |
|--------|----------|-------|
| モジョクデン | [ンゴチョ] | (11戸) |
| オンセンデン | [オンサンジャ] | (21戸) |
| ラダクデン | [ラタ] | (19戸) |

プーの創始者はチベットから移住したもので、モジョクデンの先祖とされている。

例はやや少ないが、ナルとプーの間でも結婚が行われている。外部の村との婚姻関係はほとんどない。Gurung (1977) が調べた範囲では、1940年代にナルとピサンの間であった以外、例はなかった。

世帯・家族の単位は、一夫一妻制の核家族で、夫と妻が対等なパートナーとなる。家族数は、Gurung (1976) の報告にある戸数と人口のデータから推定すると、1戸当たり約8人となる。息子は結婚すると、親から家を与えられて独立する習わしとなっている。余分の土地や家がない場合には、村の未利用地に新築される。住居は私有制である。

言語はチベット・ビルマ語族に属し、マナン人の言葉に近い。両村の男性の多くはチベット語の読み書きもできる。

信仰

両村の村人はチベット仏教徒である。現在はニンマ派を奉じているが、過去にはカギュー派が多数を占めた時代もあった。いずれもチベット仏教の4大宗派の一つである。1981年当時、ナルの僧の序列で最高位にあったラマ・ニュタクは、もともとカギュー派のラマの世襲家の出身だったが、ニンマ派に転向したものである。

プーには村の中心にユル・ゴンパ、上手にタングリソ・ゴンパの2つの寺院があるが、僧達が生活していて、村の祭事が行われているのは、村の上手の沢（ローダル川）を渡った丘

の上にあるタシ・ゴンパという大きな僧院である。我々も往路、ここに寄っていくばくかの寄進をした。1981年当時の僧院長はラマ・ソナムだった。ハイメンドルフの聞き取りによれば、彼は村の出身ではなく、1958年前後にチベットのカム地方からこの地に来た。おそらく動乱を逃れてきたのだろう。この村を通りかかった時に、村人に請われて留まり、無人だった僧院を再興した。もっとも、彼は高德の僧としてより、その絵の才能を村人に認められたものらしい。1956年にスネルグロブがタシ・ゴンパを訪ねたときに、すでにこのラマが居たかはわからないが、無人ではなかった。彼は次のように記している (Snellgrove, 1961)。「本堂は小さく、その壁には最近描かれたばかりの、懺悔の35仏が見られるが、この下には、古い時代のもっと秀れた壁画があったにちがいないのである。」気の毒なスネルグロブを失望させたのは、絵心のあるラマであったかもしれない。

タシ・ゴンパの僧は、我々がヒムルン・ヒマールを登ることに好意的だった。ベースキャンプに入った日には、臙脂色の僧衣を着た僧院長の息子が子供を連れて現れ、ビスケットとラム酒を供えてプジャをしてくれた。彼は徳のありそうな風貌のラマで、その後も、たびたびベースキャンプを訪ねてきた。護符や丸薬を持ってきてくれたこともあった。

ナルでは、かつてボン教も盛んだったが、現在では信者は2戸しか残っていない。ボン教の最後の僧は1964年頃に死んだらしい。しかし、ボン教の儀式は現在も生活習慣の中に残っている。たとえば、未婚の女性を身籠らせた男は、その贖罪に、村にあるボン教の祈禱所に供物を捧げることになっている。ナル・プーでは、他のチベットン社会と同様、結婚前の性交渉に対して寛容であり、私生児も多いらしい。なお、ボン教の信仰はナルパに限られるようである。

シェルパなどと同様に、魔女・魔法使いも信じられている。魔法使いは、無意識下に嫉妬によって他人に害を及ぼすのである。ナルではその数が非常に多く、全家系の3分の1ないし半分の血筋から魔法使いが出ると考えられている。これに対し、プーには、ほとんどいない。

死者は、土葬にすることもあるが、普通は近くの丘の上に遺体を運んで解体し、鳥葬にする。

産業

ナル・プーの経済構造はよく似ており、牧畜、農耕、それに交易で生計を立てている。

(1) 牧畜

1981年当時、ナルでは約2000頭のヤク（雌を含む）、300～400頭の羊、40～50頭の雌牛、35頭の馬が飼われていた。家畜の主体はヤクである。裕福な者は100頭以上を所有しているが、普通は10～20頭を飼っている。ヤクは夏の間はイエルサと総称される高地のカルカで放牧される。我々がベースキャンプを置いたところもプーの放牧地の中であり、ヤク、山羊、羊が放されていた。ここからプー・コーラに降りたパンガリ・カルカと呼ばれる居住地（標

高4500m)には、何人かの男女と犬が滞在していた。冬になると、家畜はグンサと呼ばれる、村より低地にある居住地に移される。我々がベースを引き払った10月中旬にパンガリ・カルカのヤクの一部は降ろされ始めていた。

ヤクは乳製品や毛織物そして交易用に飼われている。また、一部は春の耕耘に使役される。乳のほとんどはバター材料になる。バターはバター茶に使い、食用油であり、バター灯明の燃料でもある。化粧品として髪に摺り込むためにも使う。ヤクの毛は羊のそれより丈夫である。これは夏に刈られて織物に使われる。長い毛はロープを編むのに使われる。ヤクを屠殺することはまずないが、死んだヤクの肉を食べることはある。しかし、牛の肉は食べない。これは低地のヒンズー教徒との接触を通して身につけた習慣らしい。ナルではシェルパなどとは異なり、ヤクと牛を交配して雑種(ゾ・ゾプキョ)をつくったり、飼ったりはしない。このような人工的な交配は宗教上のタブーとされている。

羊と山羊は肉を食べ、羊毛や毛皮をとるほか、搾乳して凝乳をつくる。馬は乗用だろう。またナルの村で飼われている牛は、ヤクや羊が放牧地に行っている間、乳を得るためらしい。

(2) 農耕

ナル・プーの主要な作物は大麦(裸麦)である。畑のほとんどは世帯ごとの私有地であり、それぞれに灌漑用の水路が引かれている。大麦は4月の終わりから5月初旬に種を播き、10月初めに収穫する。帰路、10月中旬に両村を通過した時には、すでに収穫されて家々の屋上などに干されており、脱穀も始まっていた。

その他の作物として、ジャガイモ、カラシナのほか、メタでは小麦とソバも少量、作付されている。ジャガイモは比較的新しく、1920年頃にヌプリ(プリ・ガンダキの西の源流域)から導入されたものらしい。

(3) 交易

ナル・プーの耕作地は面積が小さい上、生産性も低く、Gurung(1977)によれば、穀物の自給率はわずか30%とされる。このため、交易によって穀類の不足を補っている。ただし、両村の交易活動は、昔から限られた地域を対象とした小規模なものだった。ナル・コーラはチベットに通じていたにも拘らず、両村の住人はチベットとの交易は行っていなかった。そのため、1959年に中国がラサを制圧して以来、交易が停止したことの影響は、ナル・プーでは小さかった。もっとも、Tilman(1952)によれば、コングール・ラ越えの道は相当な悪路だったようである。なお、この付近でチベットとの交易に従事していたのは、ギャスムド(マナン郡のタルからチャーメまでの地域)の住民であった(Gurung, 1976)。

主要な交易品はヤク、乳製品、毛織物で、引換えに村で消費する穀類を購入する。ナルの村人はムスタンからヤクを買ってきて、マナンで売っている。1980年当時、1頭の買値は2000ルピー、売値は2800ルピーだった。バターはマナンからナルへ買い付けにくるようである。この他、毛皮、ロープ、ニンニク、薬草などを持って交易に出かける。通常の変易範囲

はマナン、ラムジュン、ドゥムレまでだが、カトマンドゥまで出かけることもある。カトマンドゥでは毛布、靴、ヤクの尻尾（塵払い用、とくに白毛のものは蠅払いとして倍の値段になる）などを売っている。

移動生活

ナル・プーでは冬の間、家畜を低地の季節居住地（グンサ）に降ろさねばならない。また、食糧の不足を補うため行商に出かける必要もある。このため、とくに冬季には村人の多くが、低地のグンサや村々に移動する。冬季以外でも、ナルの村人はニエシャンに農作業の出稼ぎに行くようである。帰路にナルに立ち寄った際に、男達をあまり見かけなかったが、彼らはニエシャンに働きに行っているとのことであった。

ナルの主なグンサはチャコとメタである。これらでは十分な数の住居がないため、一つの住居に複数の世帯が起居を共にしている。

とくに冬の厳しいプーでは、タシ・ゴンパの僧侶が僧院に留まるほか、村は無人となる。プーのグンサはキャンである。ここには多くの住居があり、すべての家族が一戸を所有している。クンプ地方のカルカなどでは、無人の住居には南京錠がかけられているのが普通だが、ナル・プーではそのようなことはなく、中に入ることができる。我々は帰路のキャラバンで、キャンの住居のいくつかを無断で使わせてもらったが、なかなか快適なところだった。

村会制度

ナル・プーはニエシャンと同様、それぞれ、村を治める組織として、ガンバ・レンジンという村会を持っている。村会はガンバ（チベット語で長老の意）とレンジンという2種類の代議員（Gurung(1977)によれば、ダーパーとシェルパ）で構成される。代議員は、候補者を登録した名簿にしたがって、各血縁グループから公平に代表が出るように、毎年、交替する。この当番は個人の力とは関係なく、年齢順に機械的に当たるようになっている。名簿には、全世帯から各1名の15～60才の男子が世帯の代表として登録されている（Gurung, 1977）。代議員の数は1981年当時、ナルでは7名、プーでは5名だった。

村会の役割は、村の中のもめごとの調停、祭礼や儀式の管理、政府へ納める税金の徴収などである。ネパールでは、1962年から最近まで、パンチャヤト制度が敷かれていたが、これはナル・プーではあまり機能しなかったようである。税金は土地と家畜に対して課税されている。各世帯は所有地の生産力に応じた額を納めるのである。1981年にナルが納めた地租の総額は254.92ルピー、プーでは83.54ルピーだった。また、当時の家畜の所有税は、ヤク1頭につき50パイサ、羊・山羊は9パイサとされていた。

この他の村の組織として、木材や鶏卵などの希少品目の販売を管理する委員会などがある。

強盗騒ぎ

登山を終えてナルに戻ってきたのは10月13日だった。ここで、ポーターの雇用などのため、

一日滞在することになった。ちょうど、大麦の脱穀のシーズンで、夜明け前の5時過ぎから日没まで、穀竿で麦穂を叩く規則正しい音が聞こえていた。その夜は、村人の歌と踊りが遅くまで続き、ようやく寝静まった深夜のことである。隊荷を集めておいた家に、ナイフを持った数人の男が侵入したのである。寝ていたシェルパ達が襲われたが、幸い、怪我人もなく、盗まれたものもなかった。その場でキッチンボーイのリンジンが犯人の1人を取り押さえたが、残りは逃げた。翌朝になって、梯子に縛りつけられた犯人を見物しに集まってきた群集の中から、次々に2人の共犯者が捕まえられた。どのようにして、それと発覚するのかは傍で見ていても謎だったが、シェルパ達が群集と果てしない口論をするうちに、突然、襲いかかって押さえつけるのである。年齢は3人とも20代に見えた。3人目を捕まえているどさくさに紛れて、1人の女が2人の縄をほどいた。彼らは一目散に住居の密集の方へ逃げて行った。この2人は人相の悪い男達で、普通の村人の身なりとは異なり、ジーンズを着て運動靴をはいていた。最後に捕まった男は、この地方の典型的な服装をしていた。初めの2人を逃がした女はこの男の母親で、これもシェルパ達が拘束した。

リエゾン・オフィサーは観光省への連絡のために先行して不在だったので、シェルパ達はこの親子をチャーメの警察まで連行しようとした。キャンプの周辺は、出発前から、村人達とシェルパの声高な論議と女の泣き叫ぶ声で騒然としていたが、2人の手に縄をかけて、村から連れ出す段になって、いよいよ騒動になってきた。一団の群集が後を追ってきて、2人にすがりつくのである。群集は犯人とどの程度の血縁関係にあるのかわからなかったが、だんだん数が増えてきて、最後は30人位になった。その他の村人はこの騒ぎに関心を示さなかった。群集はすべて女で、そのうちの1人の若い女は大声で泣き続け、集団の興奮を煽っていた。数少ない男達は遠巻きにして、シェルパや我々に合掌して釈放するよう哀願する。それに力を得て、犯人の男も抵抗して歩こうとせず、あるいは逃げ出そうとする。シェルパ達はなかなか乱暴で、男を殴り、蹴る。移動するにつれて、群集の抵抗はますます強くなる。結局、村の仏塔門を出たところで、シェルパ達は連行を諦めた。供述書に署名させ、指紋をとった上で、2人を放免したのである。

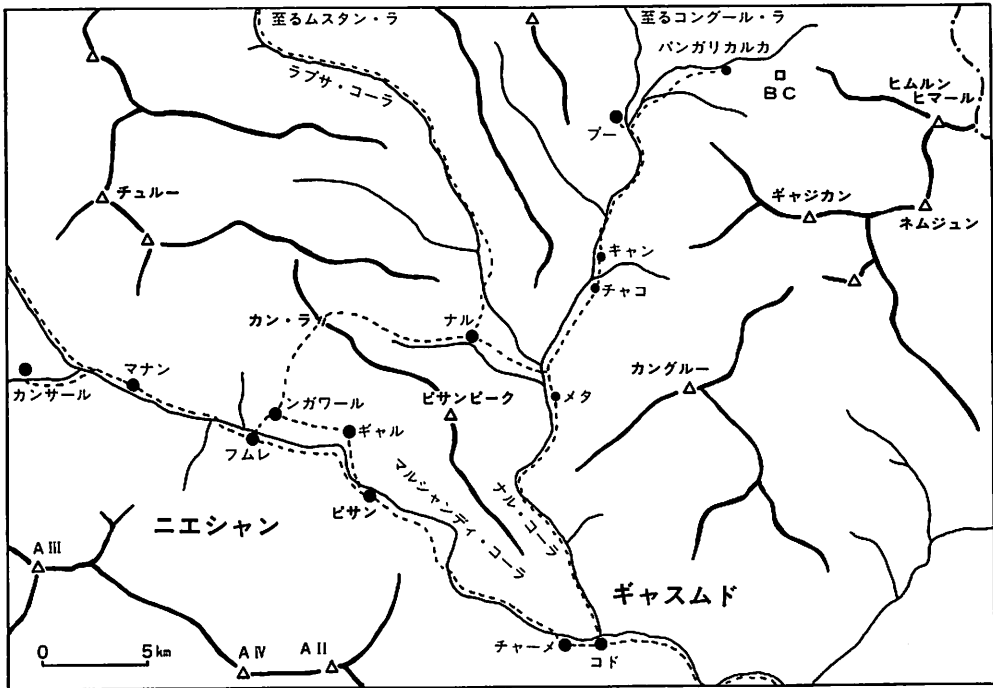
後日、事の次第をチャーメの警察に届け出はしたが、誰がカン・ラを越えてナルまで逮捕しに行くというのだろう。なお、群集の中心にいた「泣き女」は我々の雇ったポーターの1人で、騒ぎの後は何事もなかったように、ベシサハールまでのキャラバンを共にした。

おわりに

ナル・プーは、秘境ではない。地理的探検の時代は遙か昔に過ぎ去ったし、村人は頻繁にマルシャンディに降りてきて、社会情勢の変化や新しい生活様式に接している。とくにナルは、外国人旅行者の行きかうニエシャンまで、カン・ラを越えればわずか1日の距離である。ナルの我々のキャンプサイトには大勢の子供達が夜遅くまで屯し、どこで覚えたのか「ハロー・ミー・ペン」と筆記具をねだるのだった。

そうはいっても、外国人の立入りを制限することで、彼らの生活様式が比較的変らずに保

たれていることは確かである。しかし、その政策は同時に、ただでさえ経済的ハンディキャップの大きいこの地域の、マルジャンディ沿いの地域との間の格差をますます大きくしている。インドと中国に挟まれて、構造的な超赤字財政の続くネパール政府に、僻地振興の予算などあろうはずがない。当面は観光開発に頼るしかないだろう。ムスタン解禁をはじめとする最近の開放政策は、その方向を指すものだろう。今回、10年振りにネパールの観光街道を歩いて印象的だったことは、多くの学校が開かれていて、そこに通り子供達が増えていたことである。ツーリズムの落とす金がどのように分配されて行くのかは定かではないし、好ましくない影響もあるだろう。しかし、それは着実に地域を豊かにし、将来この国を支える人材を育てているのである。



付図：ナルコーラとその周辺

文献

Gurung, N.J.: An Introduction to the Socio-economic Structure of Manang District, Kailash, 4(3), pp.295-310 (1976).
 Gurung, N.J.: An Ethnographic Note on Nar-Phu Valley, Kailash, 5(3), pp.229-244 (1977).
 Heimendorf, C.F.: Bhotia Highlanders of Nar and Phu, Kailash, 10(1-2), pp.63-117 (1983).
 Snellgrove, D.L.: "Himalayan Pilgrimage", Bruno Cassirer, 1961.
 [吉永定雄訳: "ヒマラヤ巡礼", 白水社, 1975].
 Tilman, H.W.: "Nepal Himalaya", The University Press, 1952.
 [深田久弥訳: "ネパール・ヒマラヤ", あかね書房, 1971].

医療報告

山口 斌

この度の遠征隊の特徴は、常日頃登山をし技術と体力を鍛えている、いわゆる精鋭を集めて遠征隊を編成したのではなく、社会的にも多忙な毎日を送っているものが、何とか休暇の都合をつけ参加した者が大多数であった。そのため出発直前まで多忙の者が多く、トレーニングも不十分で体力的に憂慮される余地があった。また高齢者も多く、遠征隊11名とトレッキング隊3名の内50才以上が5名を占める結果になった。その反面、医療に関しては河合範雄、山口斌、トレッキング隊の佐藤行郎の3名の医師がおり、医療面では充実した遠征隊となった。

健康診断

今回の遠征は病人を出すことなく、キャラバンを滞りなく進めながら如何に高所順応をし、体調を落とさずにベースキャンプ(BC)に入るかが鍵と考えた。

そのため事前に医学検査を行なうと共に、出発まで各自でトレーニングを行なうことを要請した。1992年2月に医学検査として一般検血、一般検尿、血液生化学検査、血液型、胸部エックス線撮影、負荷心電図、呼吸機能検査、A型肝炎抗体価検査を行なった。また最大酸素摂取量測定をミナト医科学株式会社製エアロモニターAE-280により行なった。また、出発直前にトレーニング効果を見る目的もあり再度最大酸素摂取量測定を試みたが、正確なデータを出せず嫌気性代謝閾値測定にとどまった。検査結果については受診者全員に異常所見を認めなかった。

表1 生理学的検査成績

| 隊員 | 年齢 | 身長 (cm) | 体重 (kg) | 奥座 (年/本/日) | 過去最高 到達高度 | CTR (%) | FVCL (予備値)% | FEV1% (予備値)% | MVV (l/min) (予備値)% | VO _{2max} (l/min) | VO _{2max} /kg (ml/min/kg) | VO _{2max} /kg (予備値) | AT (l/min)② (%VO _{2max}) | MAX HR (b/min) (S) | 出発直前 AT (l/min) | 今回最高 到達高度 |
|------|----|---------|---------|------------|-----------|---------|------------------|------------------|--------------------|----------------------------|------------------------------------|------------------------------|------------------------------------|--------------------|-----------------|-----------|
| K.S. | 23 | 168 | 64 | 5/15 | 3,100m | 39.6 | 5.34 (4.21)126.8 | 79.2 (83.2)95.2 | 170.6 (128.4)132.9 | 3.111 | 48.60 | 46.69 55.62 | 1.472(47.3) | 191(97) | 1.635 | 6,250m |
| E.I. | 24 | 170 | 62 | 5/15 | 3,200m | 42.3 | 5.26 (4.24)124.1 | 89.5 (82.8)108.1 | 145.2 (126.9)114.4 | 3.564 | 57.48 | 46.52 55.01 | 1.985(56.7) | 197(101) | 2.183 | 6,250m |
| K.H. | 30 | 180 | 77 | 11/20 | 6,500m | 37.1 | 5.19 (4.37)118.8 | 81.1 (80.6)100.6 | 181.3 (138.9)130.5 | 3.774 | 49.01 | 45.5 51.34 | 1.955(51.8) | 202(106) | 1.986 | 7,126m |
| O.S. | 31 | 165 | 63 | 11/30 | 3,000m | 38.1 | 4.74 (3.99)118.8 | 89.2 (80.2)111.2 | 210.6 (118.8)177.3 | 3.417 | 54.23 | 45.33 50.33 | 1.777(52.0) | 199(105) | 2.037 | 7,126m |
| H.T. | 33 | 172 | 66 | 2/10 | 3,000m | 44.1 | 4.63 (4.12)112.4 | 74.9 (79.5)94.2 | 128.2 (123.1)104.1 | 3.352 | 50.78 | 44.99 49.50 | 2.170(64.7) | 189(102) | 1.987 | 6,000m |
| A.K. | 36 | 167 | 64 | (10/30)ⓐ | 8,167m | 43.3 | 4.58 (3.94)116.2 | 80.8 (78.4)103.1 | 139.1 (116.2)119.7 | 3.256 | 50.87 | 44.48 47.66 | 1.952(60.0) | 192(104) | 2.257 | 7,126m |
| N.K. | 39 | 165 | 70 | 18/10 | 6,500m | | 4.25 (3.84)110.7 | 83.5 (77.2)108.2 | 171.1 (116.9)146.4 | 3.421 | 48.87 | 43.97 45.83 | 1.597(46.7) | 182(101) | | 5,450m |
| O.H. | 40 | 170 | 66 | 20/40-50 | 7,500m | 38.9 | 4.33 (3.94)109.9 | 82.0 (76.9)106.6 | 151.5 (116.3)130.3 | 2.676 | 40.15 | 43.8 45.22 | 2.008(75.1) | 180(100) | | 7,126m |
| Y.N. | 50 | 164 | 59 | 30/60 | 3,700m | 44.2 | 3.30 (3.61)91.4 | 88.2 (73.1)120.7 | 151.0 (98.8)152.8 | 2.730 | 46.27 | 42.1 39.1 | 1.596(58.5) | 174(102) | | 5,850m |
| T.Y. | 54 | 176 | 66 | (13/20)ⓑ | 4,000m | 38.6 | 4.52 (3.80)118.9 | 73.0 (71.6)102.0 | 143.1 (105.3)135.9 | 3.173 | 48.07 | 41.42 36.22 | 2.223(70.1) | 167(101) | 2.127 | 6,000m |

ⓐ 過去の奥座記録
 ⓑ Anaerobic Threshold 嫌気性代謝閾値
 ① 上段 VO_{2max}=50.6-0.17x年齢 (Wolthuisの式)
 下段 VO_{2max}=69.7-0.612x年齢 (Bruceによる active manの式)

生理機能検査について

遠征隊員のうち大阪在住の1名を除く10名に生理機能検査を行なった。負荷前後の心電図で虚血性変化を示すものは見られなかった。生理機能検査の結果を表1に示した。

心肺胸郭比(CTR)は全員45%以下で心肥大所見を認めなかった。

肺機能に関しては全員良好で、特に分時最大換気量(MVV)に関しては予測値より130%以上の高値を示すものが7名であった。

分時最大酸素摂取量は9名が45ml/min/kg以上を示し、一応の目安とされる50ml/min/kg以上の者は4名であった。また、乳酸を産生する嫌気性代謝が開始する時点である嫌気性代謝閾値(AT: anaerobic threshold, OBLA: onset of blood lactate accumulation)は持久力の目安とされ、トレーニングを行っていない者の値は最大酸素摂取量の50~60%であり、トレーニングを積んだ者では85%に達するといわれている。今回の測定結果では個人差が大きかったが、最大酸素摂取量に対する比では50~60%の者が5名、50%以下の者が2名含まれていた。

健康手帳

1991年3月に開催された第7回国際低酸素症シンポジウムで提唱された急性高山病重症度自己判定表と動脈血酸素飽和度、脈拍数、呼吸数等を記載する健康手帳を作成し、各自が朝夕2回記入することとした(表2)。

疾病予防

病人が発生し登山活動の妨げにならないよう、出来る限り疾病を予防する方針をとった。疾病予防処置として出発前にコレラ予防注射を行なった。A型肝炎抗体を測定した10名のうち9名が抗体陰性であり、この9名には人免疫グロブリンを注射した。またキャラバン開始直前に抗マラリア剤を服用した。キャラバン開始後は毎朝夕、総合ビタミン剤を服用した。高山病予防のためカン・ラ(5300m)を越える前日にアセタゾラミド250mgを投与した。

またPulsox-5(ミノルタ製)により動脈血酸素飽和度を測定し、高所での活動状況並びに高度障害との関連性の検討を試みた。高山病対策として緊急医療用酸素ボンベ及びガモウバッグを持参した。

現地での医療

現地での医療を振り返ると、隊員に関しては下痢、発熱、高度障害のほか、肝機能障害の

表2 健康手帳

| 月 | 日 | 時 | 場所 | 高度 | m | | |
|-------|------|-------------|------------------|------------------|-------------|----|---|
| 取 | 痛 | 0 | 全く無し | 1 | 軽度 | | |
| | | 2 | 中程度 | 3 | 強度 | | |
| | | 4 | 骨で経験したことも無い程ひどい | | | | |
| | | 0 | 食欲良好 | | | | |
| 消化器 | 症状 | 1 | いつものように食欲が無い | | | | |
| | | 2 | むかついて食欲が悪い | | | | |
| | | 3 | 強いむかつきのため食欲全く無し | | | | |
| | | 4 | 強いむかつき、嘔吐。食事不能 | | | | |
| 疲労、脱力 | | 0 | 全く無い | 1 | 少し感じる | | |
| | | 2 | かなり感じる | 3 | 非常に強く感じる | | |
| | | 4 | とてもひどく感じる | | | | |
| | | 0 | 全く無い | 1 | 少し感じる | | |
| めまい | ふらつき | 2 | はっきり感じる | 3 | 非常に強く感じる | | |
| | | 4 | とてもひどく感じる | | | | |
| | | 0 | 快眠 | 1 | 数回目が覚めた | | |
| | | 2 | 何度も目が覚め、よく眠れなかった | | | | |
| 睡眠障害 | | 3 | 殆ど眠れなかった | 4 | 全く眠れなかった | | |
| | | 合計 点 | | | | | |
| | | 呼吸数 | /分 | 脈拍 | /分 | 血圧 | / |
| | | 体温 | | SpO ₂ | % | | |
| その他 | 病感 | (点数には加えない) | | | | | |
| | | 0 | 全く無い | 1 | 少し感じる | | |
| | | 2 | はっきり感じる | | | | |
| | | 3 | 非常に強く感じる、具合が悪い | | | | |
| 活動能力 | | 4 | もう死にそうだ | | | | |
| | | 0 | 普段と全く変わらない | 1 | 少し落ちている | | |
| | | 2 | はっきりと落ちている | 3 | 極めてひどく落ちている | | |
| | | 4 | 何も出来ず寝たきり | | | | |

発生があった。今回は幸い外傷はなく、隊員の外科的処置は粉瘤の摘出手術を行なったのみであった。

下痢はカトマンドゥ到着後次々と7名が下痢に襲われた。その内2名は重症で点滴を行なった。その後キャラバンを開始後も発生が続き、ことに初期の猛暑の中で下痢に陥った者は、食欲もなく食事を殆ど摂取しないまま行動したため、脱水強度となり点滴などの治療で回復した。しかし、高度を上げるにつれ下痢の発生は少なくなり程度も軽くなった。下痢の発症者は14名中12名にのぼった。

その後突然感冒様の症状で高度の発熱を呈するものが2名発生した。ピサン(3100m)でAが早朝より悪寒出現したが、そのまま我慢して行動した。しかし、ソガワール(3650m)に着いた時には頭痛と38.6℃の発熱を訴え倒れこんでしまった。翌日休養をとらせやや回復したため、カン・ラを馬で越えナル(4200m)に達した。翌朝も発熱ありメタ(3500m)で休養させることにしたが、ナル・コーラに降りた時には調子を取り戻し、皆と一緒にチャコ(3700m)に達した。翌朝、ソガワールで高度障害に陥ったBが39℃の発熱をきたした。この2名は1日間の休養の後、回復した。急激な気候の変化、寒暖の差と疲労の蓄積によるものと考えられるが、低圧の影響も無視できないと思われる。

キャラバン中は、毎日朝と夕に体調を崩したポーターの診療を行なった。ポーターの疾病としては、当初は雨のなかでの行動で40℃にもおよぶ発熱者が多発した。裸足の者には足の外傷もみられたほか、膿瘍のものもお切り開手術を行なった。また背負っている灯油がこぼれ、背部にびらんを作ってきた気の毒な者もいた。

高山病に関してはソガワール(3650m)でBが頭痛を訴えセデス、アセタゾラミドを投与した。翌日のカン・ラ(5300m)越えが心配され、ホンデまで下ることを考えたが、幸い翌朝回復し無事に峠を越えることが出来た。峠を越えたナル(4200m)では、Cが高度障害を発症し、300m下のカルカに移動し回復した。

BC(4800m)での急性高山病の発生状況および処置について次に述べる。まず9月27日、Dが高所順応のため我々がモレーンピーク(5100m)と呼んでいた所まで往復した後に頭痛を訴え顔面の浮腫も出現した。翌28日も続いたためプーガウン(4070m)へ下った。この際、4300m以下になった時点で頭痛、脱力感が消失したと述べている。彼は29日には回復しBCに復帰した。また29日にはEがC1より高度障害で下山、ガモウバッグに約1時間収容した。しかし、その効果の判定は困難であった。彼はヒマラヤの経験者でもあり、その後高所順応を順調にすすめて頂上に達している。9月30日にはキャラバン中に発熱したAがC1で、Bが6000m地点でそれぞれ高度障害に陥りAは単独で、Bは付き添われてBCに戻った。彼らは高度を下げたのみで特別な処置をすることなく回復した。その後、登頂体制に入り、50才以上の隊員を除く8名全員が順次頂上を目指した。しかし、高度障害に陥ったA、B、C、Dの4名はBCで回復した後に登頂に向かったのであるが、再び高度障害が出現し頂上に達することは出来なかった。

BCでは多くの者が感冒、頭痛、咳、咽頭痛に侵され、感冒薬、鎮痛剤、トローチが多く

使用された。

帰路は出発の朝にFが突然39.6℃の発熱を出現し、プーガウン(4070m)で休養をとり回復した。その後は咳が続くだけで一般状態は良好で、行動も普通で全く健康に見えた。しかし咳が続くため帰国後病院にて受診したところ、肝機能障害を指摘され緊急に入院し検査治療を受けた。診断はE型肝炎であった。現在は完全に回復し、通常の日常生活を送っている。

またGはBCよりカルカ(4500m)に下った10月10日に発熱あり処置をした後は元気だったが、13日に蕁麻疹出現、食欲なく食事を摂らなくなった。15日はカン・ラ越えで非常に消耗していた。点滴を行なったがその後も食欲不振が続き、消耗を重ねるうちに黄疸が出現してきた。停滞休養も検討したが、停滞して軽快する確信もなく、この間の病状の悪化も否定出来ず、行動を続けることとした。18日にバガルチャップ(2160m)で馬を雇うことができ、彼を馬の背に乗せてキャラバンを続けた。20日にベシサハールに着きキャラバンを終え、21日にカトマンドゥに帰着した。21日 Teaching Hospitalにて受診した。検査結果は閉塞性黄疸とのことで、急遽帰国し入院した。精密検査の結果は肝炎であった。入院治療により完全に健康を取り戻した。

動脈血酸素飽和度測定及び急性高山病自己判定スコアについて

隊員全員に健康手帳を配布し、登山期間を含めてキャラバン開始より終了まで毎日朝夕、急性高山病重症度自己判定スコアと動脈血酸素飽和度 (SpO₂)、脈拍数、呼吸数の測定及び健康手帳への記載を要請した。しかし、記載及び手帳の回収が思うようにいかず成績を検討するには不十分であった。BCまでのキャラバン中の高度と、朝の出発前のSpO₂との関係を表3及び図1に、脈拍数との関係を表4に示した。また、その時の急性高山病自己判定スコアを表5に示した。

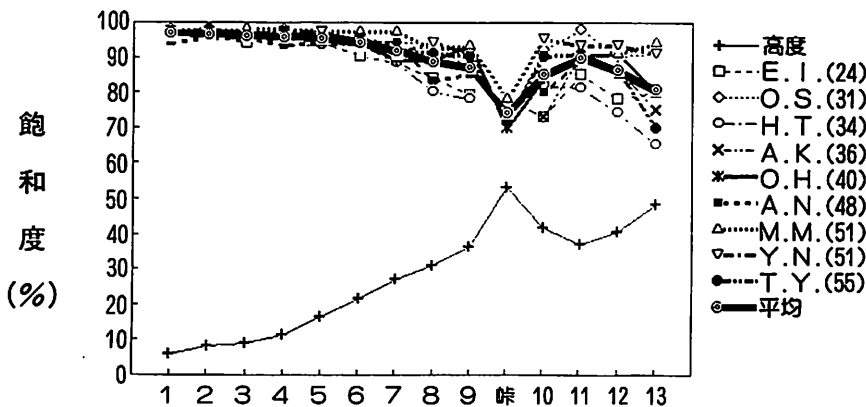


図1 キャラバン中における高度と動脈血酸素飽和表
キャラバン開始後の日数

表3 キャラバン中における高度と動脈血酸素飽和度

| 日 数 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 峠 | 10 | 11 | 12 | 13 |
|-----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 高度 (m) | 620 | 823 | 900 | 1136 | 1650 | 2160 | 2700 | 3100 | 3650 | 5320 | 4200 | 3700 | 4070 | 4850 |
| E.I. (24) | 98 | 96 | 94 | 96 | 94 | 90 | 88 | 84 | 79 | | 73 | 85 | 78 | 80 |
| O.S. (31) | 98 | 96 | | | 96 | 95 | 94 | 94 | 86 | 72 | 92 | 98 | 90 | 91 |
| H.T. (34) | | | | 93 | 93 | 93 | 88 | 80 | 78 | | 82 | 81 | 74 | 65 |
| A.K. (36) | | | | | | | | | | 78 | 73 | 91 | 86 | 75 |
| O.H. (40) | 97 | 97 | 97 | 96 | 97 | 94 | 89 | 89 | 93 | 70 | 84 | 90 | 91 | 80 |
| A.N. (48) | 94 | 95 | 95 | 93 | 94 | 94 | 94 | 83 | 85 | | 80 | 89 | 85 | 80 |
| M.M. (51) | 96 | 97 | 98 | 98 | 97 | 97 | 97 | 92 | 93 | 78 | 95 | | 91 | 94 |
| Y.N. (51) | 97 | 96 | 96 | 97 | 97 | 94 | 91 | 94 | 91 | | 95 | 93 | 93 | 91 |
| T.Y. (55) | 97 | 98 | 96 | 97 | 95 | 95 | 92 | 91 | 90 | 72 | 90 | 91 | 86 | 70 |
| 平 均 | 96.7 | 96.3 | 96.0 | 95.7 | 95.3 | 94.0 | 91.6 | 88.4 | 86.9 | 74.0 | 84.9 | 89.8 | 86.0 | 80.7 |

左欄はイニシャルと年齢を示す

今回の成績では、SpO₂は高度の影響を強く受けており、この値により高所順応及び高所での活動能力の判定は出来なかった。また急性高山病自己判定スコアでは、1名が高い値を表示しているがこれはAの発熱時のスコアである。この値とSpO₂との間にも相関を認めなかった。

表4 キャラバン中における高度と脈拍数

| 日 数 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 峠 | 10 | 11 | 12 | 13 |
|-----------|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 高度 (m) | 620 | 823 | 900 | 1136 | 1650 | 2160 | 2700 | 3100 | 3650 | 5320 | 4200 | 3700 | 4070 | 4850 |
| E.I. (24) | 74 | 75 | 76 | 90 | 93 | 76 | 76 | 92 | 96 | | 87 | 85 | 75 | |
| O.S. (31) | 85 | 105 | | | 97 | 80 | 82 | 80 | 90 | 95 | 74 | 93 | 91 | 89 |
| H.T. (34) | | | | 81 | 79 | 80 | 92 | 92 | 115 | | 90 | 85 | 110 | 80 |
| A.K. (36) | | | | | | | | | | 80 | 88 | 76 | 86 | 97 |
| O.H. (40) | 102 | 95 | 86 | 91 | 78 | 77 | 78 | 75 | 88 | 100 | 92 | 101 | 100 | 110 |
| A.N. (48) | 74 | 75 | 78 | 70 | 75 | 69 | 70 | 96 | 79 | | 83 | 82 | 80 | 85 |
| M.M. (51) | 108 | 86 | 78 | 68 | 83 | 80 | 81 | 80 | 82 | 81 | 90 | | 87 | 93 |
| Y.N. (51) | 82 | 102 | 104 | 70 | 84 | 80 | 88 | 102 | 89 | | 86 | 86 | 76 | 87 |
| T.Y. (55) | 80 | 63 | 72 | 69 | 82 | 70 | 74 | 66 | 82 | | 70 | 72 | 63 | 60 |

表5 キャラバン中における高度と急性高山病重症度自己採点スコア

| 日 数 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
|-----------|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 高度 (m) | 620 | 823 | 900 | 1136 | 1650 | 2160 | 2700 | 3100 | 3650 | 4200 | 3700 | 4070 | 4850 |
| E.I. (24) | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 7 | 8 | 10 | 3 | 1 | 0 |
| O.S. (31) | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| H.T. (34) | | | | 1 | 2 | | 1 | 1 | 2 | 0 | 4 | 0 | 6 |
| A.K. (36) | | | | | | | | | | 0 | 0 | 0 | 1 |
| O.H. (40) | 3 | 2 | 1 | 1 | 0 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 |
| A.N. (48) | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 3 | 0 | 1 | 2 |
| M.M. (51) | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 2 | 4 | 1 | 1 |
| Y.N. (51) | 1 | 0 | 4 | 0 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 | 2 | 2 |
| T.Y. (55) | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 |

BC到着後登山活動が開始すると、健康手帳の記載がおろそかになり、成績を集計するデータを得られなかった。BC到着時と登山終了後帰路のキャラバン準備のためカルカへの移動前後、キャラバン開始時に得られたSpO₂のみを表6に示したが明かな変化を認めなかった。

考察

この度の遠征では50才以上を除いた8名全員が3次にわたって登頂を試みたが、登頂に成功したのは4名であった。残りの4名は登頂の機会がありながら、体力的に登頂を果たせな

表6 BCにおける動脈血中ヘモグロビン酸素飽和度の推移

| 月 日 | 9.26-27 | 10.9 | 10.10 | 10.12 |
|-----------|---------|------|-------|-------|
| 高度 (m) | 4850 | 4850 | 4500 | 4500 |
| E.I. (24) | 80 | | | 85 |
| O.S. (31) | 91 | | | |
| H.T. (33) | 65 | | | |
| A.K. (36) | 75 | 83 | 89 | |
| O.H. (40) | 80 | 87 | | 89 |
| A.N. (48) | 80 | | | |
| M.M. (51) | 94 | 90 | 88 | 92 |
| Y.N. (51) | 91 | 86 | 82 | |
| T.Y. (55) | 70 | 86 | 82 | 86 |
| 平 均 | 80.7 | 86.4 | 85.3 | 88.0 |

かった。登頂できなかった4名はいずれもキャラバン中に体調を崩したA、B、C、Dである。計画当初から如何にキャラバン中に隊員の健康を維持し、ベストコンディションを維持したままBC入りするか気を使っていた。しかしキャラバンに遅れたくないという気持ちが強く出てしまい、十分な回復を得ないままBC入りしてしまったのではないかと考える。さらに高度4800mのBCでの疲労回復に対する考えが甘かったのではないかと反省している。

今回の登山活動を振り返ると、9月24日BC設営、25日よりルート工作を開始した。ルート工作は予想以上に順調に進

み、10月1日には第1次アタック隊がBCを出発した。さらに2日には第2次アタック隊が、3日には第3次アタック隊があいついで、それぞれBCを後にした。そのためキャラバン中に体調を崩した者は、体力の回復も高所順応も不十分のまま登頂体制に入ってしまったのが原因の一つと推察する。

遠征前の生理機能検査を比較検討すると、心肺胸郭比は全員45%以下で心肥大の所見なく、肺機能も年齢による予測値以上であった。分時最大酸素摂取量は一応の目安とされる50ml/min/kg以上の者は4名にすぎなかった。また嫌気性代謝閾値(AT)は乳酸の蓄積が開始される時点を示し、持久力の限界を意味している。このAT値は一般にトレーニングをしていない者では最大酸素摂取量(VO_2max)の50~60%に相当するが、持久力トレーニングを積んだ者では85%にも達すると云う。ATとその VO_2max に対する比をみると、初回成績は登頂者では1.955 l/min(51.8%), 1.777 l/min(52.0%), 1.952 l/min(60.0%), 2.008 l/min(75.1%)であった。一方登頂出来なかった者は1.472 l/min(47.3%), 1.985 l/min(55.7%), 2.170 l/min(64.7%), 1.597 l/min(46.7%)であった。AT値の VO_2max に対する比が50~60%の者が5名、50%以下の者が2名おり登頂できなかった。また60%を越えるものは3名に過ぎなかった。出発直前と比較すると変化の見られないものと、増加した者がいた。この成績で見ると本遠征隊はトレーニングを積んだ者の集団とは言い難い。

トレーニングとしては遠征に参加する少なくとも1年前から、1回に30分以上の全身の持久性運動(ジョギング、水泳、サイクリング等)と筋力トレーニングを、週3回程度継続することが必要であると云われている。持久性トレーニングは心肺機能を亢進し最大酸素摂取量及び嫌気性代謝閾値を向上すると共に、総コレステロール低下、HDL上昇、収縮期血圧並びに拡張期血圧を低下する。

持久性トレーニングの方法については、心拍数120~140/min程度の運動強度で行う。これは最大酸素摂取量の約60%の運動強度に相当し、1回心拍出量がプラトー値に達した状態である。この運動強度では筋組織への酸素供給が円滑でミトコンドリア内でのTCA回路でのエネルギー生成に依存し、解糖代謝(嫌気性代謝)が抑制されているので乳酸が産生されない。従って長時間(30分以上)の運動継続が可能である。エネルギー源としては脂質が主に利用されるようになり、筋組織としては遅筋(赤筋)の参加が主となる Long Slow Distance の運動形態で呼吸循環系機能の向上には最適である。

浅野(1990)によると、登山に対しての体力には行動体力と防衛体力の二つが揃ってなければならないという。一般の体力測定で測られるのは行動体力であり、防衛体力はストレス耐性であり、生物的、生理的及び精神的ストレスへの耐性を意味する。高所登山では特に高いストレス耐性が要求される。防衛体力は、持久性トレーニングの継続による行動体力の向上に付随して向上する。これはトレーニング刺激が視床下部を介しての下垂体副腎系反応の適応によるものと解される。また抗利尿ホルモン(ADH)分泌の低減化もみられ、肺水腫や脳浮腫等の高山病の予防にも寄与する。

この度の遠征では持久力に欠ける者がみられ、登頂者が少なかった原因もトレーニング不

足を否定できない。トレーニングの効果は一朝一夕に現れてくるものではないので、高所登山を目指すものは日頃から持久性トレーニングに励み、特に遠征1年前から計画的にトレーニングを行うべきと考える。

高所順応は主として換気量の増加、赤血球及びヘモグロビンの増加によると云われている。しかし、そのために登山活動中にヘモグロビンを測定するのは現実的でない。今回の遠征前に赤血球及びヘモグロビン増加の指標となるフェリチンを測定しなかったことが悔やまれる。

近年、パルスオキシメーターによる動脈血酸素飽和度(SpO_2)が簡便に測定できるようになり、装置も小さくなり、臨床のみならず高所登山にも応用されるようになってきた。沖合峰雄ら(1990)、出水明(1991)はいずれも高所順応により SpO_2 の上昇をみたし報告している。我々も高所順応の指標とすべくPulsox-5(ミノルタ製)を用いて SpO_2 を測定した。しかしキャラバン中は測定記載がほぼ行われていたが、BCに入り登山活動の開始後は記載が殆どなされなかった。そのため今回はキャラバンを開始しBCに到着するまでと、BCでの到着時と撤収準備でカルカへの移動の前後と撤収時について記載のあった成績のみを比較するとどまった。今回の成績では SpO_2 は高度と共に変化し、高所順応の指標とはならなかった。その一因として我々の高所での滞在期間が他の報告よりも短かったことをあげることが出来る。

急性高山病重症度自己判定スコアに関しては、急性高山病を発症した者がスコアを記載しておらず検討出来なかった。またキャラバン中に発熱をした者が、その影響で高いスコアを3日間示した。

各種疾病の予防に気を遣ったが、今回肝機能障害が2名に発生し、うち1名はE型肝炎であることが判明した。他の1名については精査の結果、C型肝炎と診断された。今回、発病時期が帰りのキャラバンと帰国後だったことがせめてもの幸いであった。

まとめ

従来高所登山に対する体力の指標として最大酸素摂取量が重要視されてきたが、登山のよる Long Slow Distance の運動では嫌気性代謝閾値が体力の指標として有意義であると考えられる。

高所登山を目指すものは普段から持久性トレーニングに励むべきであり、その結果行動体力のみならず防衛体力も向上する。

高所順応の指標としての SpO_2 は今回のような短期間では明かな変化を認めなかった。

稿を終るにあたり、医学検査について札幌鉄道病院循環器内科安藤利昭主任医長、遠藤利昭主任医長、堀田大介医長に大変お世話になり深甚なる謝意を表します。また多忙の中を献身的に最大酸素摂取量測定や嫌気性代謝閾値測定をして頂いた札幌鉄道病院中央検査室林謙、神由美、市川満、安田いづみ技師に感謝致します。また快くエアロモニターを貸し出して下さったミナト医科学株式会社に感謝致します。

文献

- 浅野勝己：登山医学，10，29-38.1990
- 沖合峰雄他：登山医学，10，91-98.1990
- 出水明：ヒマラヤ学誌，2，65-73.1991

ヒムルンヒマール周辺の地形地質

戸田英明

ヒムルンヒマールはペリヒマール山群に位置する。ペリヒマールは8000m以上の高峰を抱くマナスルヒマール、アンナプルナヒマールの北側に位置している。所謂ジャイアントピークを抱く山群についてはこれまでに多くの地質地形調査がなされているが、今回我々がキャラバンでトレースしたマルジャンディ川最上流部は外国人が立ち入ったことがほとんどない。そこで今回簡単ではあるが、ホンデ(Hongde)からカン・ラ(Kang La)、ナル・コーラ(Nar Khola)、ヒムルンヒマール周辺の地形地質の概要を報告する。

地形

ヒムルンヒマール周辺は8000m峰を抱くヒマラヤ山脈主脈の北側に位置し、地形区分としてはヒマラヤ山脈主脈が高ヒマラヤ帯と呼ばれるのに対して標高3500m～5500mのチベットヒマラヤ帯にあたる。チベットヒマラヤ帯は夏のモンスーンの影響をあまり受けず、チベット高原とよく似た乾燥地帯である。

マルジャンディ川はアンナプルナ山群の北側では標高2000～3000m以上の高度を有し、ヒマラヤ山脈の主脈を横断する下流部と比べると河床勾配はあまり急ではない。また、川岸には下流部と異なり段丘も発達する。ただし、マルジャンディ川上流の段丘は一面だけ発達することが多く、氷河や土石流などのせき止めによって形成された湖により形成された可能性が高い。

カン・ラを越えてナルにかけては谷沿いにモレーンが発達し、現在は乾燥し氷河は後退しているが、かつては氷河に覆われていたと思われる。

ナルからナル・コーラのキャン(Kyang)にかけては河床からの比高約100mの段丘が発達し、川は急傾斜で段丘を刻んでいる。とくにナルからの道がナル・コーラを横断する箇所は幅20m以下で段丘を高さ50m以上侵食し、降雨による斜面の侵食作用がほとんどなく、もっぱら川の侵食により地形が形成されていると思われる。チャコとキャンの間にはモレーンがナル・コーラ付近にまで達している。

プーガウンの手前のナル・コーラにも幅20m以下で高さ約50m侵食された箇所が認められる。プーガウンから上流はモレーンがよく発達している。しかし、現在は標高約4500mよりも上位に氷河が形成され、ベースキャンプから上位では標高5000m以上で氷河が認められる。

地質

ヒマラヤの地質は山脈とほぼ平行に走る断層によって大きく四つの地質帯に分けられる(図-1)。ヒムルンヒマール周辺のチベットヒマラヤ帯は古生代～新生代古第三紀にかけ

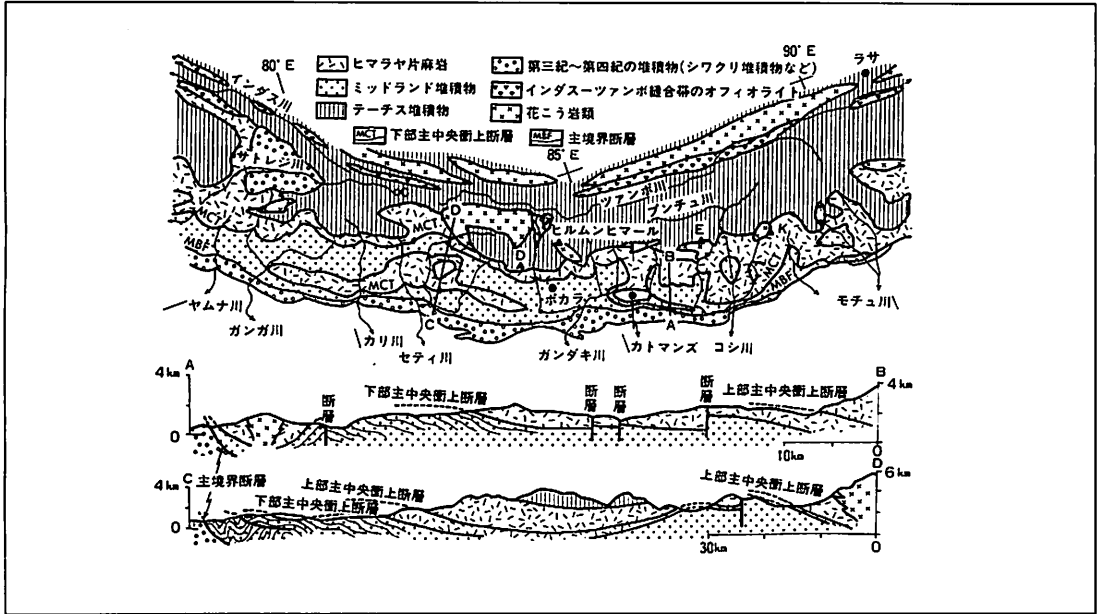


図-1 ヒマラヤ中部の地質概念図(上)と地質断面図(下) (在田, 1988を一部改変)
 E: サガルマータ(エヴェレスト), A: アンナプルナ, D: ダウラギリ

での堆積岩が主となるチベット層群(ターチス堆積物)が分布する。また、マナスルからヒマラヤにかけてはターチス堆積物中に花崗岩類が貫入しているとされている。これに対して8000m峰を抱く高ヒマラヤ帯の南部はヒマラヤ片麻岩と呼ばれる変成岩類が分布している。

ヒマラヤ山脈はインド半島がユーラシア大陸側にもぐり込む形で衝突して形成されたと考えられる。ヒマラヤ片麻岩と南側のミッドランド堆積物の境界をなす主中央衝上断層(MCT)やミッドランド堆積物とシワクリク堆積物の境界でタライ平原の北限に走る主境界断層(MBF)も大局的に北側に傾斜している。

ターチス堆積物はインド半島とユーラシア大陸の間に広がるターチス海に堆積したと考えられている。ターチス堆積物は部分的に大きく褶曲しているが、大局的には北に傾斜している。ヒマラヤの北限とされているインダス川上流とツァンボ川沿いのインダス-ツァンボ帯には堆積岩とともに深海底に分布する枕状溶岩やチャート(オフィオライト)が分布しており、ターチス海の海洋底と考えられている。

ホンデ(Hongde)からヒムルンヒマールにかけては泥岩砂岩からなるターチス堆積物が広範囲に分布している。この地域のターチス堆積物は大きく褶曲している。ベースキャンプの上部にはアンモナイトの化石が発見され、中生代に形成されたと考えられる。

カン・ラの北側には枕状溶岩などの緑色岩が認められ、ターチス堆積物に挟み込まれているものと考えられる。ナルからキャンにかけてはターチス堆積物中に堆積構造とほぼ平行に電気石花崗岩が何層にも貫入しているのが観察される。ナル・コーラの花崗岩の露頭の対岸の転石から、貫入されたターチス堆積物は角閃岩相の変成作用を受けたと考えられる。

ヒムルンヒマールからネムジュン、ギャジカンからの氷河の下部に広がるモレーンはほとんど真っ白な電気石花崗岩からなり、ヒムルンヒマールから南部の山稜には花崗岩が広く分布しているものと考えられる。マナスルからヒムルンヒマールを経てラトナチュリ周辺のチベット側にまで花崗岩が分布すると考えられていた (Hashimoto et al, 1973など)。しかし、プー・コーラ本流にはほとんど花崗岩の転石が認められず、ベースキャンプ周辺もチベット層群が分布している。このため、ヒムルンヒマールの北側には花崗岩はあまり分布していないと考えられる。

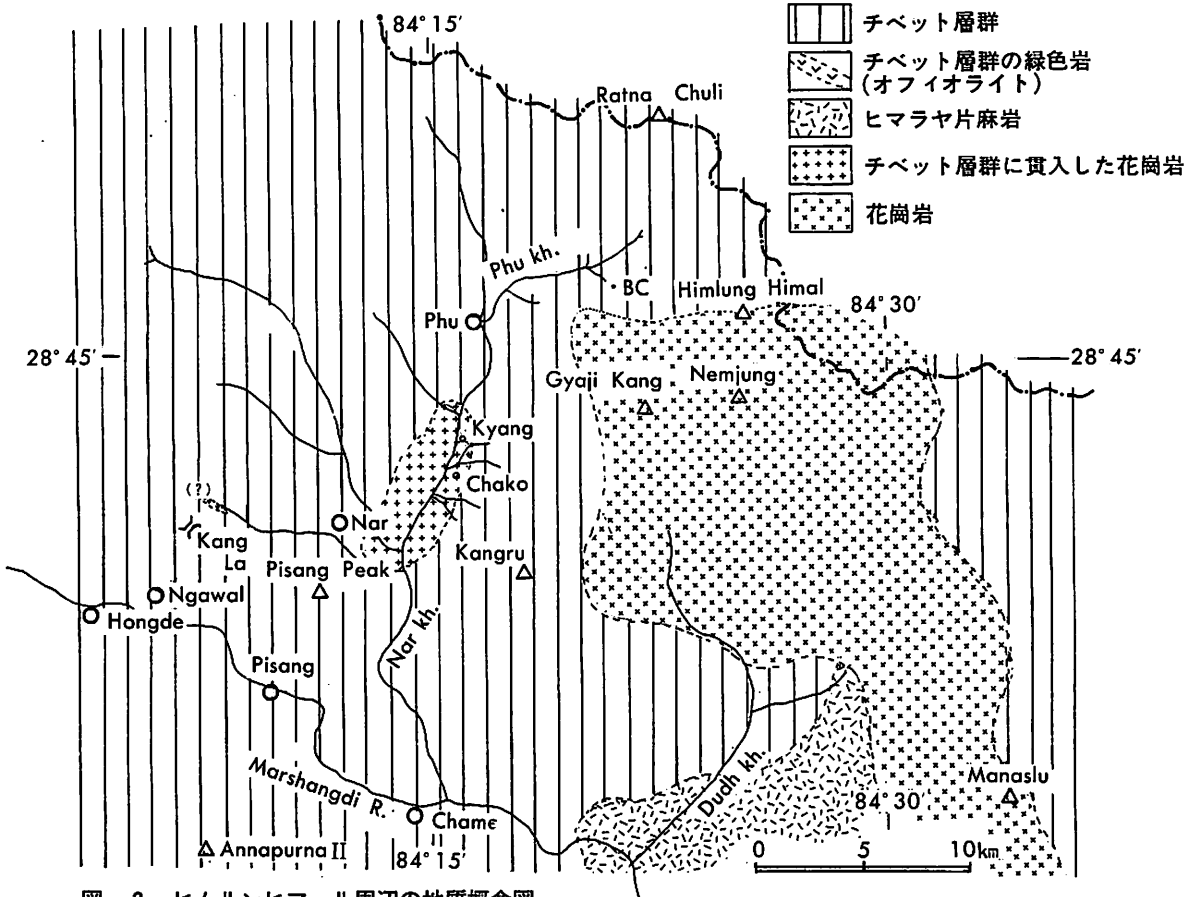


図-2 ヒムルンヒマール周辺の地質概念図。

参考文献

在田一則(1988)：ヒマラヤはなぜ高い，青木書店，172p.

Hashimoto, S., Ohta, Y. and Akiba, C.(Ed.)(1973):Geology of the Nepal Himalayas, Himalayan Committee of Hokkaido Univ.,286p.

木崎甲子郎(編)(1987)：上昇するヒマラヤ，築地書館。

1992年ネパール事情

樋口 和生

ネパール国内の渉外

石橋隊員と2人、先発隊として本隊に先がけてネパール入りし、エージェントとともに隊荷の通関、トランシーバー使用許可の取得、装備及び食糧の現地調達品の調査を行なった。本隊到着後も丹羽隊長とともに渉外活動を担当したため、その間の事を雑感ふうりにここに記すことにする。

1. エージェント

今回は、北大山の会会員で国際協力事業団の専門家として当時カトマンドゥに滞在されていた山田知充氏の推薦により、現地のエージェントとしてGuides For All Seasons (以下GFAS) を使うことにした。

GFAS代表のJ.P.Lama氏は、日本の学術調査隊のエージェントとして長年の実績があり信頼できる仕事をしていること、山田氏と親しく、ある程度こちらの融通をきかすことができることを考慮して契約することとした。

契約料は、トレッキングパーティーも含めた隊員1人当り\$100(実費別)の計\$1400であった。

GFASはトレッキングの手配は数多く行なっているものの、登山隊を扱うのは初めてということで、我々の隊に参加したスタッフのうち、サードとクライミングポーターの1人は経験者を外部から呼んできていた。そのため、GFASの常勤スタッフと非常勤スタッフとの間のコミュニケーションにやや問題があった。しかし、細かい注文にもよく応じてくれ、全体的なエージェントの評価としては「優」をあげても良いだろう。

参考のため、スタッフ、リエゾンオフィサーに支払った1人当りの料金と保険料を以下に記す。

| | 雇用数 | 装備費 | 日当 | 保険料 |
|-----------|-----|-----------|--------|-------------------------------|
| サード | 1 | Rs 43,000 | Rs 150 | Rs 7,500 (補償額 Rs 150,000の5%) |
| 高所ポーター | 2 | Rs 43,000 | Rs 150 | Rs 5,000 (補償額 Rs 100,000の5%) |
| コック | 1 | Rs 38,000 | Rs 150 | Rs 275 (補償額 Rs 55,000の0.5%) |
| キッチンボーイ | 2 | Rs 33,000 | Rs 120 | Rs 275 (補償額 Rs 55,000の0.5%) |
| マイルランナー | 2 | Rs 33,000 | Rs 120 | Rs 275 (補償額 Rs 55,000の0.5%) |
| リエゾンオフィサー | 1 | Rs 50,000 | Rs 200 | Rs 10,000 (補償額 Rs 200,000の5%) |

2. 通関

登山隊が装備等を別送手荷物で送った場合、ネパール国内で最も手間取る問題として通関がある。ネパール政府が通関規定を毎年のように変更するという事情もあって、通関ばかりはふたを開けてみなければわからないといったところであろう。

したがって、過去の登山隊の報告がすぐに役立つというわけにはいかないが、今回の通関にまつわる事をここに書くことにする。

①別送手荷物の通関

第1段階は、Airway Bill、Invoice、Packing Listのコピー各3部にエージェントの申請書を添えて観光省へ持参し、登山隊の隊荷であるという推薦状を申請する。

観光省の推薦状と上記の書類を通産省へ持参して輸入許可証を申請するのが第2段階。輸入許可証が公布されると、それを持って空港にある保税倉庫に書類一式を持参し、輸入税を払ってようやく隊荷を引き出すことができる(第3段階)。各段階には少なくとも1～2日必要である。

今回は6日間で通関を済ますことができたが、ネパールの状況を考えると非常にスムーズに事が運んだと言えよう。

日本で得た情報では、輸入品総額の25%の税金がかかるとのことであったが、今回は11%の課税で済んだ。

また、登山活動終了後、出国時に非消耗品の税金の還付申請を行なったが、ほぼ申請通りに還付された。

通関関係の仕事がスムーズに運んだ理由として、エージェントの有能さが第1にあげられるが、役人への袖の下の効力が大きいことは否めない。民主化されたとはいえ、役人の体質がすぐ変わるわけもなく、袖の下を渡さなければ仕事がいづ終わるとも知れず、役人の要求に従わざるをえないのが現状であろう。非常に残念なことである。

②トランシーバーの通関と使用許可

今回の登山隊では、ICOMのFM144MHzトランシーバーIC-P2を4台使用した。4台とも先発隊が手荷物として持参し、入国の際、空港の税関にて申告せずに持ち込んだ。このことによるトラブルはほとんどなかったが、使用許可取得時に担当役人に賄賂を要求された。

許可取得手続としては、エージェントの申請書とトランシーバーの仕様書を添えて観光省に通信省宛の推薦状を申請する。観光省の推薦状を通信省に持参し、ライセンス料として\$75を銀行に振り込んだ際のパンクレシートを添えて申請するとすぐに使用許可を得ることができた。

通常は、入国時に空港税関でトランシーバーを持ち込んだ旨申告し、パスポートにT.B.R.E.(Tourist Baggage Re-Export)の番号が記され、出国時に持ち込んだものと

その数量が記載され、出国時に揃っていないとトラブルの原因となる。

3. ポーターの保険

往路121名のポーターを雇ったが、保険は無記名式のを70名分掛けた。

内容は、死亡時の補償額が5万ルピーのもので、掛金は補償額の0.5%であった。

観光省に出した登山申請書に記載したポーターの人数分の保険証書がなければ登山許可が出ないため、70名分の保険を掛けたが、それほど多くのポーターが一度に事故に会うことはまず考えられないため、常識の範囲内で少なめにポーターの数を申請しておけば、経費の節約になるであろう。

4. ポーター派遣業

人材派遣業を生業としようとする人は世界中どこにでもいるようで、ネパールもその例外ではない。Porters For All Trekkers というのがその会社で、必要な人数と時期をいえばナイケ（ポーター頭）つきで派遣してくれる。

今回は、80名のポーターをカトマンドゥから連れていった。1人1日100ルピーで、会社側はそのうち5ルピーを手数料として受け取る仕組みになっている。外国人が雇うポーターの相場としてはかなり安いはずである。ポーターの質はあまり良くなかったが、ポーターストライキのような大きなトラブルもなくベースキャンプまでつけたことは評価して良いだろう。

カトマンドゥからのポーターの交通費はかかるにしても、結果的には安上がりであった。

5. カトマンドゥでの調達可能物品について

ひとむかし前までとは違い、登山用具に関する限り、カトマンドゥでは何でも揃うと考えて良い。新品の装備や質の良い中古品がタメルの登山用具店を中心に回っている。

個人装備、テント、医薬品くらいを日本から持参すれば、あとはほとんど揃ってしまう。

日本からの別送品にかかる費用や手間を考えると、現地で揃える方が楽かも知れない。

ただ、数量や質はシーズンによって左右されるため、エージェントを通して事前に調べてもらうか、先発隊がこの任に当たるか揃わない場合の対処方法を考えておけば良い。

登山用具のレンタルも以前より質の良いものが増えている。驚いたのは、ガモウバッグのレンタル会社まであることだ。実物は見なかったが、質の良いものが借りられるのであれば、現地でレンタルした方が経済的であろう。

Useful Address

1. Guides For All Seasons (Mr. J.P.Lama Sherpa)

P.O.Box 3776, Kathmandu, Nepal TEL 419035, 415841

FAX 416047

2. Himalayan Travel & Tours Pvt. Ltd.

P.O.Box 324, Durbarmarg, Kathmandu, Nepal TEL 223045

FAX 224001

帰国時の別送品の手配を依頼。ビジネスライクで気持ちの良い仕事をしてくれる。

3. Mr. Prabhat B.Shrestha

P.O.Box 5080, Kathmandu Nepal TEL 221211, 229193

FAX 229380

隊の記念に作ったカーペットの輸出手続を依頼。（カーペットを大量に持ち帰る場合は、輸出手続が必要となる。）

日本からのFAXのやりとりで、紅茶や民芸品の輸出代行も行なってくれる。



IV章 資 料

食糧

1. 基本方針

食糧は、C1～C3での高所食、キャラバン・ベースキャンプ（BC）での低所食の2つに大別し、高所食は砂糖、飲料、ビスケット等、現地購入できるもの以外は日本国内で調達し、低所食は現地食を主体とすることとした。

高所食は隊の荷上げ能力を考慮した上、1人1日1kgを目安とし、高カロリー・高タンパク（登山には1人1日3500kcal、タンパク質80gが必要とされる）、軽量であること、簡単に調理できること、変化に富んだ内容であることの4点を基本に計画を立てた。

水分の補給は1人1日3～4ℓを目標とし、これを満たす飲料を用意した。

2. 実際の内容

①キャラバン・BC

アンナプルナ街道は宿泊施設がよく整備されており、カン・ラを越えたナル以降を除いて、ほぼロッジに泊まったが、コックはロッジのキッチンを借りて料理したので、すべてコックの手による食事を食べることになった。

朝は紅茶と卵料理・ミルクポリッジまたはパン・パンケーキなど、昼はチャパティまたはビスケット・チーズ・リンゴ・ゆで卵を各自携帯、夜は3～4品で、各種スープ・白米・フライドライス・トックパ・チョウメン・モモ・タルカリなどであった。

今回のコックは欧米のトレッキングパーティーの経験が多く、カレーの味付けも辛くなく、また、ピザやケーキなどを焼いてくれ、変化に富んだ食事を提供してくれた。

帰りのキャラバンでは、高所の活動が短くな

ったため、余った日本食、お茶漬け、ふりかけ等に人気が集まった。キャラバン途中からは朝におかゆを出すようになり好評だった。ミルクポリッジはやはり不評であった。

また、ポーター達は各自薪を集めて火を起こし、ダルスープやタルカリ、ツァンパなどの食事をとっていた。

②高所食

主食はアルファ米を主体とし、他にラーメン、スパゲティ、モチ等を用意した。

ラーメンは高所での戻りの良さを考え、東洋水産寄贈のカップラーメンの中味を使用した。主食の量を表に示したが、隊員の年齢構成を考えると若干多く、1割から2割減らすのが適当であった。タンパク源としてはホクレンに依頼して作成したレトルト牛肉、日本SPF豚協会寄贈のフリーズドライ豚肉、日本農産工業寄贈の乾燥ヨード卵等を用意し、いずれも隊員達には好評であった。また、行動食としてのチーズ、サラミ等を用意した。

調理の簡単なレトルト食品、フリーズドライ食品を使用した。隊員各自が手を加えて楽しく食事ができるよう、各種調味料や嗜好品も各キャンプに配置した。

軽量化は今回特に重要な点ではなかったが、調味料類に粉末を利用し、乾燥野菜等を利用すると、自然と1人1日1kgに収まった。パッキングは4人・4日分及び3日分を基本とし、2人用も組み合わせ合わせてレーションバックした。

高所での滞在日数が予定の半分以下と短くなったため、食糧が相当余り、高所食の過不足については判断できないが、チョコレート、アメ、ようかん等は、活動が長引いた場合不足したと思われる。高所での食事に関しては特に不満は

出なかった。

3. 全体を通じて

ネパールではトレッキングが盛んに行なわれており、特に欧米人がコック、ポーターを引き連れて歩いている姿を何度も目にした。そのため、コックが作る料理も彼らを意識して辛さを抑えた料理で、ネパール料理以外のメニューを作ることができ、我々にも食べやすく、バラエティーに富んでいた。キャラバン中やBCで我々が食事に関して口うるさく言うこともなくコックに任せていられたのもそのためであった。しかし、そのためばかりではないが、弊害として、キャラバン中の現地調達食糧の把握が行き届かず問題点を残した。

カトマンドゥで購入した食糧のうち、野菜類の一部が腐ってしまったが、イモや玉ねぎ等、保存の利く食糧以外はキャラバン途中の村々随時購入すべきであった。

国内調達分の大半は、数社のメーカー及び個人から寄贈いただいた現物でまかなうことができた。

本報告を終えるに当たり、それらのご好意に対し改めて心より御礼申し上げます。(石橋英二)

食糧リスト 国内調達分

| 品目 | kg キャラバン B.C.用 | kg C1~C3 用 | |
|----------------|----------------------|------------------|-------------------------|
| 主食類 | | | |
| アルファ米 | | 30.8 | |
| ラーメン | 10.0 | 4.5 | カップメンの中身を使用 |
| スパゲティー | | 3.0 | |
| もち | | 3.8 | |
| ビーフン | 7.0 | 1.5 | |
| ホットケーキ ミックス | 3.0 | 2.0 | |
| 冷麦 | 7.2 | | |
| マッシュポテト | 4.5 | 1.5 | |
| 副食類 | | | |
| 乾燥肉 | 28 | | スライス肉、ひき肉の2種 |
| レトルト牛肉 | 37.5 | 11.5 | 本寮のレトルトパック、 ホフレンにて作製 |
| FD納豆 | 0.36 | 0.4 | 市販品使用 |
| FDすき焼 | | 0.6 | |

| 品目 | kg キャラバン B.C.用 | kg C1~C3 用 | |
|---------------|----------------------|------------------|--------------------------|
| 釜飯の素(レトルト) | 0.4 | 0.4 | 市販品使用 |
| ミートソース(缶詰) | | 1.2 | |
| まぜりゃんせ | | 0.13 | |
| マーボ豆腐の素(レトルト) | 0.5 | 0.5 | |
| ちらし寿司の素(レトルト) | 0.625 | 0.625 | |
| 粉末味噌汁 | 1.58 | 0.88 | |
| 中華スープの素 | | 0.4 | |
| ワカメスープ | 0.2 | 0.15 | |
| カップスープ | | 0.6 | |
| 粉末卵 | 0.6 | 0.9 | |
| 漬物 | 3 | 2 | |
| FDひじき | 0.14 | 0.2 | |
| FDきんぴら | 0.035 | 0.2 | |
| FD切り干し大根 | 0.06 | 0.2 | |
| 高野豆腐 | 0.1 | 0.2 | |
| 味付海苔 | 5枚パック×40 | 5枚パック×20 | バセリ、シラス、エビ、 ほうれん草、三ツ葉 |
| 乾燥野菜ほか | 10.0 | 5.0 | |
| 味付け類 | | | |
| カレールー | 0.6 | 0.6 | |
| お茶漬 | 0.4 | 0.1 | |
| ビーフシチューの素 | 0.1 | 0.2 | |
| クリームシチューの素 | 0.2 | 0.2 | |
| ふりかけ | 0.4 | 0.1 | |
| 雑炊の素 | | 0.2 | |
| 酢豚の素 | 0.15 | 0.15 | |
| 八宝菜の素 | 0.1 | 0.1 | |
| 中華丼(レトルト) | | 0.8 | |
| 粉末しょうゆ | 0.8 | 0.4 | |
| だしの素 | 0.8 | 0.4 | |
| 調味料 | | | |
| ラー油 | | | 小一瓶 |
| 七味 | 0.12 | 0.12 | |
| コショウ | 0.075 | 0.05 | |
| さんしょ | | 0.05 | |
| ガーリック | | 0.12 | |
| バター | 2.5 | 2.5 | |
| ねりわさび | 0.16 | 0.16 | |
| ねりからし | | 0.16 | |
| おろししょうが | 0.32 | 0.08 | |
| おろしにんにく | | 0.16 | |
| コンソメ | 0.6 | 0.3 | |
| すりごま | 0.18 | 0.18 | |
| 天ぷら油 | 0.5 | | |
| ごま油 | 0.2 | | |
| ドライイースト | 0.05 | | |
| 干し椎茸 | 0.1 | 0.1 | |
| 乾燥ワカメ | 0.24 | 0.16 | |
| 桜エビ | 0.04 | 0.04 | |
| キラゲ | 0.15 | 0.15 | |
| 梅干し | 2.0 | 1.0 | |

| 品目 | kg | | |
|----------------|----------------|------------|-------------|
| | キャラバン B.C.用 | C1~C3 用 | |
| お茶類 | | | |
| コーヒー | 1.0 | 1.4 | |
| 緑茶パック | 1.0 | 0.56 | |
| ウーロン茶パック | 0.9 | | |
| 麦茶パック | 0.9 | | |
| ほうじ茶パック | 1.0 | 0.28 | |
| 昆布茶 | 0.1 | 0.1 | |
| クレーミング パウダー | 2.1 | 2.1 | |
| コンデンスミ ルク | | 1.4 | |
| ココア | 2.8 | 2.8 | |
| スポーツドリ ンク | 9.0 | 6.0 | |
| 嗜好品 | | | |
| ゼリー | 1.0 | 0.5 | |
| プリン | 0.8 | 0.4 | |
| ホイップクリ ーム | 0.13 | 0.13 | |
| フルーツ缶詰 | 3.0 | 2.0 | |
| チーズケーキ の素 | | 0.26 | |
| 白玉粉 | 0.45 | | |
| 小豆あん | 1.4 | | |
| 生味噌 | 4.0 | | |
| とうばんじゃ ん | 1瓶 | | |
| 山芋の粉 | 0.1 | | |
| すしのご | 0.45 | | |
| チャーハンの 素 | 0.3 | | |
| ほんとうふ | 0.52 | | |
| 豆菓子 | 3.0 | | |
| ようかん | 2.0 | | |
| 行動食 | | | |
| チョコレート | 6.0 | 1.4 | |
| チーズ | 5.8 | 2.8 | |
| 干し魚 | 5.0 | 1.4 | |
| ナッツ類 | 5.0 | 1.4 | |
| ミニサラミ | 5.8 | 2.8 | |
| 計 | 189.135kg | 109.495kg | 総計 298.63kg |

食糧リスト 現地購入分

| 品目 | カトマン ドゥ | キャラバ ン往 B. C. | | |
|--------|------------|---------------------|-------|-------------------|
| | | キャラバ ン復 | | |
| 米 | 350kg | | | |
| マイダ | 240kg | | | |
| ビスケット | 60kg | | 3.6kg | 内C1~C3用22.4 kg |
| トゥクパ | 84kg | | | |
| マカロニ | 60袋 | | | |
| オートミール | 10袋 | | | |
| パン | 20斤 | | | |
| ラーメン | 180袋 | | | |
| 砂糖 | 170kg | | | 内C1~C3用14kg |
| 塩 | 10kg | | | |
| 粉ミルク | 50kg | | | |

| 品目 | カトマン ドゥ | キャラバ ン往 B. C. | | |
|---------------|--------------|---------------------|-------|-----------------------------------|
| | | キャラバ ン復 | | |
| 紅茶 | 32.5kg | | | 内C1~C3用1.4kg |
| 油 | 6缶 | | 1缶 | |
| カレーパウダー | 1.2kg | | | |
| コーヒー | 2kg | | | |
| ベーキングパ ウダー | 2kg | | | |
| 味の素 | 1.2kg | | | |
| バター | 18kg | | | |
| トマトソース | 6瓶 | | | |
| チリソース | 6瓶 | | | |
| ソヤソース | 10瓶 | | | |
| 酢 | 6瓶 | | | |
| ブラックペパー | 2.25kg | | | |
| マヨネーズ | 10瓶 | | | |
| 粉末スープ | 60袋 | | | |
| ジャム | 10瓶 | | | |
| 蜂蜜 | 10瓶 | | | |
| ピーナツバター | 10瓶 | | | |
| チーズ | 25.35kg | | | |
| ツナ缶詰 | 60缶 | | | |
| グリーンピース 缶詰 | 20缶 | | | |
| ダル | 45kg | | | |
| フルーツ缶 | 46缶 | | | |
| マッシュルー ム缶詰 | 20缶 | | | |
| 卵 | 1,420コ | 38コ | | |
| じゃがいも | 60kg | 83kg | 37kg | 内 B.C.よりプ ー ガウン買出し分35 kg |
| にんにく | 10kg | | | |
| しょうが | 17kg | | | |
| キャベツ | 16kg | 12kg | | |
| にんじん | 12kg | | | |
| カリフラワー | 15kg | | | |
| グリーンピー ス | 7kg | | | |
| 大根 | 10kg | | | |
| 中国菜 | 3.5kg | | | |
| レタス | 2kg | | | |
| 玉ねぎ | 80kg | 8kg | | |
| トマト | 20kg | | | |
| トウガラシ | 3kg | | | |
| レモン | 3kg | | | |
| マサラ | 2kg | | | |
| カボチャ | 2kg | | | |
| リンゴ | 39kg | | | |
| 肉(羊、ヤギ) | ヤギ1頭 +8kg | 10kg | | ヤギ1頭はダサイ ン用 |
| 肉(ヤク) | 10kg | | | B.C.にて |
| にわとり | 5羽 | 5羽 | | |
| ロキシー | 69ℓ | 59ℓ | | |
| ビール | 0.65ℓ | 18.2ℓ | | |
| 小計(約) | 1.5t | 0.25t | 0.15t | 総計 1.9t |

装 備

1. 個人装備

国内で普段用いている冬山個人装備を各自用意し、それで充分だった。羽绒服があればBC滞在時重宝した。スキーは持参せず、ワカンは3人分持参したがこれらは不要であった。各自にステンレス製水筒(0.47ℓ)を用意したが現地ではポリタンク(1ℓ)を愛用する者が多かった。リチウム電池ヘッドランプ(松下電器から現物寄贈)を全員が使用した。これは軽量化に有効で低温時の使用に信頼性が高いと思われた。今回、C1以上の行動では各自になだれ搜索器(ビーコン)の着用を課した。使用は幸運にもなかった。

2. 登攀装備

緩傾斜の雪面のルートを想定して計画した。ただし未知のルートであることを考慮にいった。

フィックスロープはダンライン(9mm径)を計2600m用意したが実際にルートで使用、残置したのは計150mであった。クライミングロープはナイロンロープ(9mm径)を150m分用意したが、50m分フィックスロープとして使用した以外はルートで必要とする箇所はなかった。

支点類はスノーバーのみ用いた。スノーバーはアルミアングル材(3mm厚)を40×40×650mm、穴8mm径に加工したものである。有効に効いていたが、重いのが難点であった。他にも合板で作成したスノーアンカー、アイス、ロックハーケン類を持参したが使用はなかった。滑車、ワイヤーバシゴ、脚立も同様、ルートの性質上、使用はなかった。

アイスハンマー、バイルは計4本そろえたが雪上支点の設置に用いた以外に有効な使用はなかった。

上部には広い雪原が多く、そこでは目印に竹のデポ旗を多く設置した。竹はキャラバン途中の村々で購入してきた。

3. 露営装備

高所テントとして、ICIスタードームテント(ゴアテックス、外張付き、4~5人用)を使用した。又、BCでの隊員の食堂用、集合場として家型大型テントをカトマンドゥで購入した。他、キャラバンやBCでの隊員用テントは10人用大型テントを1つ日本で購入した他、個人のものでできるだけ持参し、リエゾン、高所ポーターを入れて足りない分はカトマンドゥで中古品を購入した。

当初雪洞を掘ることを考え、ノコ、スコップを用意したが殆ど使わなかった。

ストーブ類はキッチン用として大型の現地製品(インド製)を購入した。これらの予備キットはまとめて購入できる。日本からは石油ストーブ(マナスル)2台とEPIガスストーブ(APS型コンロ)を用意した。上部キャンプではEPIガスストーブを使用し、快調だった。ガスカートリッジは一度に買える数は限られるがカトマンドゥで購入可能である。今回は、事前から現地にいるOBの山田知充氏に購入を頼んでおいた。不良品があるので多めに購入しておいた方がよい。

石油は350ℓ用意し、妥当な量であったと思われる。ローソクが終盤不足した。

ブルーシートはキッチン用、デポキャンプ用のフライシートとして用途が多様であった。

炊事用具類は全面的にシェルバのキッチンスタッフの意見を取り入れたが、余分と思われるものがあったり、買いすぎの感があった。

4. その他の装備

梱包材はブラパール(4mm厚)を用い、320×550×850mm、320×430×550mmの2種のボックスを各20ケ用意し、内箱用ダンボール箱310×540×210mmのものを50ケ用意した。ブラパールは

かなり手荒く扱われるのでもう少し丈夫なものが良かった。又、ブルーシート袋を作り、持参したが、細かいものをまとめたりするのに何かと便利だった。他、カトマンドゥで麻袋、ドッコ、しよいこを購入した。梱包バンド、ガムテープは余分にあった方が良かった。バネバカリはカトマンドゥで購入可能だが、壊れやすいので予備が必要である。

通信の為の無線器はアイコムIC-P2(144MHz)を4台使用した。軽く、コンパクトで性能が良く使い易かった。

又、今回ガモウバックを日本国内でレンタルし、BCに常置した。軽い高山病症状の者1名を中に入れて1時間試してみた。その者は後に回復し、無事頂上に立ったが、その効果の程は分からないと言う。使用の際に周りの者が使用法をよくマスターせずにいきなり封を開けたため、本人は鼓膜が破れるかと思っただけ、その痛みが印象に残ったと言う。

酸素ボンベは200気圧のものを3本カトマンドゥで購入(1本\$300)し、救急用として持参した。レギュレーターもカトマンドゥで購入(一式\$300)した。

他、購入し忘れたネパール国旗を、カングルー登頂を終えた旭川山岳会からキャラバン途中で借用した。

リエゾン、高所ポーターへの支給品はテント以外は現金として払った。ポーターへの支給品はない。(斎藤清克)

登攀具

| | |
|------------------------------------|---------|
| 1. フィックスロープ (9mm径ダンライン200m) | 13 (2) |
| 2. クライミングロープ (9mm径ナイロン50m) | 3 (1) |
| 3. シュリンゲ (6mm径ナイロン1.5m) | 60 (60) |
| 4. テープシュリンゲ (15mm幅ナイロン1.5m) | 30 (30) |
| 5. アイスハーケン (棒型、スクリュウ型) | 30 (0) |
| 6. ロックハーケン (各種) | 20 (0) |
| 7. スノーバー (前述) | 40 (30) |
| 8. スノーアンカー (合板で作成、 200×200×5mm) | 20 (10) |
| 9. アイスハンマー (うちバイル2本) | 4 (2) |
| 10. 滑車 | 3 (0) |
| 11. ユマール (ベツル) | 13 (13) |
| 12. カラピナ | 80 (40) |
| 13. ハシゴ兼キャタツ | 1 (0) |
| 14. ワイヤーバシゴ (既製品) | 1 (0) |
| 15. ストック (杖、ラッセル用) | 4 (4) |
| 16. ワカン | 3 (0) |
| 17. アブミプレート | 12 (0) |

露營具

| | |
|------------------------------------|-----------|
| 18. 高所用ドーム型テント (ICIスタードーム4-5人用) | 4 (4) |
| 19. ドーム型テント10人用 | 1 (1) |
| 20. ドーム型テント4人用 | 2+2 (2+2) |
| 21. ドーム型テント1~2人用 | 5 (5) |
| 22. BC用家型大型テント* | 1 (1) |
| 23. スーパーツェルト | 3 (3) |
| 24. ブルーシート* | 5 (5) |
| 25. 断熱シート | 14 (14) |
| 26. スコップ (ジェラルミン製) | 3 (3) |

※ガモウバックレンタル先

(株) T.H.I.

〒101 東京都千代田区神田錦町3-13-1 矢浪ビル3F (03-3294-1211、Fax 03-2294-1210) レンタル料30日まで¥42,000、以降30日ごとに¥37,800、消費税別。

装備リスト

以下に装備リスト(共同装備)を載せる。実際使用したものは分かるようにカッコで示してある。又、カトマンドゥ及び現地購入物は*印で示す。

| | |
|--|-------------|
| 27.ノコ | 5 (3) |
| 28.たわし | 5 (5) |
| 29.キッチン用石油ストーブ (インド製) * | 6 (4) |
| 30.石油ストーブ (マナスル) | 2 (2) |
| 31.オイルフィルター | 2 (2) |
| 32.石油ポンプ | 3 (3) |
| 33.水用タンク (折り畳み式) | 3 (1) |
| 34.石油用ポリタンク(30ℓ) * | 12 (12) |
| 35.石油 * | 350ℓ (350ℓ) |
| 36.ガスストーブ (EPI,APS型コンロ) | 4 (3) |
| 37.ガスカートリッジ * (EPI,170g/day,人 として計画) | 52 (15) |
| 38.使い捨てライター | 50 (30) |
| 39.ローソク (終盤不足) * | 50 (50) |
| 40.コッヘルセット | 4 (4) |
| 41.メタ | 10 (5) |
| 42.スプーン * | 28 (28) |
| 43.プレート * | 28 (28) |
| 44.スープボール * | 26 (26) |
| 45.カップ * | 26 (26) |
| 46.ナベ類 * | 8 (8) |
| 47.ケトル * | 5 (5) |
| 48.フライパン * | 2 (2) |
| 49.モモ用蒸し鍋 * | 1 (1) |
| 50.圧力鍋 * | 3 (3) |
| 51.キッチンナイフ * | 4 (4) |
| 52.調理用小道具 * | 6 (6) |
| 53.カン切り * | 3 (3) |
| 54.チャパティ炊事道具 * | 2 (2) |
| 55.茶こし * | 4 (4) |
| 56.たらい類 * | 13 (13) |
| 57.石油ランプ * | 3 (3) |
| 58.ぼん * | 4 (4) |
| 59.テルモス (大, 中国製) * | 4 (4) |
| 60.テルモス (0.47ℓ, ステンレス) | 11 (11) |

| | |
|------------|-------|
| 61.水用タンク * | 4 (4) |
| 62.洗剤 * | 4 (4) |
| 63.ナブキン * | 8 (8) |

修理具

| | |
|----------------------------|---------|
| 64.キッチン用石油ストーブ 修理具キット * | 1 (1) |
| 65.石油ストーブ(マナスル) 修理具セット | 2 (1) |
| 66.ビニールテープ | 6 (3) |
| 67.ガムテープ | 10 (10) |
| 68.針金 (1.2mm×50m) | 1 (1) |
| 69.ドライバー | 2 (2) |
| 70.きり | 1 (1) |
| 71.プライヤー | 2 (2) |
| 72.やすり | 1 (1) |
| 73.接着剤 | 1 (0) |
| 74.釘, 木ねじセット | 1 (1) |
| 75.ビス, ナットセット | 1 (1) |
| 76.カッター | 3 (3) |
| 77.金のこ | 1 (1) |
| 78.リペアテープ | 3 (1) |
| 79.細引き (50m) | 1 (0) |
| 80.自在 | 6 (0) |
| 81.六角レンチセット | 1 (1) |

予備具

| | |
|--------------|-------|
| 82.アイゼン | 2 (0) |
| 83.アイゼンバンド | 2 (0) |
| 84.アイゼンジョイント | 2 (0) |
| 85.ピッケル | 1 (0) |
| 86.羽毛服 | 2 (2) |
| 87.高所帽 | 1 (0) |
| 88.ゴーグル | 3 (0) |
| 89.オーバーミトン | 2 (0) |
| 90.シュラフ | 2 (0) |
| 91.毛手袋 | 2 (0) |
| 92.ロングスパッツ | 2 (0) |
| 93.テントフレーム | 1 (0) |

その他

| | | | |
|---------------------------------|-----------|---------------------------|-----------|
| 94. 赤旗 | 60 (60) | 111. バネ秤(50kg用, 1台壊れる) | 2 (2) |
| 95. 竹 | 60 (60) | 112. プラパール | 40 (40) |
| 96. 無線器 | 4 (4) | 113. 段ボール | 50 (50) |
| 97. 高度計 | 2 (2) | 114. 梱包バンド (15mm×200m) | 2 (2) |
| 98. 双眼鏡 | 1 (1) | 115. ドッコ* | 45 (45) |
| 99. 温度計 | 4 (4) | 116. 麻袋* | 45 (45) |
| 100. ラジオ | 1 (1) | 117. 麻紐* | 5束 (5束) |
| 101. テープレコーダー | 1 (1) | 118. ブルーシート袋 | 20 (20) |
| 102. 電卓 | 1 (1) | 119. しょいこ* | 2 (2) |
| 103. パソコン, アダプター (カトマンドゥで使用) | 1 (1) | 120. 荷物札 (プラスチック) | 100 (100) |
| 104. 電池 (アルカリ単3) | 300 (100) | 121. 薬品類 | |
| 105. ポリ袋 (各種) | 1 (1) | 122. ガモウバッグ (レンタル) | 1 (1) |
| 106. トイレットペーパー (1人3ロール) | 42 (42) | 123. 酸素ボンベ (200気圧) * | 3 (0) |
| 107. ビデオカメラ | 1 (1) | 124. 酸素ボンベ レギュレーター* | 2 (0) |
| 108. 筆記具, 用紙類 | 1 (1) | 125. ビーコン | 9 (9) |
| 109. 輪ゴム | 5 (5) | 126. たいこ (娯楽用) * | 1 (1) |
| 110. 部旗 | 1 (1) | 127. ポーター用タバコ* (買いすぎ) | 540 (250) |

遠征隊日誌

1992年

- 8月15日 先発、樋口・石橋、千歳発。香港経由、カトマンドゥ着。
- 16日 観光省にて諸手続き開始。
- 21日 隊荷通関完了。トランシーバー使用許可証取得。
- 31日 小泉、ヨーロッパへ向け成田発。
- 9月 5日 丹羽・山口・花井・河合・戸田・清水・斎藤・佐藤、千歳発。益田、大阪発。木崎、那覇発。名越、名古屋発。香港にて全員合流後、カトマンドゥ着。
- 8日 キャラバンルートの一部変更 (カン・

ラ経由) 決定。

- 9日 食糧および装備の現地調達分準備完了。隊荷梱包開始。
- 11日 隊荷梱包完了。
- 12日 丹羽・山口・益田・花井・河合・清水・樋口・石橋・木崎・佐藤・名越、隊荷およびポーターとともにカトマンドゥ発。途中、ドゥムレでさらにポーターを雇用後、ポテオラル着。
- 13日 本隊ポテオラルよりキャラバン開始、ベシサハール泊。戸田カトマンドゥ発、ポテオラル泊。

14日 本隊ンガッティ泊。戸田クディ泊。小泉、ヨーロッパよりカトマンドゥ着。

15日 本隊シャンゲ泊。戸田、本隊に合流。

16日 本隊タール泊。後発隊、小泉・斎藤カトマンドゥ発、ポテオラル泊。

17日 本隊バガルチャップ泊。後発隊ブルブレ泊。

18日 本隊チャーメ泊。後発隊ジャガット泊。

19日 本隊ピサン泊。後発隊バガルチャップ泊。

20日 本隊ンガワール泊。後発隊プラタン泊。

21日 山口・石橋・木崎・佐藤、ンガワールに滞在し、追い付いた後発隊と合流。残り全員カン・ラを越え、ナル泊。ポーターの一部は、ナルまで荷を降ろしきれずに峠下にデポし、空身で下ってきた。

22日 本隊、ナル滞在。昨日の残置隊荷をポーターが回収する。山口・石橋・木崎・佐藤、および後発隊の小泉・斎藤がカン・ラを越え、ナル着。初めて14名全員が顔をそろえる。

23日 チャコの手前にて泊。

24日 山口・石橋・斎藤を除く全員、プーガウン泊。3名はチャコ手前に滞在。

25日 BC地点(4850m)到着・設営。花井・小泉がBC上部を偵察。山口・石橋・斎藤、プーガウン泊。

26日 登山活動開始。花井・小泉5650mまで往復・偵察、C1地点を決定。ポーターによりデポキャンプ(5250m)まで荷上げ。他の隊員は隊荷整理。山口・石橋・斎藤、BC着。

27日 [晴れ、夕方よりガス]
C1(5450m)建設。花井・小泉5800mまで往復・偵察のち、C1泊。丹羽・益田・清水・樋口・名越、C1まで往復。山口・河合・戸田・斎藤・木崎・佐藤、デポキャンプ付近まで往復。ポーターらによりデポキャンプおよびC1へ荷上げ。

28日 [晴れのち時々曇り、夜ガス]
花井・小泉・ニマ、5950mまで偵察・

荷上げののちC1上部でフィックス工作をしBCへ下山。丹羽・清水・樋口、C1入り・泊。山口・石橋・斎藤、C1上部まで往復。戸田、体調不良によりプーガウンへ下山。

29日 [曇り、上部はガス・小雪]

清水はダヌー・ニマと6000mまで往復・荷上げののち、C1泊。丹羽・石橋・斎藤・稜線(5800m)付近まで往復ののちC1泊。河合C1まで往復。樋口、体調不良につきBCへ下山、ガモウバッグの処置を受ける。別動隊の木崎・佐藤・名越、トレッキングのためBC出発。

30日 [晴れ、上部は時々ガス]

清水・斎藤、6150mまで偵察しC2地点を決定後、BCへ下山。丹羽・石橋、BCへ下山。戸田、プーガウンよりBCへ戻る。夜、全員にて登攀計画会議。

10月 1日 [曇りのち快晴]

C2(6000m)建設。花井・小泉・ニマ、BCよりC2入り・泊。ダヌー・プリ、C2へ荷上げ。山口・樋口、C1上部でフィックス工作ののちC1泊。河合・戸田、C1上部まで往復。

2日 [曇りのち快晴]

C3(6250m)建設。花井・小泉・ニマ、C3入り・泊。山口・樋口C2往復ののち、山口はBCへ下山、樋口はC1泊。清水・斎藤、C1入り・泊。ダヌー・プリ、C2へ荷上げののちダヌーC1泊、プリBC帰着。

3日 [晴れのち曇り、頂上はややガス]

第1次アタック隊花井・小泉・ニマ、C3発(5:50)。花井、途中で足先に冷感を覚えたためC3に戻り、処置後再び登高開始(8:30)。小泉・ニマ、登頂(10:45)。花井登頂(13:35)。小泉・ニマ、BC帰着(17:00)。花井、C3帰着(15:00)・泊。清水・樋口・斎藤・ダヌー、C2入り・泊。

- 河合・戸田・石橋・プリ、C1入り・泊。丹羽・山口・益田、BC上部の尾根にて交信モニター。
- 4日 [ガスのち晴れ、風強し]
花井、C1へ下山・泊。清水・樋口・斎藤・ダヌー、C3入り・泊。戸田・石橋・プリ、C2往復ののちC1泊。河合BCへ下山。益田C1入り・泊。
- 5日 [小雪、上部は雪・ガス]
第2次アタック隊清水・樋口・ダヌー、C3発(6:45)。悪天のため6550mで引き返し、C3帰着(9:45)・泊。斎藤、体調不良のためBCへ下山。石橋・プリ、C2入り・泊。益田・戸田C2下部まで往復ののち、益田はC1泊、戸田は体調不良のためBCへ下山。
- 6日 [晴れ、夕方よりガス]
第2次アタック隊C3発(6:30)。登頂(11:15)。C2帰着(17:15)・泊。石橋・プリ、C3入り・泊。小泉、BC上部の岩峰にて交信モニター。益田BCへ下山。夕方、3次アタックをもって登山活動を終了することを決定。
- 7日 [晴れ]
石橋の体調不良により、第3次アタック断念。石橋・プリC3より、清水・樋口・ダヌーC2より、花井C1より、それぞれ撤収しながら全員BC帰着。
- 8日 デポキャンプより荷下げし、上部キャンプの撤収完了。
- 9日 BC下部のカルカ(4500m)へ移動・泊。
- 11日 帰路用のポーター、カルカ到着。
- 12日 カルカより帰路キャラバン開始。山口・清水、プーガウン泊。他の全員はキャンプ泊。
- 13日 ナル泊。
- 14日 ポーター再雇用のため、ナル滞在。
- 15日 未明、キャンプに強盗侵入事件発生。ひと騒動ののちカン・ラを越え、ソガワール泊。
- 16日 花井・小泉・斎藤、カリガンダキ方面へのトレッキングに出発。本隊、隊荷とともにソガワール発、プラタン泊。
- 17日 バガルチャップ泊。
- 18日 チャムジェ泊。
- 19日 ソガッティ泊。
- 20日 ベシサハール泊。帰路キャラバン終了。
- 21日 トラックにてドゥムレまで、ドゥムレよりバスにてカトマンドゥ帰着。
- 24日 益田ネパール出国。
- 29日 隊荷通関。
- 30日 隊荷発送手続き完了。
- 11月 1日 ホテル“ヤク・アンド・イエティ”にて登頂祝賀会
- 2日 小泉ネパール出国。
- 3日 丹羽・山口・花井・河合・清水・斎藤ネパール出国。
- 10日 戸田ネパール出国。
- 20日 石橋ネパール出国。
- 27日 樋口ネパール出国。
- [別動隊 日程]
- 9月29日 BC発、キャン泊。
- 30日 ナル泊。
- 10月 1日 ソガワール泊。
- 2日 マナン泊。
- 4日 トロンベディ泊。
- 5日 トロンパスを越え、ムクチナート泊。
- 6日 マルファ泊。
- 7日 レテ泊。
- 8日 ダナ泊。
- 9日 シーカ泊。
- 10日 ティルケドゥンガ泊。
- 11日 ポカラ泊。
- 12日 カトマンドゥ帰着。
- 17日 木崎・佐藤ネパール出国。
- 27日 名越ネパール出国。

協力者芳名簿

(敬称略)

企業・団体

| | |
|-----------------------|---------------------|
| ICI石井スポーツ株式会社 | 日本レダリー株式会社 |
| 花王株式会社 | 武田薬品工業株式会社 |
| キャセイパシフィックエアウェイズリミテッド | 山之内製薬株式会社 |
| 東洋水産株式会社 | 日本アップジョン株式会社 |
| 株式会社トーモク | 大日本製薬株式会社 |
| 株式会社トレビ | 第一製薬株式会社 |
| 日本SPF豚協会 | 協和発酵工業株式会社 |
| 日本ソアリング株式会社 | 日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社 |
| ミナト医科学株式会社 | 田辺製薬株式会社 |
| 雪印乳業株式会社 | 日本チバガイギー株式会社 |
| 大塚製薬株式会社 | 東亜薬品工業株式会社 |
| 塩野義製薬株式会社 | 天藤製薬株式会社 |
| エーザイ株式会社 | カネボウ薬品株式会社 |
| 三共株式会社 | 旭化成工業株式会社 |
| 藤沢薬品株式会社 | 明治製菓株式会社 |
| 科研製薬株式会社 | フェイザー製薬株式会社 |
| ホクレン農業協同組合連合会 | 松下電器株式会社 |
| 日本農業工業株式会社 | 野外科学株式会社 |
| 株式会社ユニオン | 日昌株式会社 |
| 株式会社神戸製鋼所 | 株式会社ダイナックス |
| 中外製薬株式会社 | |

個人

| | | | |
|-------|-------------|--------|--------|
| 朝倉伊津子 | 大島 壽 | 津山 英之助 | 星野 公彦 |
| 池本博美 | 大宮 正二 | 長井 俊彦 | 前島 幸雄 |
| 石崎 貞子 | 奥田 等 | 長井 玲子 | 真砂 祥之助 |
| 石村 葆子 | 片山 豊 | 中川 惣太 | 松田 益義 |
| 市川 博一 | クリシナ テクミルシナ | 中川 嘉胤 | 松田 幸朝 |
| 市村 博 | 佐藤 和志 | 中村 俊明 | 森田 昌弘 |
| 今村 遼平 | 芝山 敏子 | 中脇 操 | 渡辺 共子 |
| 梅原文夫 | 谷沢 和隆 | 橋本 信 | |
| 衛藤 正敏 | 辻 良樹 | 横尾 禮子 | |

北大山の会会員

相田学
秋葉公太
明智洗一郎
浅野芳彦
朝比奈英三
東信彦
有波敏明
有馬純
有馬真夫
安藤朝夫
安藤久男
安間荘晃
庵谷一
池上宏文
井沢憲一郎
石井清一
石川守通
石下真三
石島隆雄
石橋恭一郎
石橋岳志
石松重雄
石村明也
石村実生
石本恵一
伊藤伸俊
井上孝喜
井上晴太郎
伊吹昌耕
今村博男
今村正克
今村正理
入川真祐三
岩崎和夫

上野八郎
内田武彦
越前谷幸平
衛藤藤孝俊
遠藤藤禎一
遠藤幸一
大井幸雄
大賀皓
大島穆
大淵俊明
大本昭弘
大本森信
岡啓次郎
岡島伸浩
岡田勝英
岡本丈夫
小河孝一
小尾崎顯一
小野寺平道
表弘雅英
片桐直哉
兜森前博
神谷晴夫
神谷正男
神田創造
菅野信三
菅野池徹
菊池徹雄
北古味夫
北村隆之
木村恒美
木村原実
清沓敏
沓工藤哲
熊野純男

黒川武
高地恒夫
河野晋三
神戸光一
小枝一夫
木幡貢年
小林欣一
駒澤正一
小山藤捷
小井田正一
酒田正勝
阪野茂晴
坂本浩輔
櫻林正雄
佐々木幸史
佐々木雅美
笹瀬貴弘
佐藤藤行
佐藤田壮
沢賀山弘
芝山良二
下沢英二
城本公晴
白濱久夫
杉野目浩
杉野目信彦
須崎弘泰
鈴木良博
鈴木長治
須住谷俊彦
住吉幸和
関沢人
関戸泰治
瀬戸純

高篠和憲
高田田敦徳
高田田寛昭
高橋昭一
高橋一穂
高橋剛治
高橋宏孝三
高橋仁浩
高橋昌也
高原秀彦
高松宗彦
高松英世
竹田花和雄
立花健太郎
田中孝太郎
照井尋実
登富ゆきし
富山宏平
豊田田春満
内藤尾一平
永尾島秀雄
中谷光俊治
中永光村一彦
中名取和義
新西川妻徹
西川信三
西川信博
西川安茂夫
西野森田四郎
野野村本本誠
野橋本本誠

橋本正人
橋本芳郎
浜名一純
原尾克一郎
東尾野明也
福藤見碩治
伏藤森原章二
藤原島信生
伏川川宇治
古川川幹一
古瀬夫健

古田進
前田仁一郎
牧野博恒
町田利明
町田利明
松下彰夫
松田田
松田村
松本伊智朗
水宮上定隆
宮地本隆
宮倉本真
村山林治郎

毛元利立夫
元木暉里
森康康
森英英
森八八
八木橋
安田田
安八代
矢野野
山山口
山崎崎

山田真弓
山本康博
吉井義一
吉田啓一
吉川啓一
吉谷川裕
米道山
米部山
渡邊山
渡邊山
渡邊山
渡邊山

事務局報告

高松秀彦

丹羽会員のヒムルソヒマール登山計画が形を成してきた1991年1月17日、中村晴彦会員と筆者の呼びかけにより、北大のヒマラヤ登山を考える会がもたれました。この会には以前に北大の海外登山にかかわった“登りたい人”や“登らせたい人”達20余名が集まりました。この会合ではヒマラヤ登山の実践的なことも議論されましたが、むしろ今後の北大山の会の海外登山の実行組織論のようなことが多く語られました。以下にこの会で合意されたことを簡略に記します。

- (1) 今回のヒムルソヒマール登山のみならず、会員のどんな規模の海外登山であっても、山の会の事業として直接・間接的に会員が楽しめるようにしてはどうか。
- (2) このヒムルソヒマール計画は小規模であり、山の会の事業といってもバルソツェ、ダウラギリのような重厚な実行組織は不要であろう。
- (3) 今後ともこのような海外登山が気軽に会員から発案され、実行できるようなシステムを考えよう。
- (4) このような考え方を全国の会員に問いかけよう、などでした。

このようなことから丹羽会員は当初はこの登山計画を個人山行にするつもりであったものを、あえて会則にのっとり山の会の事業とすべく会長に申請することにしました。またこの会合の考え方が骨格となって、後に会報71号に掲載された「北大山の会の海外登山事業についての理事会の提案」が成されました。ともかく、この会合は今回のヒムルソヒマール登山にとっては、いわゆる“登らせたいグループ”の核となって、後々もこの登山を支えることになりました。この年の山の会総会で、ヒムルソヒマール登山計画が山の会の事業となり、具体的支援方法は理事会に委ねられました。理事会では討議を重ねた結果、先に述べた海外登山事業についての理事会の提案を行うとともに、ヒムルソヒマール登山についてもこの案にそって実行されることになりました。その支援組織は以下のようなものです。

- (1) 登山計画の実行機関として事務局を置き、計画全般の最終決定は会長が行う。
- (2) 事務局は①登山隊長（発案者）、②発案者居住地の評議員、海外遠征委員、理事を含む会員有志、および③他地域の会員有志で構成する。
- (3) 事務局の責任者は、登山隊長の意向を勘案して会長が委嘱する。
- (4) 事務局の機能は、隊員構成、日程、資金状況、緊急時対策など、登山計画全般にわたる検討を行ない、事務局責任者が会長に報告するものとする、というものです。

この年の11月、筆者は会長より事務局責任者を委嘱され、以下のように事務局を構成しました。高松秀彦（責任者）、丹羽由紀夫（登山隊長）、小林年（海外遠征委員）、西安信（評議員）、上野八郎（理事）、益田稔（関西支部）、浜名純（東京支部）、斉藤捷一（東北支部）

山田知充（カトマンドゥ在住）の9名です。このうち各支部からの事務局員は、各支部長に御相談申して決めました。またカトマンドゥ在住であった山田知充会員は登山計画初期段階では隊員扱いとして、計画実行段階では事務局員として活動してもらいましたが、現地に在っての彼の活躍は大変貴重なものでした。

事務局会議は1991年11月12日以降毎月行いましたが、その仕事は先に述べたとうりです。中でも意を用いたのは、“登らせたいグループ”をひろげることでした。1992年4月3日の事務局会議は、この登山計画を再検討し、この登山が実行可能と判断し、4月7日に会長に報告しました。会長は登山計画全般にわたって検討され、ヒムルンヒマール登山の実行が最終的に決定されました。募金活動はこれより早く2月3日より開始され、全会員に趣意書を発送しお願いしました。会員諸氏からは絶大な御支援をいただき、あらためて感謝の意を表します。募金総額は厳冬期ダウラギリに及びませんでした。応募者の数はむしろ今回の登山の方が多く、会員諸氏の御理解と関心の深さを感じました。一方、支出に関しての責任者は、登山活動資金については登山隊長、その他については事務局責任者と区別しました。筆者が決裁した支出は、事務局会議で承認された隊長機密費（帰国後の東京、大阪での登頂報告会のための交通費も含む）20万円と社行会援助の8万円でした。

この間、登山隊の準備は着実に進行し、登山隊出国2ヶ月前の7月4日の山の会総会では、登山隊の準備は万端ととのった旨の報告を行えた程でした。これは、準備期間が長かったこと、募金の進捗が順調であったことなどによりますが、国内での余裕のある準備は登山による影響をあたえたものと思われました。

9月5日に登山本隊が出国しましたが、事務局体制はそのまま留守本部として機能しました。現地からFaxで入電する情報は、逐一、会長、各支部長、理事、事務局員、留守家族に報告しました。また全会員には葉書によるヒムルンヒマール便りとして、“登攀活動はじまる”、“登頂成る”、“登山終了ごあいさつ”と3回の報告を行いました。登頂の知らせは、丹羽隊長からの報告が外電による報道の方より相当おくれてジリジリしましたが、登攀活動が順調でメイルランナーの回転が間に合わないことが想像できました。

11月8日に登山本隊が帰国し、関連して行われたトレッキング隊も18日に帰国し、ヒムルンヒマール登山とその関連事業のすべてが完了しました。登頂報告会・祝賀会は11月20日に札幌のクラーク会館で行われ、さらに12月4日大阪と12月8日には東京で行われました。

この登山についての各種報告は、まず、ネパール政府により義務づけられた登山報告を丹羽隊長から観光省登山局に提出しました。この中で今回のヒムルンヒマール登頂は今までのヒムルンヒマールとは別の山頂への登頂であることを明確にしてあります。さらにAmerican Alpine Journal, Himalayan Journal, 山岳、岩と雪、岳人の5誌から原稿の依頼をうけて丹羽隊長が投稿し、逐次刊行されますが、正式報告書はご覧の本書であります。

最後に、今回の登山の支援は先に述べた理事会の提案にもとづく事務局方式で行われました。この理事会からの提案については賛否両論があるようですが、すくなくとも、登山隊を送り出す側にとっては、この方式は有用であったと思われました。

会計報告

収 入

| | |
|------------|------------|
| 隊員負担金 | 9,206,686 |
| 山の会会員寄附金 | 4,752,671 |
| 山の会会員外寄附金 | 1,110,000 |
| 振込手数料 | -17,750 |
| トレッキング隊寄附金 | 120,000 |
| 装備売却費 | 198,089 |
| 雑収入 | 28,145 |
| 合計 | 15,397,841 |

支 出

| 国内経費 | | 国外経費 | |
|-------|-----------|-----------|------------|
| 装備費 | 1,748,731 | 現地スタッフ保険料 | 107,867 |
| 食糧費 | 102,509 | 通関経費 | 43,448 |
| 梱包輸送費 | 1,068,568 | 輸送費 | 193,177 |
| 保険料 | 855,620 | 滞在費 | 751,167 |
| 医療費 | 268,745 | 装備費 | 505,423 |
| 渡航費 | 2,101,840 | 食糧費 | 290,292 |
| 登山料 | 531,975 | 現地スタッフ装備費 | 875,990 |
| 通信費 | 552,632 | 人件費 | 992,153 |
| 出版費用 | 2,189,738 | 代理店手数料 | 140,800 |
| 雑費 | 562,589 | 返送運賃 | 275,811 |
| 小計 | 9,982,947 | 雑費 | 529,794 |
| | | 小計 | 4,705,922 |
| | | 支出合計 | 14,688,869 |
| | | 残金 | 708,972 |
| | | 合計 | 15,397,841 |

残金は報告書費用清算後、山の会の会計に移管する。

ヒムルンヒマール関係文献・記録

「山の仲間 ヒマラヤへの道」 電々山岳連盟編 (株)東京出版センター1970年

「ヒムルン・ヒマール 1982 1983」弘前大学ヒムルンヒマール遠征隊 1989年

「ヒマラヤの高峰」 深田久弥著 白水社 1977年

「山岳年鑑83、84、86」 山と溪谷社

「ネパール・ヒマラヤ」 H.W.ティルマン 深田久弥訳 あかね書房 1971年

「ヒマラヤ巡礼」 D.L.スネルグローブ 吉永定雄訳 白水社 1975年

「コンサイス外国山名辞典」 吉沢一郎監修 三省堂 1984年

Gurung, N.J.: An Introduction to the Socio-economic Structure of Manang District, Kailash, 4(3), pp. 295-310 (1976)

Gurung, N.J.: An Ethnographic Note on Nar-Phu Valley, Kailash, 5(3), pp. 229-244 (1977)

Heimendorf, C.F.: Bhotia Highlanders of Nar and Phu, Kailash, 10(1-2), pp. 63-117 (1983)

The First Ascent of Himlung Himal

Himlung Himal Expedition 1992
Academic Alpine Club of Hokkaido

On September 5 of 1992, most members of our team arrived in Kathmandu. We had a permission to scale Himlung Himal from its west side in autumn season. The main group left Kathmandu on 12th for the approach march along Marsyangdi river. When we approached to Manang district, the path from Kodo to Meta was unable to go through since some of bridges over Nar Khola had fallen. Consequently, we had to access upper Nar Khola across Kang La from Ngawal to Nar (see map on page 11).

Passing by two interesting Tibetan villages of Nar and Phu, we established Base Camp at the height of 4850 meters on September 25. It was located at the upper border of one of pastures belonged to Phu (see map on page 38). Yaks, goats, sheep, herdsmen, and lamas of Tashi-gompa of Phu visited us everyday, while we stayed there.

From September 26, we started finding routes and setting advanced camps upwards. On the first day, Hanai and Koizumi made reconnaissance up to the height of 5620 meters and determined the site of Camp 1. The route from Base camp was on a moraine up to 5200 meters where a deposit camp was established later. From there, the route was taken on a stable glacier covered with snow. We set up Camp 1 at the height of 5450 meters on the glacier on September 27.

We made detour of a small icefall just above Camp 1 and reached an upper snow plateau. Then we took a route on a snow slope to the northwest ridge. We fixed ropes for 200 meters at the steep slope for the convenience of descent. Meanwhile some porters carried luggage up to the deposit and Camp 1. A part of members, Kizaki, Sato and Nagoshi left Base Camp on September 29, for their trekking journey to Pokhara via Thorung La and Kali Gandaki.

On October 1, Hanai, Koizumi and Nima sherpa left Base Camp and set up Camp 2 at 6000 meters on the northwest ridge. The route around Camp 2 was significantly wide and gentle slope covered with deep snow. They went along the snow ridge without any difficulty on the next day and set up Camp 3 at 6250 meters at the foot of the slope to the summit. They left Camp 3 at 6:00 a.m.

on October 3 and climbed on snow slope to the summit. Koizumi and Nima reached the summit at 10:45 a.m. They descended to Base Camp on the same day. Hanai felt so chilly at his toes on his way up to the summit because it blew very cold wind on that morning, he returned to Camp 3. After making some treatment, he started again and reached the summit at 13:35. The weather was fine on that day, and they took pictures of surrounding high peaks.

The second assault party of Shimizu, Higuchi, Saito and Danu sherpa set out Camp 2 on October 4 and stayed that night at Camp 3. Whereas they tried to make ascent on the next day, they had to stay at Camp 3 due to bad weather. Saito descended alone to Base Camp because of high altitude sickness on that day. The rest of the party climbed up to the summit on October 6. They got to the summit at 11:15 a.m. and descended to Camp 2. The final trial for the summit was made on October 7 by Ishibashi and Phuri sherpa. Although they set out Camp 3 on that morning, eventually they had to quit up ascending because Ishibashi had not acclimatized well and felt weary to go forward.

On October 7, members and sherpas on higher camps carried all gear and food down to Base Camp. We evacuated Base Camp on October 9 and moved down to a temporary residence of Phu named Pangari Kharka. We stayed there waiting for porters for two days and started return marching on October 12. Since the fallen bridges between Meta and Kodo were not repaired yet at that time, we made some donation for the reconstruction project and took the same route as forward journey crossing Kang La. Finally we returned in Kathmandu on October 21.

Members:

Yukio Niwa (Leader)
Osamu Hanai (Climbing leader)
Norio Kawai
Akio Koizumi
Hideaki Toda
Osamu Shimizu
Kazuo Higuchi
Eiji Ishibashi
Kiyokatsu Saito
Takeshi Yamaguchi
Minoru Masuda
Akio Nagoshi
Yukio Sato
Koshiro Kizaki

Liaison Officer:

Yeuddha Bahadur Gharti

Headman:

Ang Phuri Sherpa

High altitude porters:

Ang Nima Sherpa
Danu Sherpa

Cook:

Dolje Sherpa

編集後記

平成4年11月初旬のヒムルンヒマール遠征隊の帰国と共に登頂報告書の出版構想が具体化し始めた。遠征隊を送り出す役割の何度かの事務局会議の打合せの過程で、ヒムルンヒマール峰初登頂の成功を北大山の会会員とその関係者が揃って喜び、楽しめるような報告書を作りたいという高松秀彦事務局長の意向を受け、小生が編集の責任を取るようになった。このためには、当然ながら丹羽隊長を初めとする遠征隊員のチームワークの取れた全面的な参加が前提となることは言うまでもないことであった。

幸いにも札幌在住の隊員がほとんどであり、12月に第一回目の編集会議を持つことができた。ここでの合意事項の第一は、平成5年6月の北大山の会総会までには全会員のお手元に報告書をお届けしようという「迅速さ」を求めたことであった。

バルツェ遠征隊の報告書の一つのモデルに想定して、三つの印刷会社に見積を依頼し、1月11日の編集会議には第一回目の見積書が出揃った。幸いにも想定していた予算規模の範囲内で出版できる見通しがついたので、カラー写真ページを倍増した二度目の見積を求め、最終的に三浦印刷に御協力をお願いすることとした。

報告書の構成についてはご覧戴いている通りであるが、原稿は隊員全員が執筆することを前提として、印刷経費削減のため、ワープロ・フロッピーディスクにて3月8日迄に提出ということを決めた。これと並行して各隊員の写した写真の選定作業に入った。スライド、プリント、サイズのまちまちな写真を比較選定することを避け、グラフ商会にて、編集委員会への「つけ」で各人が自慢の写真を30～50枚キャビネ判にプリントして、次週に持参する。不採用のものは各人へ無料にて返却するというこの方式は見事に成功し一週間でプロ級を含む写真が数百枚も集まった。

1月、2月中は毎週一回のペースで編集委員会を開催したためか、懸念された原稿もほぼ期限通りに集まり、遠征隊員のチームワークの良さと相まって、ここに当初の予定通り報告書をお届けできた次第である。

最後に概念図の作成に御協力を戴いた熊野純男氏はじめ、関係の山の会会員諸氏、また採算を度外視して全面的に御協力を戴いた三浦印刷株式会社三浦義昌氏、担当者の山本潤氏に対して深甚の謝意を表する次第である。

平成5年5月9日 編集委員長 西 安信

もうひとつのヒムルソヒマール

平成5年5月31日発行

発行 北大山の会・山田真弓
連絡先 北海道大学農学部森林科学科 清水 収
060 札幌市北区北9条西9丁目
Phone:011-716-2111(Ext.3345)
印刷所 三浦印刷株式会社
札幌市中央区南9条西6丁目

本書記載の記事、写真及び地図の無断転載を禁ず
